第8節　第35次調査（平成29年度、PSK13）

（1）35-1トレンチ

①概要

35-1トレンチは開法寺地区に隣接する箇所で従前面的な調査が実施されていない箇所における包蔵状況の確認、開法寺東方地区と開法寺地区の境界構造の把握、建物配置状況の確認を目的として、5095-1番地に設定した。調査区は東西約14m、南北約20mの規模となる。調査の結果、調査区西端の開法寺地区との境に複数条の南北溝を確認し、当初目的であった開法寺地区との境の状況を把握することができた。さらに、開法寺東方地区の建物配置や変遷の検討が可能となる南北主軸の大型建物（面積123㎡）や鍛冶関連遺構等を検出するとともに、調査区北半と南半での検出遺構内容や密度の偏在性から開法寺東方地区に展開する大型建物群を含む施設の南辺を想定する材料を得ることができた。調査着手以前の地業の状態は水田であり、調査は9月から開始した。

②層序

本調査区は開法寺東方地区に広がる微高地の南端部に位置し、緩やかに南ないし東に傾斜し、南端部には歴史地理学の視点から古代末の完新世段丘崖と評価される2mに及ぶ段丘崖を認める（高橋1992、木下2011）。
微高地中央部に近い北辺部では微高地中央付近で遺構検出面となる黄褐色系粘質土はみられず、その下位に堆積するオリーブ黒色粘質シルト（図371北壁6層、東壁13層、図372西壁11層）が遺構検出面となる。本層位は東西方向にはほぼ水平に延びるが、南に向けて沈み込み、その上面の傾斜に沿って灰色粗砂（東壁12層）、灰黄褐色粘質土（東壁11層）が堆積する。古代の遺構面はそれらの層位上面となり、南や東にわずかに傾斜しながらも、標高15.3～15.2m前後のほぼ水平面が南端部まで連続する。古代遺構面とした層位の上には土器・瓦を多く包含する古代の地表面と考える層位が堆積し、（東壁10層、北壁5層）、その上位には近世以降の連続する水田層や複数の水田を合筆した層位を認める。

27～53は古代の地表面とした層位から出土した。元来遺構に帰属する遺物も多く含まれ、主要な遺物を選択的に抽出・図化した（図373.374）。27は燭台形の須恵器坏である。28は洛北産緑釉陶器椀である。9世紀後半。29は須恵器壺体部片である。外面には平行叩き痕を認め、褐色に発色する。東海系。9から10世紀。31は肩部に突帯が巡る壺である。広口壺ないし多口瓶が想定できる。西播磨産か。32～34は硯である。32は単面硯である。内面には重ね積みの痕跡を認める。33は円面硯の可能性が高く、34は蓋を転用する。35は坩場である。37は板状鉄斧と考えられる形態を呈するが、鉄素材の可能性を残す。38・39は砥石である。前者は方柱状を呈し、後者は遺存箇所のほぼ全面が顕著に摩耗し、線状痕も認める。

③検出遺構・出土遺物

SA2020（図375）

調査区中央部南寄りで検出した柵である。調査区内では8基の柱穴が直線的に並び、主軸方位は北86°西にとり、ほぼ正方位を指向する。柱穴掘方は隅丸方形を呈し、基盤層ブロックを多く含む黒褐色ないし暗褐色粘質土を基調とし、基盤層ブロックの包含量やわずかな土質の差異による細分が可能となる。後世の遺構と重複関係のないSP1144・SP1145の半裁調査を実施し、径約15㎝前後の柱痕を確認した。柱間はほぼ等間で約2.1mを測る。出土遺物は稀薄ながら、SP1144から丸瓦細片が出土した（61）。外面は丁寧なナデ調整を施し、凹面には模骨痕を認める。開法寺東方地区では正方位主軸ないし正方位主軸基調の柱穴からの瓦の出土は初例となる。帰属時期は主軸方位から7世紀末から8世紀初頭を想定しておきたい（註15）。

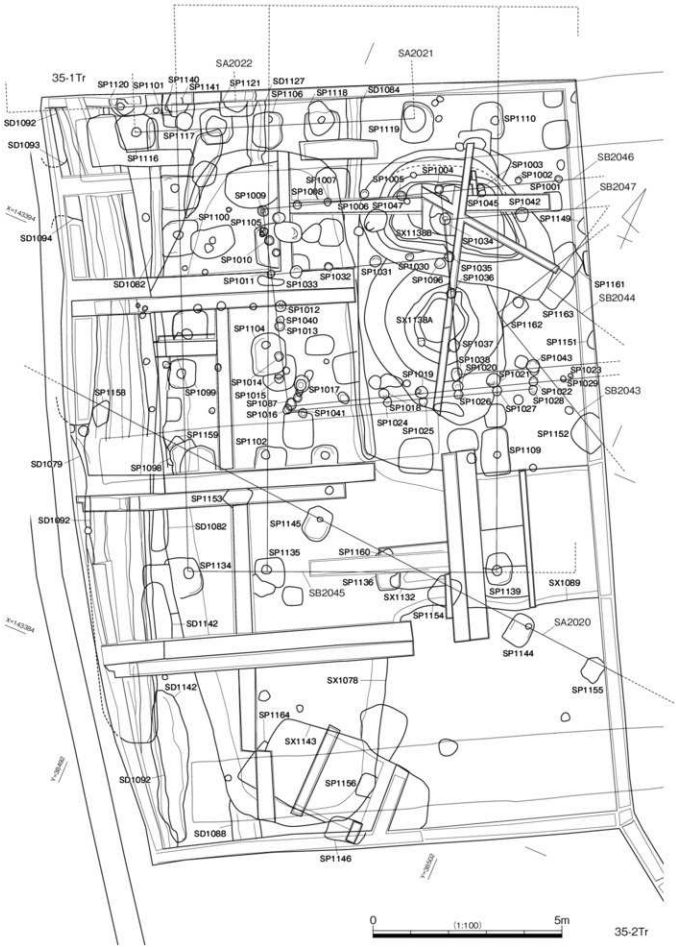
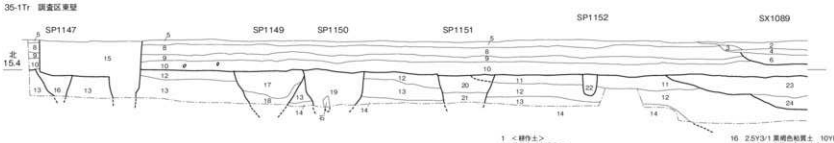
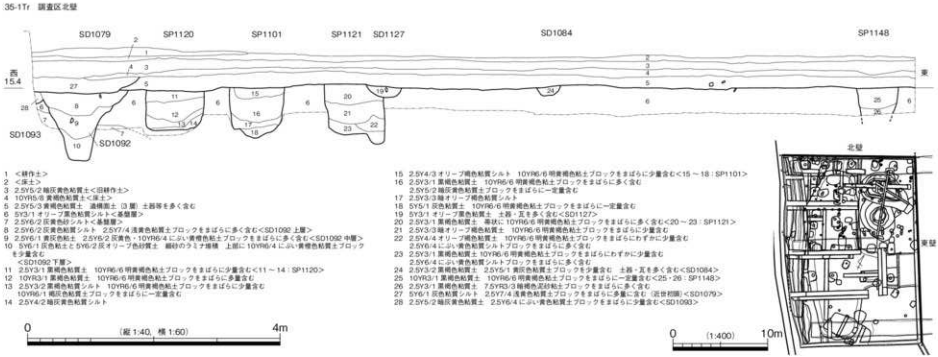


図 370　35-1Tr 遺構平面図

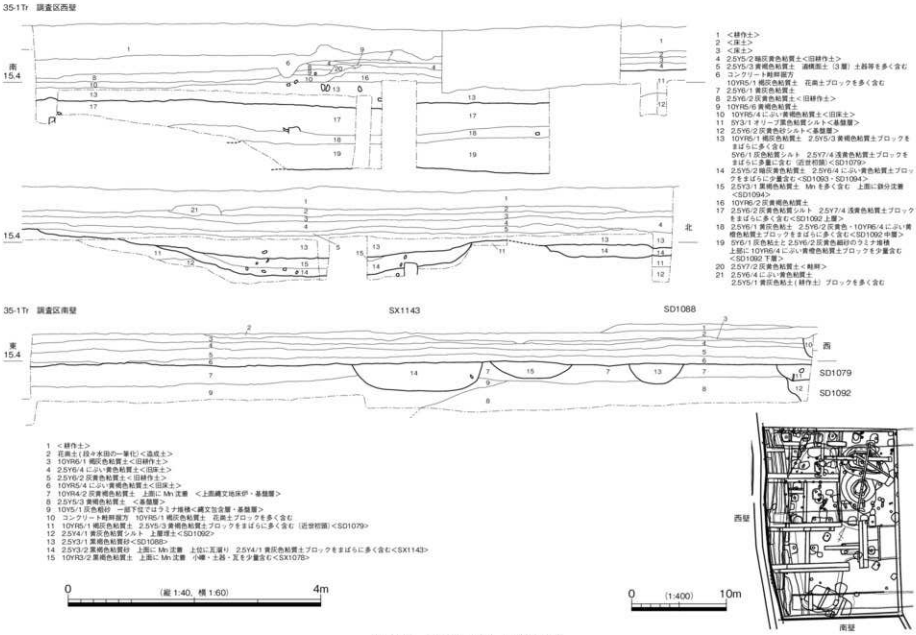


1 ＜緑作土＞
2 花崗土＜温成土＞
3 2.5Y4/1 黄灰色粘質土＜旧緑作土＞
4 2.5Y6/4 にぶい黄色粘質土＜床土＞
5 ＜床土＞
6 2.5Y6/2 灰黄色粘質土＜旧緑作土＞
7 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土＜旧床土＞
8 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土＜旧緑作土＞
9 10YR5/8 黄褐色粘質土＜旧床土＞
10 2.5Y5/3 黄褐色粘質土 遺構面土（3 層）土器等を多く含む
11 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 上面に Mn 沈着 遺物は基本含まない（IV層と以別）＜基盤層上面縄文地床炉・基盤層＞
12 10Y5/1 灰色粘砂 一部下位でいうミナ接積＜基盤層＞
13 5Y3/1 オリーブ黒色粘質シルト＜基盤層＞
14 2.5Y6/2 灰黄色砂シルト＜基盤層＞
15 塩出市トレ
16 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 10YR6/6 明黄褐色粘土ブロックをまばらに多量に含む（ブロック焼大）＜SP1147＞
17 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 10YR6/6 明黄褐色粘土ブロックをまばらに多量に含む（ブロック焼大）＜17・18：SP1149＞
18 10YR3/1 黒褐色粘質土 10YR6/6 明黄褐色粘土ブロックをまばらに一定量含む（ブロック焼小）
19 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 10YR6/6 明黄褐色粘土ブロックをまばらに一定量含む（ブロック焼中）＜19：SP1150＞
20 2.5Y3/2 黒褐色粘質土 10YR6/6 明黄褐色粘土ブロックをまばらに一定量含む（ブロック焼中）＜20・21：SP1151＞
21 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 10YR6/6 明黄褐色粘土ブロックをまばらに少量含む（ブロック焼小）
22 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質シルト＜SP1152＞
23 2.5Y3/2 黒褐色粘質砂＜23・24：SX1089＞
24 5Y3/1 オリーブ黒色粘質砂



1 ＜緑作土＞
2 ＜床土＞
3 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土＜旧緑作土＞
4 10YR5/8 黄褐色粘質土＜床土＞
5 2.5Y5/3 黄褐色粘質土 遺構面土（3 層）土器等を多く含む
6 5Y3/1 オリーブ黒色粘質シルト＜基盤層＞
7 2.5Y6/2 灰黄色砂シルト＜基盤層＞
8 2.5Y6/2 灰黄色粘質シルト 2.5Y7/4 浅黄色粘質土ブロックをまばらに多く含む＜SD1092 上層＞
9 2.5Y6/1 黄灰色粘土 2.5Y6/2 灰黄色・10YR6/4 にぶい黄褐色粘土ブロックをまばらに多く含む＜SD1092 中層＞
10 5Y6/1 灰色粘土と 5Y6/2 灰オリーブ色砂質土 細砂のラミナ接積 上面に 10YR6/4 にぶい黄褐色粘質土ブロックを少量含む
＜SD1092 下層＞
11 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 10YR6/6 明黄褐色粘土ブロックをまばらに少量含む＜11～14：SP1120＞
12 10YR3/1 黒褐色粘質土 10YR6/6 明黄褐色粘土ブロックをまばらに多量含む
13 2.5Y3/2 黒褐色粘質シルト 10YR6/6 明黄褐色粘土ブロックをまばらに少量含む
10YR6/1 褐灰色粘質土ブロックをまばらに一定量含む
14 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質シルト
15 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質シルト 10YR6/6 明黄褐色粘土ブロックをまばらに少量含む＜15～18：SP1101＞
16 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 10YR6/6 明黄褐色粘土ブロックをまばらに多く含む
2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土ブロックをまばらに一定量含む
17 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質シルト
18 5Y5/1 灰色粘質土 10YR6/6 明黄褐色粘土ブロックをまばらに一定量含む
19 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土 土器・瓦を多く含む＜SD1127＞
20 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 南状に 10YR6/6 明黄褐色粘土ブロックをまばらに多く含む＜20～23：SP1121＞
21 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質土 10YR6/6 明黄褐色粘土ブロックをまばらに少量含む
22 2.5Y4/4 オリーブ褐色粘質土 10YR6/6 明黄褐色粘土ブロックをまばらにわずかに少量含む
2.5Y6/4 にぶい黄色粘質シルトブロックをまばらに多く含む
23 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 10YR6/6 明黄褐色粘土ブロックをまばらにわずかに少量含む
2.5Y6/4 にぶい黄色粘質シルトブロックをまばらに多く含む
24 2.5Y3/2 黒褐色粘質土 2.5Y5/1 黒灰色粘質土ブロックを少量含む 土器・瓦を多く含む＜SD1084＞
25 10YR3/1 黒褐色粘質土 10YR6/6 明黄褐色粘土ブロックをまばらに一定量含む＜25・26：SP1148＞
26 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 7.5YR3/3 暗褐色泥砂粘土ブロックをまばらに多く含む
27 5Y6/1 灰色粘質シルト 2.5Y7/4 浅黄色粘質土ブロックをまばらに多量に含む（泥世初期）＜SD1079＞
28 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土 2.5Y6/4 にぶい黄色粘質土ブロックをまばらに少量含む＜SD1093＞

図 371　35-1Tr 東壁．北壁断面図



1 ＜耕作土＞
2 ＜床土＞
3 ＜床土＞
4 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土＜旧耕作土＞
5 2.5Y5/3 黄褐色粘質土 湯構面土（3層）土器等を多く含む
6 コンクリート畦畔面方
10YR5/1 褐灰色粘質土 花崗土ブロックを多く含む
7 2.5Y6/1 黄灰色粘質土
8 2.5Y6/2 灰黄色粘質土＜旧耕作土＞
9 10YR5/6 黄褐色粘質土
10 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土＜旧床土＞
11 5Y3/1 オリーブ黒色粘質シルト＜基盤層＞
12 2.5Y6/2 灰黄色砂シルト＜基盤層＞
13 10YR5/1 褐灰色粘質土 2.5Y5/3 黄褐色粘質土ブロックをまばらに多く含む
5Y6/1 灰色粘質シルト 2.5Y7/4 浅黄色粘質土ブロックをまばらに多量に含む（近世初頭）＜SD1079＞
14 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土 2.5Y6/4 にぶい黄色粘質土ブロックをまばらに少量含む＜SD1093・SD1094＞
15 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 Mn を多く含む 上面に鉄分沈着＜SD1094＞
16 10YR6/2 灰黄褐色粘質土
17 2.5Y6/2 灰黄色粘質シルト 2.5Y7/4 浅黄色粘質土ブロックをまばらに多く含む＜SD1092 上層＞
18 2.5Y6/1 黄灰色粘土 2.5Y6/2 灰黄色・10YR6/4 にぶい黄褐色粘質土ブロックをまばらに多く含む＜SD1092 中層＞
19 5Y6/1 灰色粘土と 2.5Y6/2 灰黄色細砂のラミナ堆積
上部に 10YR6/4 にぶい黄褐色粘質土ブロックを少量含む＜SD1092 下層＞
20 2.5Y7/2 灰黄色粘質土＜畦畔＞
21 2.5Y6/4 にぶい黄色粘質土
2.5Y5/1 黄灰色粘土（耕作土）ブロックを多く含む

1 ＜耕作土＞
2 花崗土（段々水田の一筆化）＜造成土＞
3 10YR6/1 褐灰色粘質土＜旧耕作土＞
4 2.5Y6/4 にぶい黄色粘質土＜旧床土＞
5 2.5Y6/2 灰黄色粘質土＜旧耕作土＞
6 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土＜旧床土＞
7 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 上面に Mn 沈着 ＜上面縄文地床炉・基盤層＞
8 2.5Y5/3 黄褐色粘質土 ＜基盤層＞
9 10Y5/1 灰色砂砂 一部下位ではラミナ堆積＜縄文加金層・基盤層＞
10 コンクリート畦畔面方 10YR5/1 褐灰色粘質土 花崗土ブロックを多く含む
11 10YR6/1 褐灰色粘質土 2.5Y5/3 黄褐色粘質土ブロックをまばらに多く含む（近世初頭）＜SD1079＞
12 2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト 上層埋土＜SD1092＞
13 2.5Y3/1 黒褐色粘質砂＜SD1088＞
14 2.5Y3/2 黒褐色粘質砂 上面に Mn 沈着 上位に瓦溜り 2.5Y4/1 黄灰色粘質土ブロックをまばらに多く含む＜SX1143＞
15 10YR3/2 黒褐色粘質土 上面に Mn 沈着 小礫・土器・瓦を少量含む＜SX1078＞

図 372 35-1Tr 西壁，南壁断面図

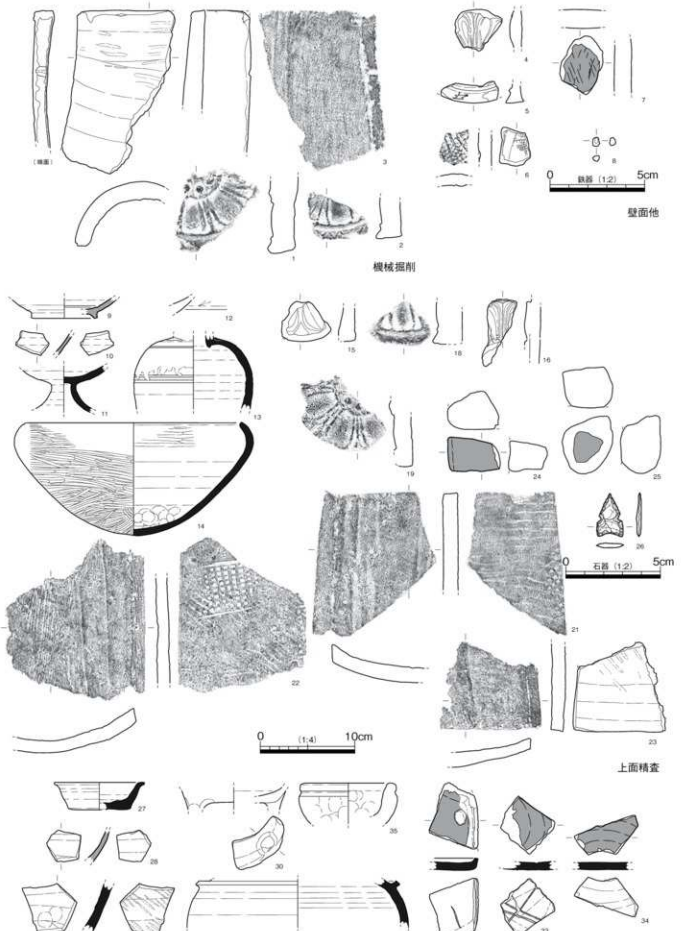


図 373　35-1Tr 包含層出土遺物 1

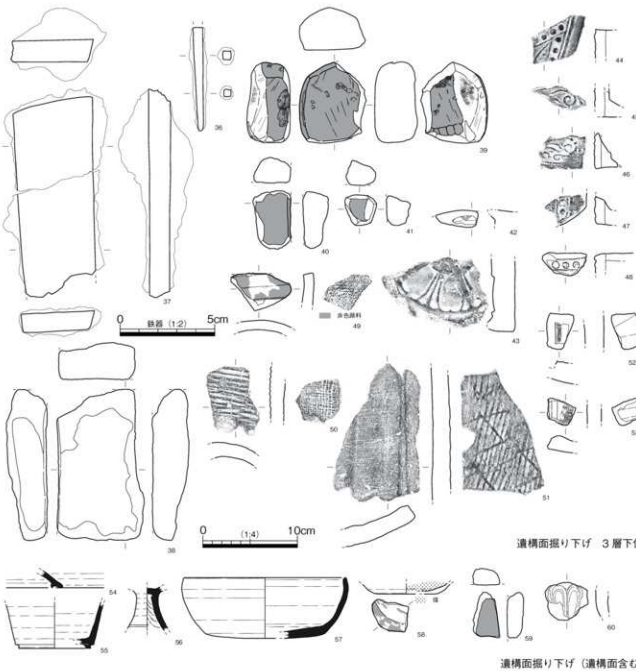


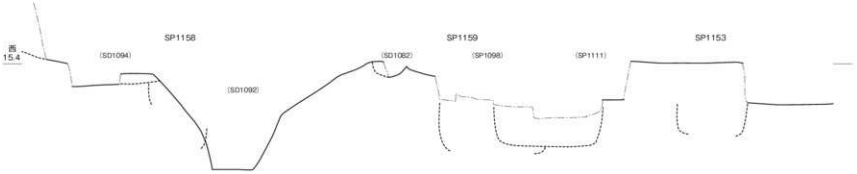
図 374　35-1Tr 包含層出土遺物 2

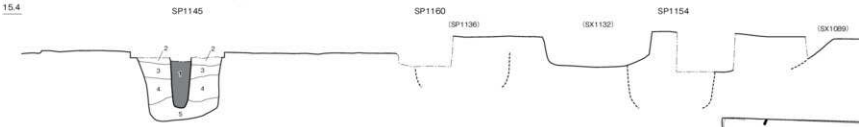
SB2043.SB2044（図 370.376）

SB2043 は調査区東端北寄りで検出した掘立柱建物である。黒褐色粘質土埋土に黄褐色粘質土ブロックを多量に含む特徴的な埋土の柱穴が L 字形に 3 基並ぶことから、復元を試みた。10 世紀中葉前後を想定する SX1138 や正方位主軸の SB2044 に先行する重複関係を有する。東西主軸であれば主軸方位は北 62° 西にとり、周辺の条里地割や正方位とは異なる方位となる。34-2 トレンチの SB2008・2028・2029 や 33-2 トレンチなどで正方位からやや振れた主軸方位の建物を確認しており（33-2Tr・SB2020）、後述する SB2044 に先行する時期に正方位主軸基調の建物が存在した可能性も想定できる（註 16）。

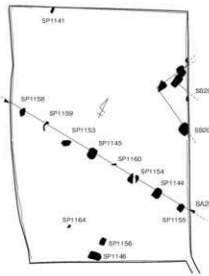
掘り下げ調査は行っていないため、出土遺物はないが、7 世紀後葉頃の帰属時期を想定しておきたい。

SB2044 も SB2043 と同様に、3 基の柱穴から復元した掘立柱建物である。掘方は隅丸方形を呈し、上面埋土は黄褐色粘質土ブロックを多く含む黒褐色粘質土となる。主軸方位は北 87° 西であり、ほぼ正方位を指向する。掘り下げは行っていないが、SB2043 に後出し、正方位主軸であることから、7 世紀末から 8 世紀初頭の帰属時期を想定しておきたい。





SP1144全体掘り下げ



0 (1:30) 1m

0 (1:4) 10cm

0 (1:300) 10m

図 375 35-1Tr・SA2020 平断面図及び出土遺物

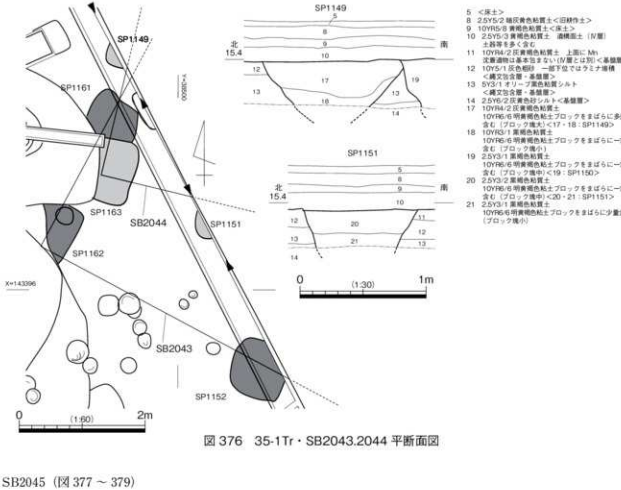


図 376　35-1Tr・SB2043.2044 平断面図

SB2045（図 377 ～ 379）

調査区北半を中心に検出した掘立柱建物である。北端部は調査区外に延長する。7 世紀後葉から 8 世紀初頭の SA2020・SD1127 に後出し、10 世紀中葉頃の SX1138 や 12 世紀後半から 13 世紀の SB2046・2047・12 世紀後半頃埋没の SX1078 等に先行する重複関係を有する。平面プランは梁間 2 間（約 6.3 m）、桁行 5 間以上（約 12.2 m以上）、西面廂構造となり、周辺の条里地割に合致した方位の東西主軸建物である（北 23° 西）。北に 1 間延び、身舎は 2 × 5 間と考えられる（梁間約 6.3 m、桁行約 15 m）。身舎復元面積は 94.5 ㎡、西廂を含めた復元面積は 123 ㎡を測る。廂筋は本調査区北の 33-2TrSB2022・2023 の西辺と直線ラインで揃い、建物配置に規格性が窺える。なお、廂柱穴深度は極めて浅く、東にわずかに傾斜する旧地形、開法寺東方地区と開法寺地区の境界部分における西面廂構造の建物の存否等を考慮すると、元来は両面廂であった可能性が高い。

身舎の柱穴掘方は建物主軸やそれに直交する方向に辺をほぼ揃えた隅丸方形を呈し、掘方規模は建物規模に呼応し、一辺約 0.8 ～ 1.2 m と大きい。深度は 0.6 m前後を測り、上半は SX1078 などにより失われるが、底面レベルは標高約 14.8 mで揃う。柱痕は各柱穴で 1 基のみ検出し、柱痕径は 20 cmをわずかに下回る。柱筋の通りは良好で、柱間は桁行で大部分は 3.0 mの等間だが、SP1106・SP1105 間のみ 2.5 mと不揃いである。梁間は SP1136 の柱痕が未確認だが、隅柱間から 3.1 mに復元できる。礎板石等の下部施設は認められない。裏込めは灰黄褐色・黒褐色・にぶい黄橙色・暗灰黄色粘質土ないし粘質シルトを細かな単位で施し、層厚は総じて薄い。埋土には焼土・炭化物を含まず、帰属時期を示唆する。廂柱穴は桁行と柱筋が食い違う箇所を多く認め、掘方平面は安定するが、深度は極めて浅く、埋土も安定しない。

多くの柱穴で半裁調査を実施したが、出土遺物は極めて少なく、62 ～ 67 に細片まで含めて図化した。裏込め出土遺物である 67 は突起状の形態を呈する不明品である。須恵器坏（66、68）は 9 世紀前葉から中葉頃の所産と考えたい。抜き取り出土の土師器坏（62 ～ 64）は 10 世紀前葉頃の所産であろう。帰属時期は判断し難いが、遺構の重複関係や建物配置状況、出土遺物から、9 世紀後葉頃の建立、10 世紀初頭から前葉頃の廃絶を想定しておきたい。

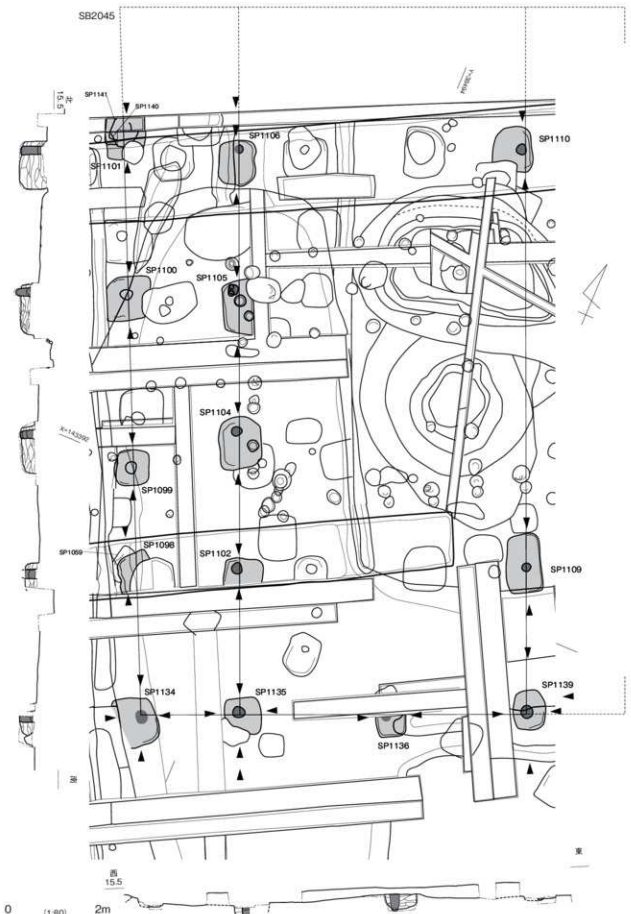
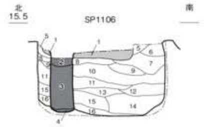
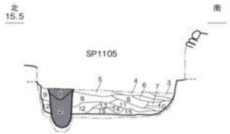


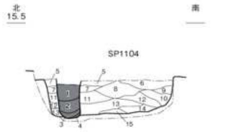
図 377　35-1Tr・SB2045 平断面図



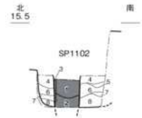
1 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土
10YR7/8 黄橙色粘質土ブロックをまばらに多く含む<抜き取り>
2 10YR4/2 灰黄褐色粘質土
10YR7/8 黄橙色粘質土ブロックをまばらに少量含む<2～4：柱痕>
3 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土
10YR7/8 黄橙色粘質土ブロックをまばらに少量含む
4 2.5Y6/1 黄灰色粘質シルト　スタンプ状
上面が 10YR6/6 明黄褐色に変色
5 10YR4/2 灰黄褐色粘質土<5～16：裏込め>
6 2.5Y3/2 黒褐色粘質土
10YR7/8 黄橙色粘質土ブロック細片をわずかに含む
7 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質土
10YR7/8 黄橙色粘質土ブロックをまばらに多く含む
8 10YR4/2 灰黄褐色粘質土
10YR7/8 黄橙色粘質土ブロックをまばらに多く含む
9 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土
10YR7/8 黄橙色粘質土ブロックをまばらに少量含む
10 7.5YR4/1 褐灰色粘質土
10YR7/8 黄橙色粘質土ブロック・2.5Y6/4 にぶい黄色粘質シルトブロック・
10YR3/1 黒褐色粘質土ブロックをまばらに多く含む
11 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土
2.5Y6/4 にぶい黄色粘質シルトブロック・10YR3/1 黒褐色粘質土ブロックをまばらに多く含む
12 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト　10YR7/8 黄橙色粘質土ブロック・
10YR3/1 黒褐色粘質土ブロックをまばらに多く含む
13 2.5Y5/3 黄褐色粘質シルト
2.5Y6/4 にぶい黄色粘質シルトブロックをまばらに多量に含む
14 2.5Y5/3 黄褐色粘質シルト
10YR3/1 黒褐色粘質土ブロックをまばらに一定量含む
15 2.5Y3/2 黒褐色粘質シルト　10YR7/8 黄橙色粘質土ブロック・
2.5Y6/4 にぶい黄色粘質シルトブロックをまばらに一定量含む
16 2.5Y6/3 にぶい黄色粘質シルト



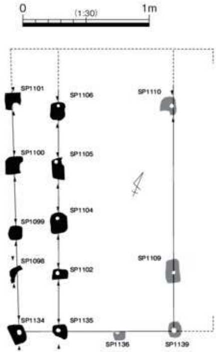
1 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土
10YR7/8 黄橙色粘質土ブロックをまばらにわずかに含む　2.5Y6/1 黄灰色粘質土ブロックをまばらに一定量含む<1・2：柱痕>
2 2.5Y7/2 灰黄色粘質シルト
2.5Y6/4 にぶい黄色粘質シルトブロックをまばらに多く含む
3 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質シルト
10YR3/1 黒褐色粘質土ブロックをまばらにわずかに含む<3～15：裏込め>
4 10YR6/2 灰黄褐色粘質シルト
2.5Y6/4 にぶい黄色粘質シルトブロックをまばらに多く含む
5 2.5Y3/1 黒褐色粘質土
10YR7/8 黄橙色粘質土ブロックをまばらに少量含む
6 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質シルト
10YR7/8 黄橙色粘質土ブロックをまばらに少量含む
7 2.5Y5/3 黄褐色粘質シルト
8 2.5Y6/4 にぶい黄色粘質シルト
9 2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト
10YR7/8 黄橙色粘質土ブロックをまばらに一定量含む
10 2.5Y5/3 黄褐色粘質シルト
11 2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト
2.5Y6/4 にぶい黄色粘質シルトブロックをまばらに一定量含む
12 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質シルト
2.5Y6/4 にぶい黄色粘質シルトブロックをまばらに一定量含む
13 2.5Y6/3 にぶい黄色粘質シルト
14 2.5Y6/2 灰黄色粘質シルト
15 2.5Y6/4 にぶい黄色粘質シルト

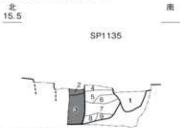


1 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質シルト　10YR7/8 黄橙色粘質土ブロック・
10YR3/1 黒褐色粘質土ブロックをまばらに少量含む<1～4：柱痕>
2 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質シルト　10YR7/8 黄橙色粘質土ブロック・
10YR3/1 黒褐色粘質土ブロックをまばらに少量含む
3 2.5Y6/1 黄灰色粘質シルト
2.5Y6/4 にぶい黄色粘質シルトブロックをまばらに少量含む
4 10YR6/6 明黄褐色粘質土　柱痕スタンプ
5 10YR5/2 灰黄褐色粘質土
10YR7/8 黄橙色粘質土ブロックをまばらに多く含む<5～15：裏込め>
6 10YR6/3 にぶい黄橙色粘質土
10YR7/8 黄橙色粘質土ブロックをまばらに少量含む
7 10YR4/1 褐灰色粘質土
10YR7/8 黄橙色粘質土ブロックをまばらに少量含む
8 2.5Y5/3 黄褐色粘質シルト
9 2.5Y6/3 にぶい黄色粘質シルト
10 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質シルト
2.5Y6/4 にぶい黄色粘質シルトブロックをまばらに多く含む
11 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト　10YR7/8 黄橙色粘質土ブロック・
2.5Y6/4 にぶい黄色粘質シルトブロックをまばらに一定量含む
12 2.5Y6/2 灰黄色粘質シルト
2.5Y6/4 にぶい黄色粘質シルトブロックをまばらに多く含む
13 5Y5/1 灰色粘質シルト
2.5Y6/4 にぶい黄色粘質シルトブロックをまばらに多く含む
14 10YR5/1 褐灰色粘質土　10YR7/8 黄橙色粘質土ブロックをまばらに
一定量含む　2.5Y6/4 にぶい黄色粘質シルトブロックをまばらに多く含む
15 2.5Y5/3 黄褐色粘質シルト　(2.5Y6/4 にぶい黄色粘質シルトブロック層)

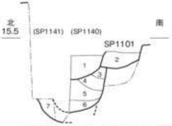


1 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質シルト
10YR7/8 黄橙色粘質土ブロックをまばらにわずかに含む
<1～2：柱痕>
2 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト
3 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質砂<柱の腐食部分に流込した埋土>
4 2.5Y3/2 黒褐色粘質土
10YR7/8 黄橙色粘質土ブロックをまばらに多く含む
<4～8：裏込め>
5 10YR7/6 明黄褐色粘質土
(10YR7/8 黄橙色粘質土ブロック対応)
6 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土
10YR7/8 黄橙色粘質土ブロックを少量含む
2.5Y6/4 にぶい黄色粘質シルトブロックをまばらに多く含む
7 2.5Y6/3 にぶい黄色粘質シルト
8 10YR4/1 褐灰色・2.5Y6/4 にぶい黄色粘質シルトブロックを
まばらに多量に含む

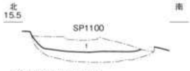




1 10YR6/3 にぶい黄橙色粘質シルト
10YR7/8 黄橙色粘質土ブロックをまばらに少量含む<別ピット>
2 10YR6/1 褐灰色粘質土<2・3：柱痕>
3 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質シルト
4 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質土
10YR7/8 黄橙色粘質土ブロックをまばらに多く含む<4～9：裏込め>
5 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土
6 2.5Y5/1 黄灰色粘質シルト
2.5Y6/4 にぶい黄色粘質シルトブロックをまばらに多く含む
7 2.5Y3/2 黒褐色粘質土
10YR7/8 黄橙色粘質土ブロックをまばらに少量含む
2.5Y6/4 にぶい黄色粘質シルトブロックをまばらに多く含む
8 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質シルト
2.5Y6/4 にぶい黄色粘質シルトブロックをまばらに多量に含む
9 2.5Y6/3 にぶい黄色粘質シルト



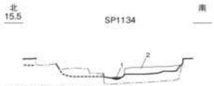
1 2.5Y6/2 灰黄色粘質土　10YR4/1 褐灰色・2.5Y7/6 明黄褐色粘質土ブロックをまばらに多く含む<SP：1140>
2 2.5Y6/3 にぶい黄色粘質シルト　10YR5/1 褐灰色粘質土をまばらに多く含む<SP1101>
3 10YR4/1 褐灰色粘質土　10YR7/4 にぶい黄橙色粘土ブロックをまばらに一定量含む
4 10YR7/4 にぶい黄橙色粘質土
5 10YR3/1 黒褐色粘質シルト
6 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質シルト
7 2.5Y3/1 黒褐色粘質土　10YR7/8 黄橙色粘土ブロック破片をまばらに少量含む<SP1141>



1 2.5Y6/2 灰黄色粘質シルト
10YR6/1 褐灰色粘質土ブロックをまばらに多く含む

1 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト
10YR3/1 黒褐色粘質土ブロックを
まばらに少量含む

1 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト
10YR3/1 黒褐色粘質土ブロックをまばらに少量含む
<SP1098>
2 7.5YR3/1 黒褐色粘質土
10YR6/4 にぶい黄橙色粘質土ブロックをまばらに多く含む
<SP1159>



1 10YR6/1 褐灰色粘質土<柱痕>
2 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト　10YR3/1 黒褐色粘質土ブロックをまばらに少量含む

図 378　35-1Tr・SB2045 断面図

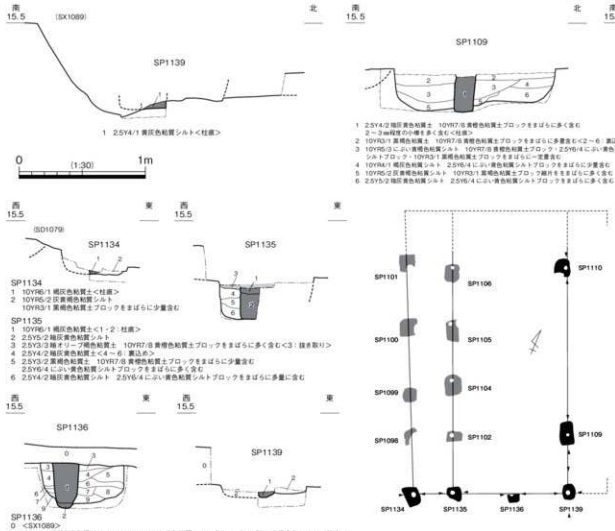


図 379　35-1Tr・SB2045 断面図及び出土遺物

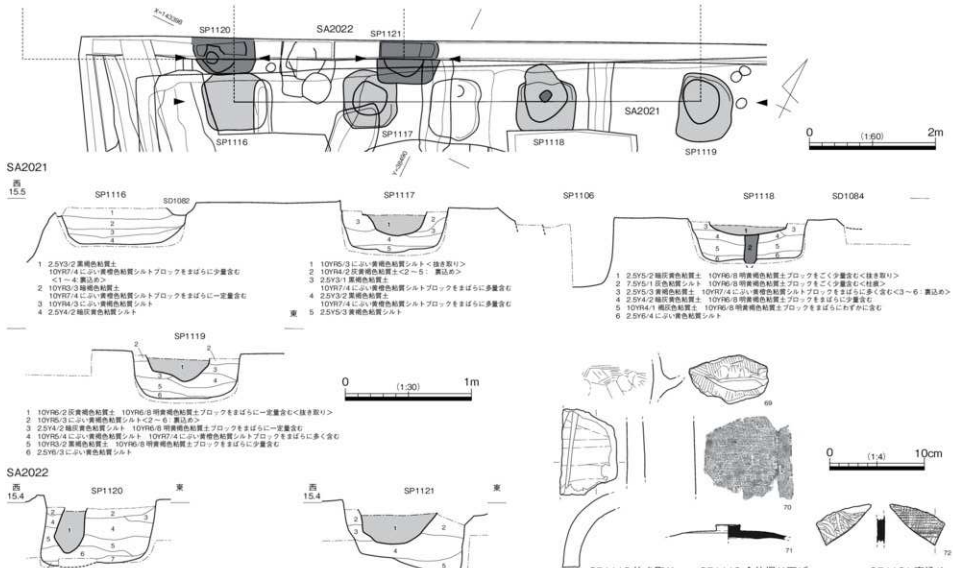


図 380　35-1Tr・SA2021.2122 平断面図及び出土遺物

SA2021（図 380）

調査区北西隅で検出した４基の柱穴からなる柱穴列である。東端に位置する SP1119 東延長部の等間位置に柱穴はみられず、西側は調査区外となるが、梁間３間の南北主軸建物である可能性が高い。SA2022・SD1082 に先行する重複関係を認めるが、SB2045 の柱穴との重複関係はない。東西主軸方位は北 65° 東にとり、周辺の条里地割に合致した方位を呈する。柱穴掘方は建物主軸やそれに直交する方向に辺をほぼ揃えた隅丸方形を呈し、一辺約 0.9 m前後を測る。柱間は 2.4 m前後に復元できる。柱穴深度は総じて約 0.4 m前後を測り、底面標高は遺構面標高に呼応し、東に向けて深くなる。SP1118 で径約 10 cmの柱痕を検出し、上位に抜き取り痕を認める。裏込めは基盤層ブロックを多く含む黒褐色・黄褐色・褐灰色粘質土ないし粘質シルトの互層で、層厚はやや細かい。69 ～ 71 は SA2021 出土遺物である。須恵器蓋（71）の出土層位は不明だが、８世紀中葉頃の所産と考えられる。帰属時期は出土遺物の年代観を最大限評価し、遺構や建物の重複関係から８世紀前葉から中葉頃に求めておきたい。

SA2022（図 380）

調査区北西隅で検出した２基の柱穴である。周辺で組み合う柱穴はないが、掘方規模が大きく、暫定的に柱穴列として報告する。SA2021 に後出する重複関係を認める。掘方は隅丸方形を呈し、一辺１m前後に復元できる。深度 0.6 mを測り、黒褐色・黄橙色・暗灰黄色粘質土ないし粘質シルトの互層で、基盤層（黄褐色粘質土）ブロックを多く含み、焼土・炭化物は認められない。層厚は厚い。柱痕は未検出だが、いずれも抜き取り痕を認める。出土遺物は稀薄で、須恵器甕（72）が図示し得た唯一の遺物となる。帰属時期は SA2021 に後出する重複関係や SB2045 との関係から、８世紀後葉から９世紀中葉頃のいずれか帰属するものと考えておきたい。

SB2046.2047（図 381.382）

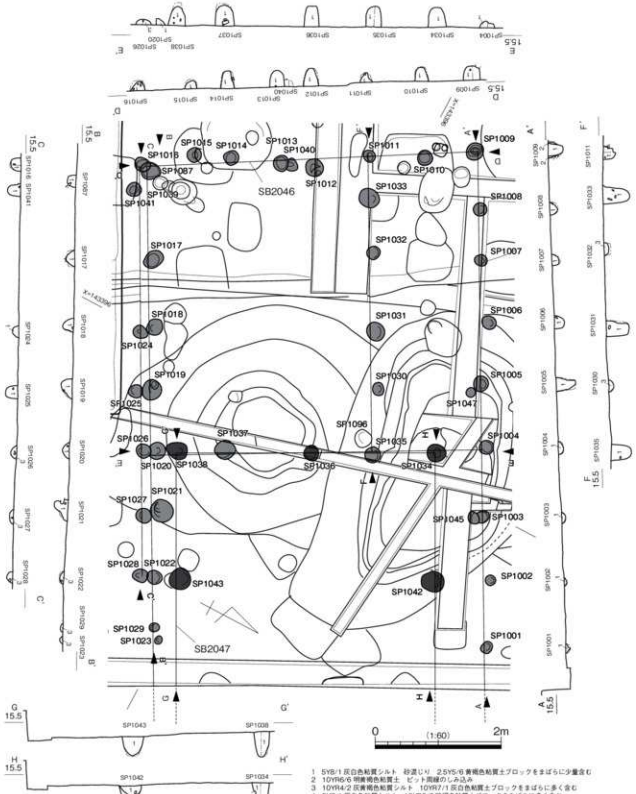
調査区北東部で検出した東西主軸の掘立柱建物群である。下位遺構の調査に万全を期すため、完掘した。２つの建物が重なるが、柱穴に重複関係はみられず、西端付近は 12 世紀後半頃埋没の SX1078 が開削面となる。SB2046 は約１m間隔の柱間で側柱が並び、内部を３区画する東西、南北の柱筋を認め、南側柱と東梁間の南側のみわずかにずれた位置で柱穴が重複する（建て替え痕跡か）。梁間 5.2 ～ 5.3 m、桁行８m以上を測り、建物面積は 42 ㎡を超える。規模や内部の仕切りには 30 cmを基軸とした尺度が用いられる。柱穴規模は 0.2 ～ 0.3 mを測り、すべて円形の平面形を呈する。柱穴深度は浅く、0.1 ～ 0.3 mを測り、埋土は灰白色ないし灰黄褐色粘質シルトの単一層となる。73 ～ 81 は SB2046 出土遺物である。古相を示す遺物を少量含むが、土師質土器椀（73.74）、土師質土器小皿（79）、瓦器椀（78）から、12 世紀後半から 13 世紀の帰属時期が想定できる。75・77 の内面には煤が付着し、灯明具としての使用が想定できる。

SB2047 は SB2046 の西半と重複する箇所で検出した。梁間２間（約 4.1 m）、桁行２間以上（約 3.8 m以上）、15.6 ㎡以上の面積を測る。柱穴は径 0.3 mを測り、SB2046 より大きい。平面形は円形で、深度は 0.2 ～ 0.4 mとやや深い。埋土は灰白色粘質シルトとなる。82 ～ 85 は SB2047 出土遺物である。土師質土器椀（82.84）から、SB2046 と同様に、12 世紀後半から 13 世紀の帰属時期を想定しておきたい。85 は鉄滓である。本遺構の下位には鍛冶関連遺構が所在し（SX1138）、元来、同遺構に包含されたものとなる。

建物非構成柱穴（図 383）

建物を構成しない柱穴の掘り下げは行っていないが、建物構成柱穴と重複関係のある柱穴は全体下げ（一段下げ）を実施しており、その際出土した遺物を図示した。いずれも 12 ～ 13 世紀代に属する遺物である。

図 383　35-1Tr 柱穴出土遺物


SB2046
SB2047
SP1001
SP1002
SP1003
SP1004
SP1005
SP1006
SP1007
SP1008
SP1009
SP1010
SP1011
SP1012
SP1013
SP1014
SP1015
SP1016
SP1017
SP1018
SP1019
SP1020
SP1021
SP1022
SP1023
SP1024
SP1025
SP1026
SP1027
SP1028
SP1029
SP1030
SP1031
SP1032
SP1033
SP1034
SP1035
SP1036
SP1037
SP1038
SP1039
SP1040

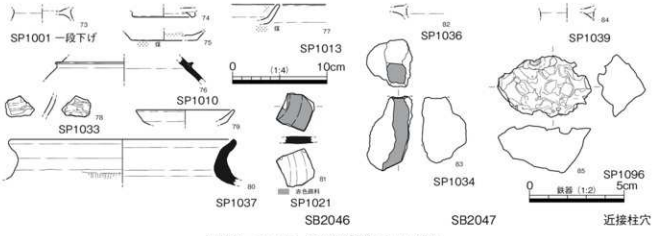


図 382　35-1Tr・SB2046.2047 出土遺物

SD1093.1094（図 384）

調査区西端部で検出した溝状遺構である。12 世紀後半頃に埋没する SD1092 に先行する重複関係を認め、西肩部は失われ、東半は調査区外に延び、全容は判然としないが、底面に凹凸を認める一連の溝と判断した。SD1093 南端と SD1093 北端間は約 1.1 m を測り、両者の間は基盤層となる。検出最深標高は SD1093 が約 15.2 m、SD1094 が約 15.0 m を測り、深度に差異を認め、底面に凹凸を認める一連の溝と考えられる。調査区西壁面図から抜粋した図 384 では近世初頭埋没の SD1079 埋土に連続し、同溝の下層埋土的な印象を受けるが（14.15 層）、壁面際にテラス面を設けたことによるセクションラインの不一致がその要因となる。主軸方位はほぼ周辺の条里地割に合致した方位を呈し（北 26° 西）、溝最深部ラインは北に延伸すると、８世紀後葉から９世紀中葉に帰属する掘立柱塀の東側溝（33-2Tr・SD2115、31-1Tr・SD1001）と同一線上に位置し、連続する可能性が高い。大型建物群の北辺を画する施設と考える掘立柱塀構造の遮蔽施設（30-1Tr・32-4TrSA1080 と両脇溝）の両側溝の底面にも凹凸を認め、SD1093・SD1094 と酷似した構造となる。埋土は暗灰黄色粘質土で、SD1094 は上層に褐灰色粘質土を認める。出土遺物は少なく（大袋１袋）、SD1094 出土の瓦に限られる（89 ～ 92）。平瓦は格子叩きと直線的な縄叩きを認める。出土遺物から帰属時期の特定は困難だが、前述した遺構の連続性から、８世紀後葉から９世紀前葉に機能した掘立柱塀構造の東側溝と考えておきたい。本想定では西側溝は開法寺跡の推定回廊部分の下位に位置することになり、現推定回廊の整備時期が問題となるが、その解明は今後の開法寺地区の調査成果に期待したい。

SD1142（図 370.385）

調査区南西隅で検出した溝状遺構である。畔③とトレンチ３を挟んでわずかに途切れるが、東肩部に連続性を認めることから一連の溝と判断した。近世初頭埋没の SD1079 と 12 世紀後半埋没の SD1092 に先行する重複関係を有する。主軸方位は北 30° 西にとり、周辺の条里地割に合致した方位を呈する。北への延伸ライン上には SD1082 が所在するが関連性は明らかではない。浅いU字形の断面形状を呈し、埋土は底面に暗灰黄色粘質土がわずかに堆積し、大部分は瓦を多く包含する灰黄褐色粘土が占める。平面の途切れや断面図が示すように溝底には凹凸を認める。出土遺物は 28 ℓコンテナで１箱を数える。100・101 は下層出土遺物である（須恵器．土師器坏）。時期比定は困難だが、10 世紀後葉前後の所産と考えたい。93 ～ 99 は上層出土遺物である。須恵器蓋（93）や坏（94）は下層出土遺物より古相を示し、回面に模骨痕を認める丸瓦（97）は７世紀後半まで遡る。平瓦（98）の凸面には斜位の縄叩きを散漫に認め、下層出土遺物に近い時期の所産であろう。以上、SD1142 は遮蔽施設の側溝の可能性も想定したが、出土遺物の年代観から 10 世紀後葉前後に帰属時期を求めたい。

SD1082（図 370.386）

調査区西側で検出した溝状遺構である。９世紀後葉から 10 世紀前葉頃に帰属する SB2045 や SA2021 に後出し、12 世紀後半頃の SX1078 に先行する重複関係を有する。南北両端で途切れるが、直線的に延び、主軸方位は周辺の条里地割に合致した北 26° 西にとる。検出長 11.4 m。SD1142 と同一線上に位置し、本遺構が途切れた箇所付近から

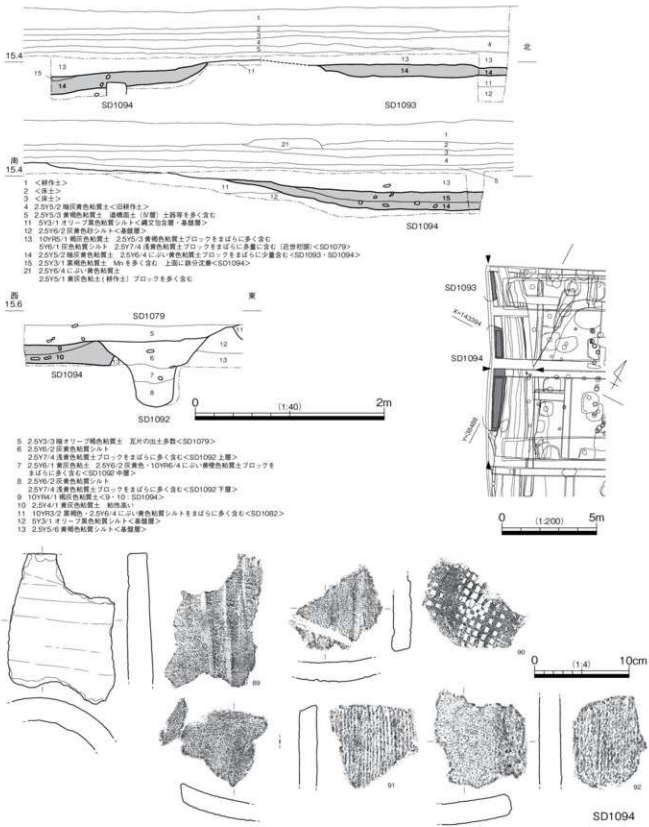


図 384　35-1Tr・SD1093.1094 平断面図及び出土遺物

SD1142 が出現するが、関連性は明らかでない。溝幅は 0.3 m前後、深度約 0.15 mを測り、埋土は基盤層ブロックを多く含む灰黄褐色粘質土である。出土遺物は 28 ℓコンテナで 1 箱を数える。102 ～ 107 は SD1082 出土遺物である。102 は高台が欠損しており、台付坏と判断した。103 は軒丸瓦である。追刻前の KH106A 型式と判断した（第 7 章第 2 節）。他の KH106A 型式に比して、焼成がやや不良である。平瓦の凸面調整は縄目叩きが多く、107 は太い縄目が散漫に施される。以上、SD1082 の帰属時期は土師器台付坏（102）や平瓦（107）の年代観から、10 世紀後葉頃に位置付けたい。

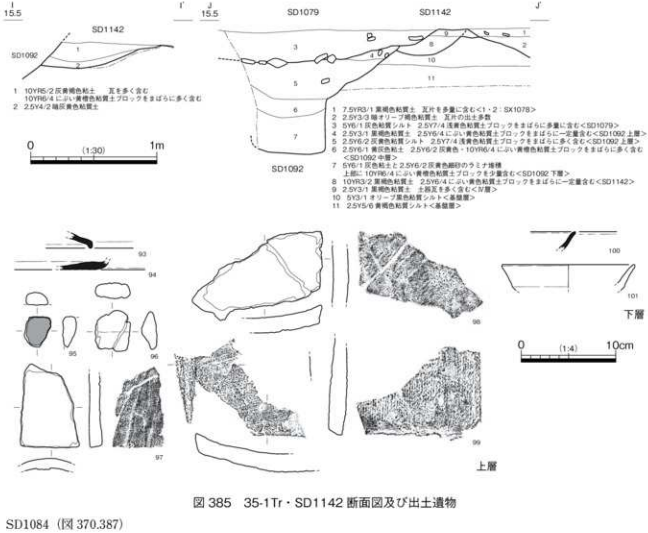


図 385　35-1Tr・SD1142 断面図及び出土遺物

SD1084（図 370.387）

調査区北半中央部で検出した溝状遺構である。直線的に延び、北は調査区外に延長し、南端部は中央部付近で途切れる。10 世紀中葉頃の SX1138 に後出し、12 世紀後半頃の SX1078 に先行する重複関係を認める。検出長 9.6 m、溝幅 0.4 m前後、深度は約 0.1 m を測り、埋土は基盤層ブロックを多く含む黒褐色粘質土の単一層となる。遺物は 28 ℓコンテナで 1 箱出土した。108 ～ 115 は SD1084 出土遺物である。格子叩きの平瓦を一定量認めるが（110 ～ 112）、斜位の縄叩き（113）も認める。出土遺物から帰属時期を特定することは困難だが、遺構の重複関係から 11 世紀前後の帰属時期を想定しておきたい。本溝の性格は不明だが、SX1078 の東屑部に沿って走り、5.2 m西には同じく SX078 西屑部に沿うように SD1082 が位置し、3 者の想定した帰属時期が異なるため関係性は低いと考えるが、境界的な施設（道や区画溝等）やアジール的な場所性（廃棄土坑）が継続的に設けられた場所であったと評価することもできる。

SD1127（図 370. 387）

調査区北端中央部で検出した溝状遺構である。直線的に延び（検出長 1.7 m）、北は調査区外に延長し、南端部は SX1078 により消失する。溝幅 0.4 ～ 0.5 m前後、深度は約 0.1 m を測り、埋土は基盤層ブロックを多く含むオリーブ黒色粘質土の単一層となる。遺物は大袋で 1 袋出土した。116 ～ 120 は SD1127 から出土した平瓦である。凸面調整は格子叩きが主体を占めるが、やや散漫に施される縄叩きも認める。出土遺物から帰属時期を特定することは難しいが、遺構の重複関係から 11 世紀前後の帰属時期を想定しておきたい。

SD1079（図 370.388）

調査区西端部で検出した溝状遺構である。SD1042 の上部を覆うように開削された溝で、調査区南端部付近で途切れる。溝幅は 1.7 m前後と広く、皿状の断面形状を呈する。深度は約 0.15 m を測り、埋土は灰色シルトの単層となる。

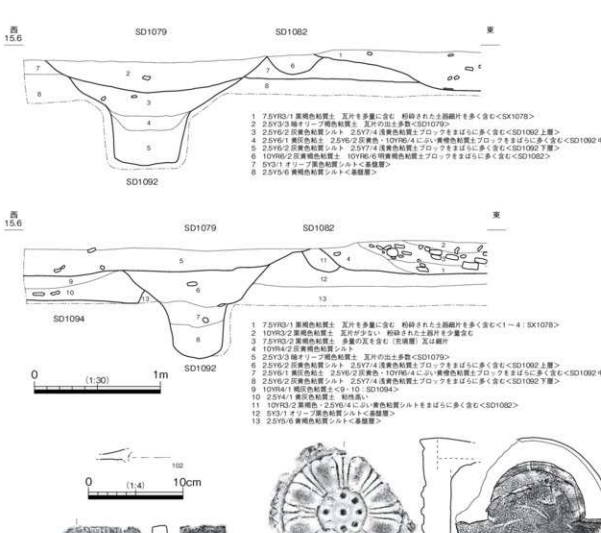


図 386　35-1Tr・SD1082 断面図及び出土遺物

溝としたが、西壁面を参照すると、SD1042 や SD10193、SD1094 などの溝群上位の凹みに埋積した堆積土と考えた方が妥当かもしれない。

遺物はコンテナで 3 箱出土したが、古相を示す瓦が大部分を占める。121 ～ 130 は SD1079 出土遺物である。122 は瀬戸美濃系陶器丸皿である。底部は削り高台となる。123 は肥前系陶器砂目皿である。124 は肥前系陶器鉢である。125 は土師質土器擂鉢、126 は土師質土器鍋とした。いずれも 17 世紀前半に属する。127 は瓦質羽釜である。口径 46 cmに達する大型品である。口縁部外面にケズリ調整を認め、陶磁器が示す帰属時期ではなく、古代ないし中世期の所産と考えたい。瓦は選択的に抽出した。128 は軒丸瓦（KH104 型式）、129 は凹面に模骨痕を認める。130 は内外面ともに板ナデで仕上げられる。須恵質焼成で、外面上端には貼付物の剥落痕を認める。鴟尾等の可能性を残す。以上、SD1079 は出土遺物の年代観から、17 世紀前半の埋没が想定でき、本調査区で検出した最新の遺構となる。

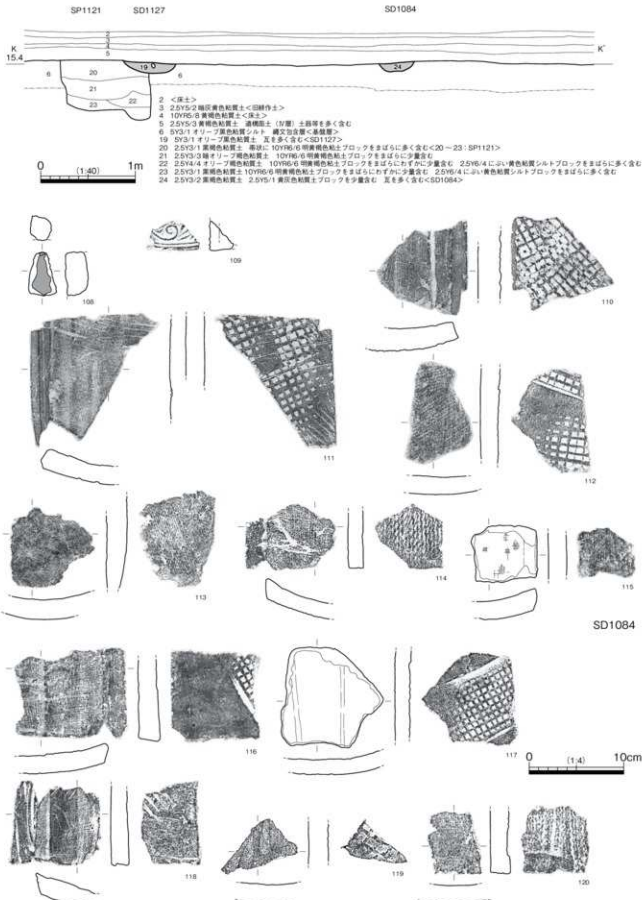


図 387　35-1Tr・SD1084.1127 断面図及び出土遺物

SD1092（図 370.388 ～ 391.411）

調査区西端部、西壁際で検出した溝状遺構である。おおむね周辺の条里地割に合致した方位を呈するが、直線的ではなく蛇行し、調査区西端の地割（南北方向の狭い農道）に合致する。SD1079 の下位に位置し、溝上端幅は 1.1 ～ 1.4 m、深度は 0.7 m前後と深い。断面形状は２段掘方となり、上位は緩やかに傾斜するが、下位は箱形を呈する。埋土は３層に細分し、下位の箱形部分には流水を示すラミナ堆積を認め（下層）、中層に黄灰色粘土、上層に土器・瓦、礫を比較的多く含む灰黄色粘質シルトが堆積する。上・中層に流水痕跡は認めないが、浚渫後の埋没ないし埋め戻し土と評価できる。

出土遺物は 28 ℓコンテナで５箱出土したが、大半は古相を示す瓦となる。131 ～ 167 は上層出土遺物である。131 は土師質土器小皿、132 ～ 134 は土師質土器椀、135 は須恵器椀、136・137 は瓦器椀、138・139 は須恵器甕である（十瓶山窯産）。12 ～ 13 世紀。141 は円面硯と判断した。142・143 は須恵器を転用した円盤状土製品である。144・145 は軒丸瓦で、それぞれ開法寺跡の同笵瓦である（KH105 型式 . KH106 型式）。152 は軒平瓦で瓦当面上下端を高く突出させ、デフォルメが著しい変形唐草文を配する。凸面は円弧状の縄叩きをナデ消す。開法寺跡の KH205 型式となるが、

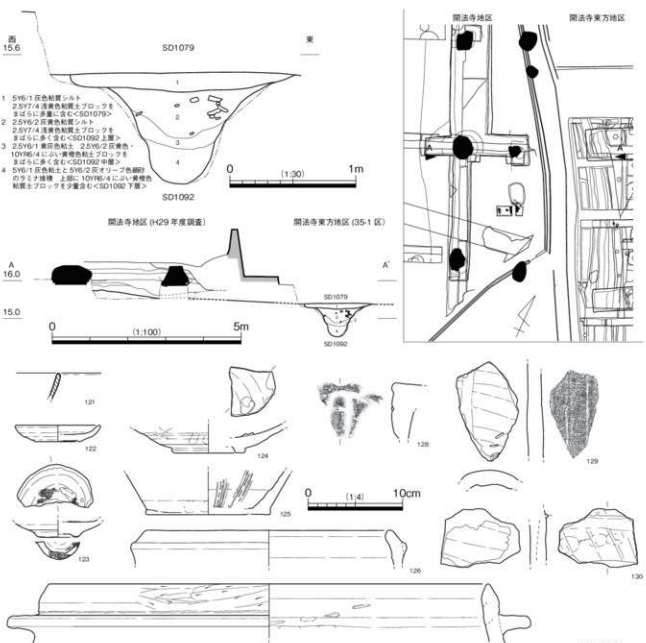


図 388　35-1Tr・SD1079.1092 平断面図及び出土遺物

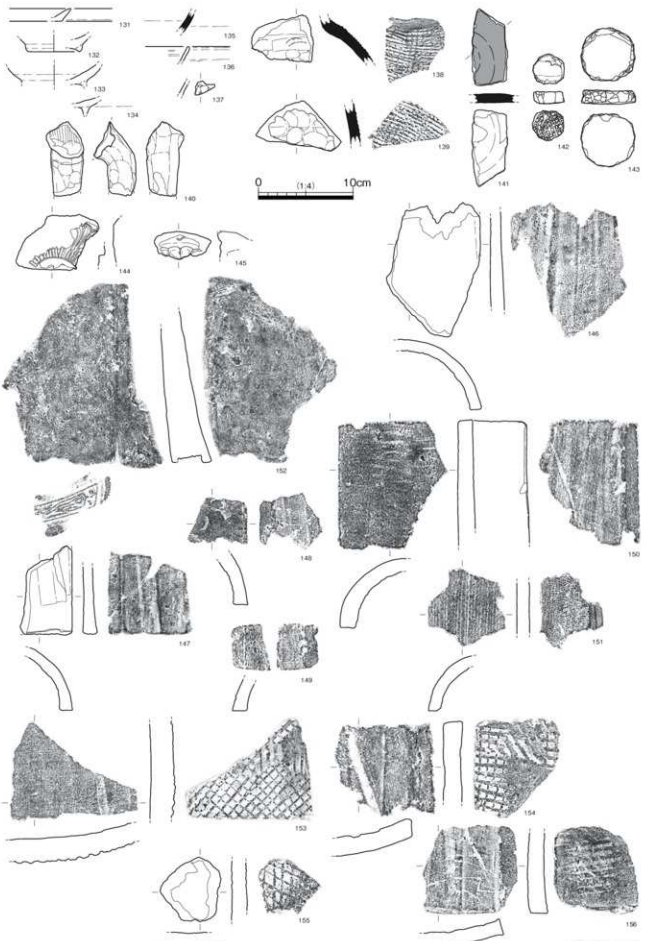
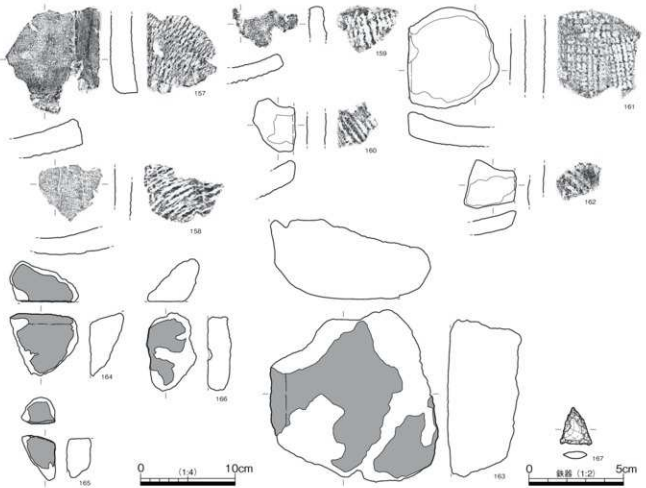
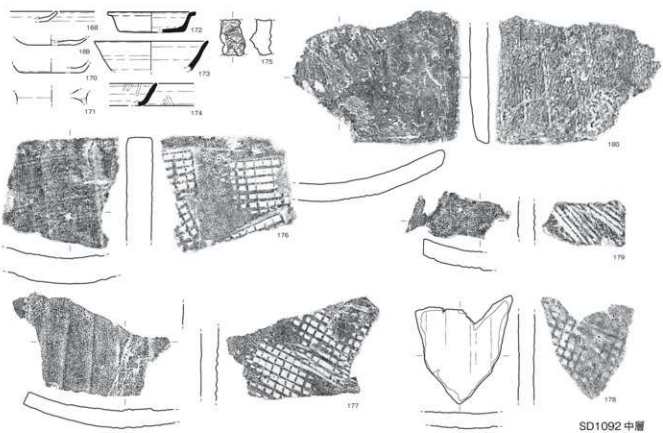


図 389　35-1Tr・SD1092 出土遺物 1



SD1092 上層



SD1092 中層

図 390　35-1Tr・SD1092 出土遺物 2

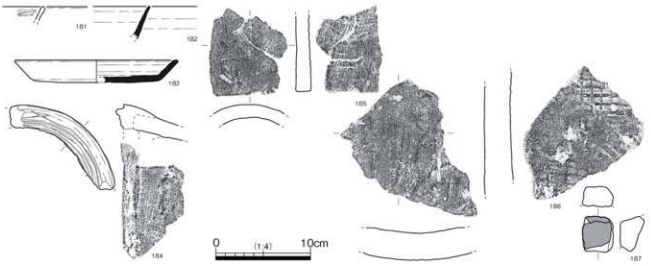


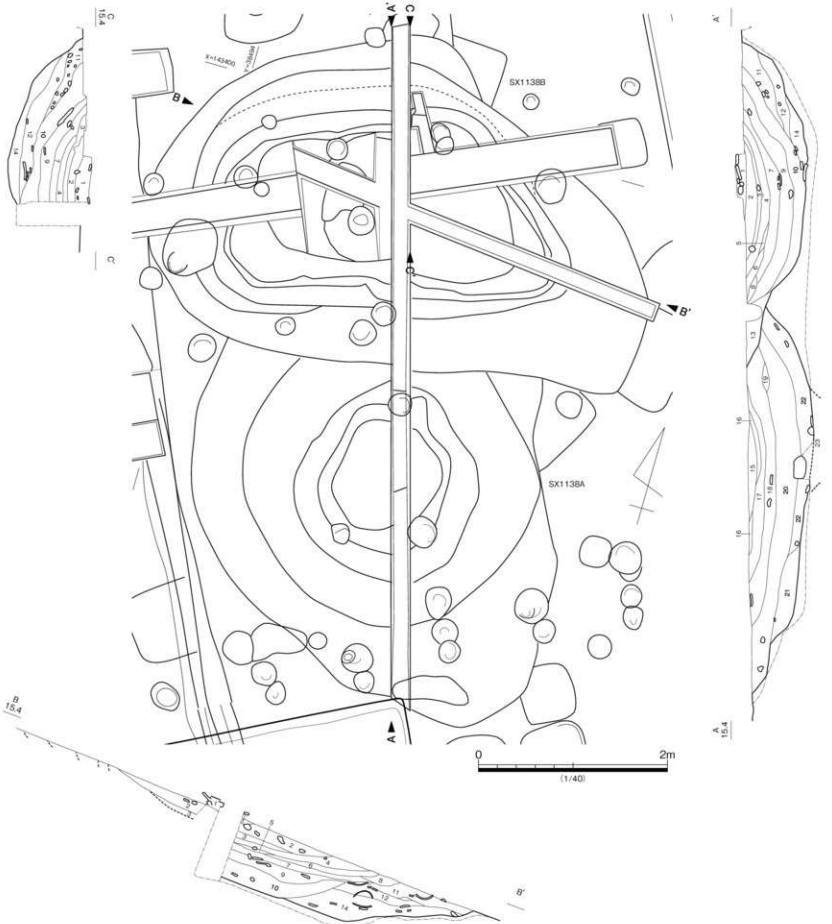
図 391　35-1Tr・SD1092 出土遺物 3

KH205 型式は文様構成から追刻が認められ、KH205 Bないし B' 型式とした（第 7 章第 2 節）。163 ～ 166 は白色凝灰岩製の石造物片である。163 は平滑な 2 面が直角に隣り合い、隅角を面取りする。層塔等の基部ないし軸部と考えられる。164 は平滑な 2 面が鈍角に配される。層塔軸部ないし笠部片か。168 ～ 178 は中層出土遺物である。168 は土師質土器小皿、171 は土師質土器椀で、12 ～ 13 世紀に属するが、須恵器坏（172. 173）や皿（174）、平瓦は古相を示す。181 ～ 187 は下層出土遺物である。181 の瓦器椀を除き、古相の様相を示す。以上、SD1092 出土遺物は、古相を示す土器・瓦を一定量認めるが（須恵器坏（172 ～ 174）、円面硯（141）、白色凝灰岩製石造物（163 ～ 166）、軒瓦（144（KH105 型式）・145（KH106 型式）、模骨痕を認める丸瓦（146 ～ 148. 150）など）、12 ～ 13 世紀に属する遺物を一定量含むが、各層位から 12 世紀後半前後に属する遺物を含め、帰属時期を示す。帰属時期や検出位置から本調査区の北端に位置する 33-2Tr・SD2104 から連続する溝の可能性を想定しておきたい。

SX1138（図 392 ～ 400）

調査区北東部で検出した鍛冶関連遺構である。上位の古代地表土の掘り下げ（3 層）、遺構検出時から鉄滓や銅滴が出土したため、鍛冶関連遺構の存在を考慮しつつ、鍛冶関連遺物を全点ドット取上げしながら調査を進めた。複数の埋土が帯状に混在し、平面形も不整形であることに加え、上面の窪みに多量の瓦や礫が充填されていたため、遺構検出はかなり難航した。上位の SB2046・2047 を完掘し、遺構面を掘り下げながら、最終的な平面検出を実施した（註 17）。なお、遺構の重要性や調査期間を考慮し、調査はトレンチ調査に留めた。

平面形は当初は SX1138 として一括していたが、トレンチ調査で重複関係を確認し、北側に所在する東西主軸の長楕円形プランを SX1138 B、南側の不正円形プランを SX1138 A とした。図 392 に平・断面図を示したが、かなり複雑な構造を呈する。SX1138 A は 9 世紀後葉から 10 世紀前葉頃に帰属する SB2045 に後出し、SX1138 B や SB2046・2047 に先行する重複関係を有する。外形ラインは東西約 3. 8 m、南北約 5 m前後の不正円形を呈し、内側には同心円状に複数の埋土を認め、内側は正円形に近いプランとなる。断面観察の結果、これらの埋土は土坑底面の断面形状に沿って土質が異なる埋土を設置したことが判明した。15 層は最上部埋土で、にぶい黄褐色粘質土となり、その底面には粘性の高い鋼土状の粘土を認め（16 層）、その周囲にもやや粘性が高く、均質な粘土を置く（17 層）。さらに周囲には比較的安定した粘質土があり（18. 19 層）、外縁には掘方開削直後に埋め戻したと考えられる 20 ～ 22 層を認める。20・22 層には土器・瓦を少量ないし一定量含み、掘方開削時の先行遺構に含まれる遺物や周辺の地表面にあった遺物が混在したと考えられる。構築工程を復元的に確認すると、①大きな土坑を開削した後、②土坑下位を埋め戻し、除湿等を目的に意図的に土器や瓦を混在させる。③その上位の 18・19 層で最下位面上部を整え、④均質な埋（17 層）土を設置した後、⑤耐水性の高い鋼土状の粘土（16 層）を浅い皿状に敷設する。断面図ではセクションラインの関係



番号		土層注記	関連遺物	炭化物	土器・瓦
1		灰黄褐色10YR4/2粘質土、僅みに多量の瓦が埋積	一定量	ごく少量	多量
2		にぶい黄褐色10YR4/3粘質土、	多い	一定量	少量
3		黒色2.5Y2/1炭化物層、**カーボンペット状**、暗灰黄色2.5Y5/2粘質シルトブロックをわずかに含む	多量	多量	なし
4		にぶい黄色2.5Y6/4粘質土、比較的均質な埋土、	なし?	なし	なし
5		明黄褐色10YR6/6粘土、粘性高い、**鬱き土**(流蛇への粘土貼り)	なし	なし	なし
6		明緑灰色10GY7/1粘土、粘性高い(鬱土状)、局所的に明黄褐色10YR6/8に変色、16層に酷似、**鬱き土**	なし	なし	なし
7		にぶい黄色2.5Y6/4粘質土、6層に比して砂粒に多い粘土、**鬱き土**	なし	なし	なし
8		にぶい黄橙色10YR6/4粘質土、**鬱き土**	なし	なし	なし
9		にぶい黄褐色10YR5/3粘質土、灰黄色粘質シルトブロックをまばらに多く含む	なし	少量	ごく少量
10		灰色5Y5/1粘質シルト、上面に焼土・炭化物が帯状に堆積	なし	一定量	多量
11		灰黄褐色10YR4/2粘質土、細砂・小砂を無含む、暗灰黄色粘質土ブロックを一定量含む	なし	少量	多い
12		暗灰黄色2.5Y5/2粘質シルト	なし	少量	一定量
13		灰黄褐色10YR5/2粘質土、暗灰黄色粘質土ブロックを一定量含む	なし	少量	一定量
14		灰黄褐色10YR4/2粘質土、	なし	一定量	一定量
15		にぶい黄褐色10YR5/3粘質土、16層ブロック細片をわずかに含む	少量	少量	ごく少量
16		明緑灰色10GY7/1粘土、粘性高い(鬱土状)、局所的に明黄褐色10YR6/8に変色、6層に酷似、**鬱き土**	なし	なし	なし
17		にぶい黄橙色10YR6/4粘質土、粘性やや高い、比較的均質な埋土、**鬱き土**	なし	なし	なし
18		にぶい黄橙色10YR6/3粘質土、灰黄褐色10YR5/2粘質土ブロックをまばらに多く含む	なし	なし	少量
19		にぶい黄色2.5Y6/4粘質シルト	なし	多い	なし
20		灰黄色2.5Y6/2粘質土、局所的に灰黄褐色10YR5/2粘質土ブロックを含む	なし	ごく少量	少量
21		灰色5Y6/1粘質シルト、にぶい黄橙色10YR6/4粘質土ブロックをわずかに含む	なし	なし	なし
22		灰黄褐色10YR5/2粘質シルト、相砂を多く含む	なし	多い	一定量
23		22層埋土と酷似するが詳細不明、22層と同一埋土ないし下位遺構	なし	多い	一定量

(ごく少量<少量<一定量<多い<多量)

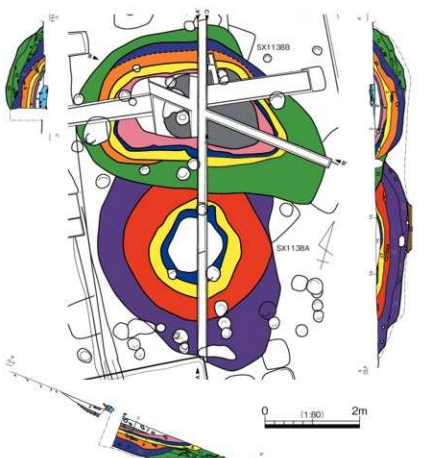


図 392　35-1Tr・SX1138 平断面図

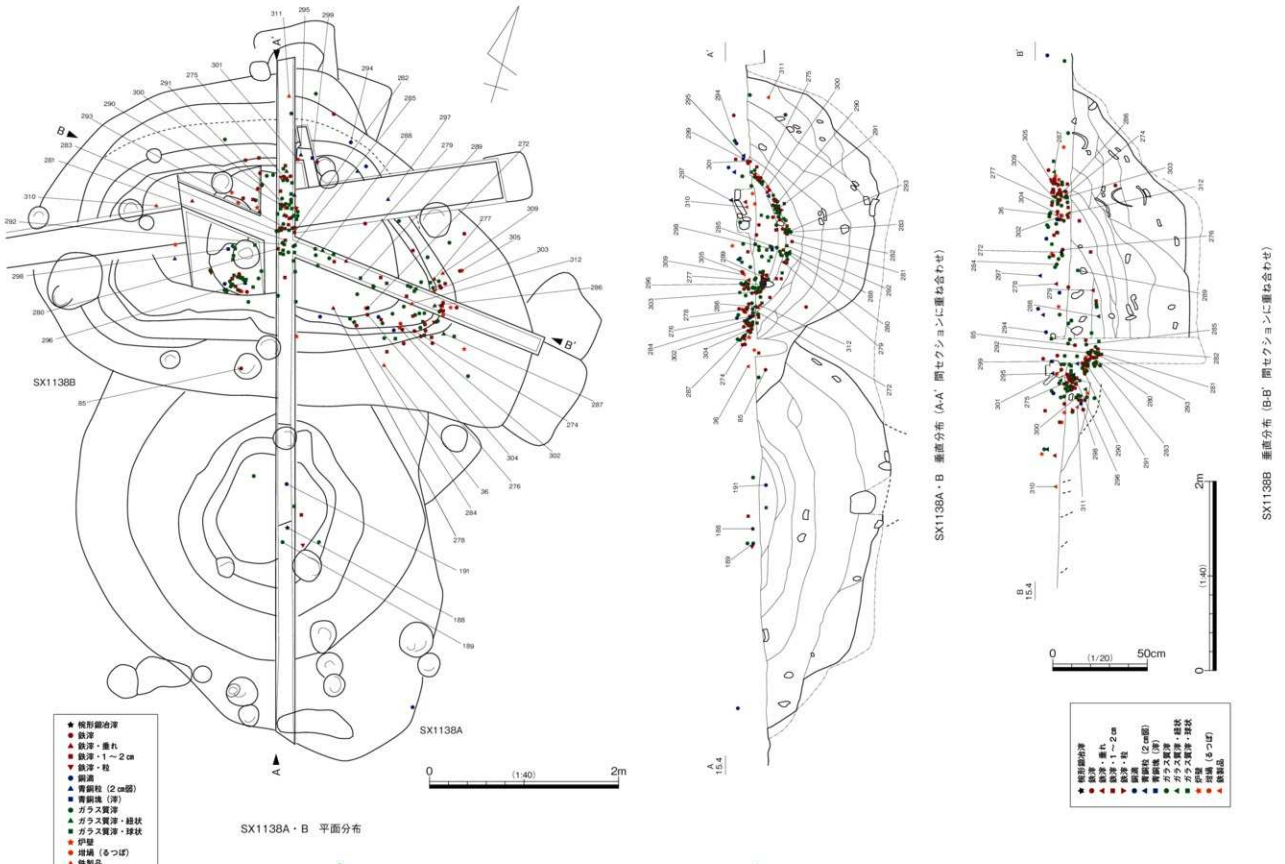


図 393　35-1Tr・SX1138 鍛冶関連遺物出土分布図

で一部途切れるが、ほぼ底面全面に敷き詰めた状況を示す。さらに、⑥15層を置く。鍛冶関連遺物はいずれも15層ないしその直上の掘り下げ土から出土しており、SX1138 Bを援用すると、その上部に鍛冶炉や作業面が設けられた可能性が高い。

SX1138 BはSX1138 Aに後出する重複関係を認め、平面形は東側がわずかに先細る長楕円形を呈し、内側にはSX1138 Aと同様に、掘方形状に沿って異なる埋土が配される。土層から構築工程を復元的に確認すると、①掘方を開削した後、②その外縁部を埋め戻す（11～14層）。炭化物や土器・瓦を一定量含み、炭化物の性格は判然としないが（先行遺構に包含された可能性を想定）、土器・瓦は先行遺構や開削時に周辺に所在したもので、除湿等の目的で意図的に混在させたと考えられる。③その土坑底面形状に沿うように、10層を置く。上面に焼土や炭化物が帯状に認めることから、空焚きないし炭層を意図的に介在させた可能性が高い。④9層で再度、底面を整えた後、⑤底面に遺物を含まない均質な黄色系粘質土を敷設する。さらに、⑥耐水性の高い、鋼土状の粘土を土坑底面に目貼りするように設置する。遺物分布図では本層位にも鍛冶関連遺物がプロットされるが、全出土遺物を対象としたため、断面図で示した2つのセクションラインが遺構形状に斜交することに起因したものであり、元来は5・6層、7・8層には鍛冶関連遺物は含まれない。⑦粘土目貼りの内側を均質な埋土で敷き均し（4層）、作業面下面を整えた後、⑧3とした炭化物層（3層）を設ける。カーボンベット状を呈する作業面と考えられ、多量の鍛冶関連遺物が含まれる。鍛冶炉の検出を目的として、一部、炭化物層（3層）上面まで4層を掘り下げたが、最終操業時の鍛冶炉の検出には至っていない。なお、SX1138 Aでは炭化物層（3層）は確認できず、15層は4層に対応する段階の層位と考える。⑨操業時ないし廃棄直前に上面の凹みに2層が埋積する。関連遺物が多く出土するが、3層が層位形状に沿って遺物が出土するのに対し、分布は散漫となる。⑩廃絶後の凹みを多量の瓦や礫で埋め戻す（図394）。断面図は1層除去後に作成し

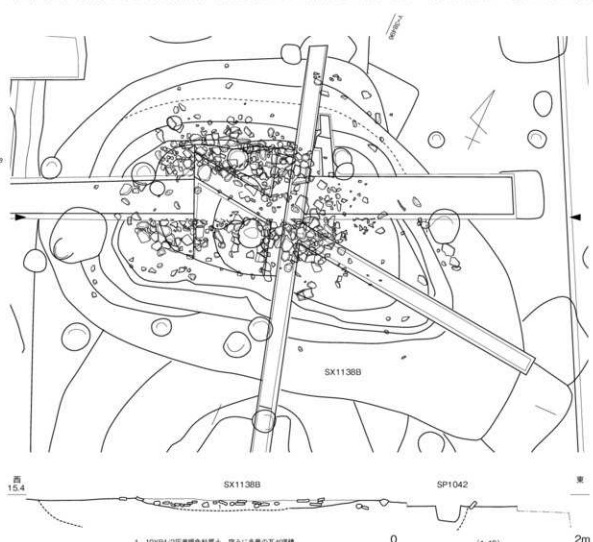


図394　35-1Tr・SX1138B 最上層遺物出土状況

たため１層に面的な広がりを認めないが、１層とした瓦溜まりは SX1138 Aの７・８層の内側に認め、SX1138 A・B間にも広がる（遺構検出時に取り上げ）。なお、礫には被熱痕や研磨痕は認めない。

以上、SX1138 A・Bは重複関係から時間差（段階差）が想定できるが、使用粘土や土器・瓦の混在状況等極めて酷似した構造を呈し、後述するが極めて短期間に操業された可能性を想定しておきたい。

次に、遺物の出土状況について、鍛冶関連遺物の平・断面分布（図 393）、鍛冶関連遺物分類と出土点数（表 11）に基づき報告する。SX1138 Aではいずれも 15 層ないしその上位から出土する。出土量は少なく、椀形鍛冶滓のほか、鉄滓・銅滴・ガラス質滓を認め、出土点数は９点に留まる。椀形鍛冶滓・鉄滓・ガラス質滓は 15 層上方からの出土となるが、銅滴・ガラス質滓（球状）は 15 層内に含まれる。出土遺物は全点分類し上、一覧表で掲載した（表 29 ～ 31）。

SX1138 Bからは 228 点に及ぶ鍛冶関連遺物が出土し、総点数は 228 点を数える。椀形鍛冶滓は１層に含まれ、関連層位には帰属せず、いわゆる浮いた状態となる。鉄滓は B2（垂れ）を除くと、炭化物層（３層）に沿った平・断面位置で出土し、主に作業面への分布が想定できる。銅関係は出土点数が少なく、判断に迷うが、銅滴はいずれも１ないし２層から出土し、鉄滓とは出土層位が異なる。C2（青銅粒（２cm弱））は１層と炭化物層（３層）に沿った出土を認め、C3（青銅塊）は点数が少ないが、いずれも炭化物層に沿った出土状況を示す。出土点数が最も多いガラス質滓は１ないし２層に含まれるものを一定量認めつつも、炭化物層（３層）に沿った平・断面位置にプロットされ、主に作業面への分布が想定できる。一方、炉壁は１ないし２層と炭化物層（３層）の底面付近への分布が拮抗する。埴場は炭化物層の上端付近に偏在する可能性が高い。鉄製品は判断に迷う分布を示すが、おおむね炭化物層の上位付近にプロットされる。製作物か、素材であったかは判断できない。以上、鍛冶関連遺物の分布状況を示した。分布傾向は本遺構における作業内容や最終操業状況等を反映するが、トレンチ調査というバイアスもあるが、SX1138 Aと SX1138 Bでは出土遺物の様相は酷似するが、前者には鉄滓 B1・B2、C2・C3 や炉壁は確認できず、作業面が検出面より上部にあり、消失したという想定に合致した内容を示す。また、SX1138 Bでは鉄滓とガラス質滓が近似した分布状況を示すのに対し、銅滓はやや分布が異なり、操業の段階差を看取できる一方、層序に乱れはなく、想定した段階差は極めて短いスパンと推測できる。加えて、トレンチ調査である点を考慮しても出土点数は少なく、操業回数や期間は極めて短期間であったと推測できる。なお、調査時には篩による関連遺物の採取に努めたが、土の洗浄や磁石による鍛造剥片等の採取を失念しており、記して自戒の念としたい。

分類			内容	出土点数（点）	
				SX1138B	SX1138A
A	椀形鍛冶滓		炉底	1	1
B	鉄滓	B1	B2 ～ 4 以外	30	
		B2（垂れ）	垂れ下がり形状	4	
		B3（1 ～ 2cm）	1 ～ 2cm前後、ぞろ豆状の形	29	1
		B4（粒）	細片（鍛造剥片？）	4	1
C	銅滓	C1（銅滴）	銅滴、2 ～ 3mm 程度の小粒、球形	6	2
		C2（青銅粒（2cm弱））	青銅粒、2cm前後、ぞろ豆状の形	6	
		C3（青銅塊（滓））	青銅塊（滓）4cm前後の塊、素材ないし滓	2	
D	ガラス質滓	D1	D2 ～ 4 以外	69	3
		D2（緑状）	緑状、垂れ下がり形状	7	
		D3（球状）	球形　3mm ～ 2cm	42	1
		D4（銅粒付着）	ガラス質付着銅粒（埴場、炉壁か）	15	
E	炉壁		外面にガラス質滓、鉄滓等付着（羽口？）	15	
F	埴場		（羽口？）	3	
G	鉄塊		板状素材的な形態（施溝構出土）、鉄素材？		
H	被熱粘土		焼土、炉壁、鋳型？	6	
			小計	228	9

表 11　35-1Tr・SX1138 出土鍛冶関連遺物の分類と出土点数

次に出土遺物について報告する。188 ～ 199 は SX1138 A 出土遺物である。188 ～ 191 は 15 層から出土した。188 は楕形鍛冶滓である。底面が約 2.8 ㎝と分厚く突出する。189・190 はガラス質滓である。191 は銅滴である。径 4 ㎜程度。192・193 は 17 層、194 ～ 197 は 18 層、198・199 は 20 ～ 22 層出土遺物である。須恵器は 8 世紀から 9 世紀中葉頃の所産となり、本遺構の上限を示す。

200 ～ 224 は SX1138 B の最上層（1 層）出土遺物である。SX1138 B の中央部付近の窪みに土器や瓦、礫が集中しており、操業終了後の平坦化を意図した整地的な性格が想定できる。200・201 は須恵器坏である。200 は燭台形を呈する。8 世紀前葉から中葉頃の所産か。202 は土師器坏である。10 世紀中葉前後に位置付けたい。軒丸瓦（204. 205）はいずれも KH203 型式となる。平瓦は凸面に格子叩きを施す一群と縄叩きの一群を認める。縄叩きには散漫に施すもの（217. 218. 221）、斜位の縄目（219）、斜格子ポジ面を認めるものがあり（222）、前 2 者は 10 世紀前後の所産となる。223 は瓦塼、224 は八栗産の白色凝灰岩製の石造物片である。以上、SX1138 A 最上層（1 層）出土遺物は古相を示す一群を多く認めるが、土師器坏（202）、平瓦（217. 218）から 10 世紀中葉頃に埋め戻したと考えられ、本遺構の下限を示す。

225 ～ 243 は SX1138 A から SX1138 B の上面精査ないし遺構面掘り下げ時に出土した遺物である。前述した SX1138 B の最上層は一定範囲にまとまるが、本遺物群は特定箇所への集中はみられず、散漫な分布となる。検証する材料はないが、1 層ほどのまとまりはなく、本遺構群上面のわずかな窪みに堆積した土器群と評価できる。須恵器蓋（225）は大型品である。228 は円面硯の可能性が高い、平瓦は SX1138 A 最上層と酷似した様相を示す。242・243 は八栗産の凝灰岩製の石造物片である。242 は平滑な 2 面が直角に配される。出土遺物から正確な帰属時期は言及できないが、平瓦（239）から、最上層に近い時期の所産と考えたい。

244 ～ 271 は SX1138 B の各層位から出土した土器・瓦である。244 ～ 250 は 2 層出土遺物である。須恵器蓋（244. 245）は端部が矮小化し、丸いことから 9 世紀前葉前後の所産、坏（246. 247）はそれより古く位置付けられる。248 は円面硯坏付近と判断した。4 層出土の須恵器蓋（252）は乳頭状のつまみを有する。253 ～ 257 は 9 層出土遺物である。8 世紀中葉前後に属するものが多いが、須恵器蓋（254）は 9 世紀中葉頃まで下るかもしれない。258 ～ 263 は 10 層出土である。258 は転用硯である。出土遺物の年代観はおおむね 8 世紀中葉から後葉頃に収まる。264 ～ 270 は 11 層出土遺物である。267 は赤彩土師器皿である。開法寺東方地区からの赤彩土師器の出土は限られる。268 は黒色土器（B 類）皿である。口底部境ににぶい稜を認め、端部は丸く収める。ほぼ全面に入念なヘラミガキを施す。類例の少ない資料となる。11 層出土遺物は 9 世紀中葉頃までの所産となる。以上、SX1138 B 出土遺物は、おおむね 8 世紀中葉前

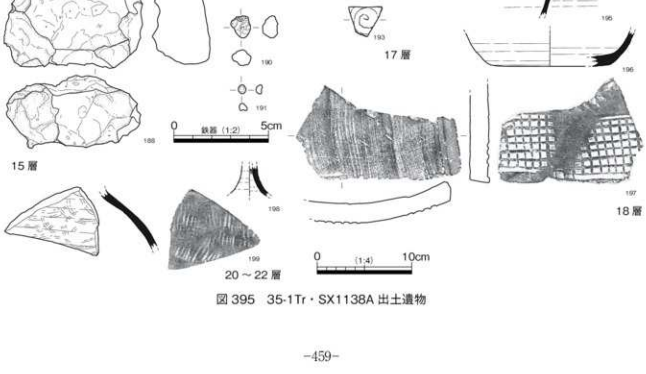


図 395　35-1Tr・SX1138A 出土遺物

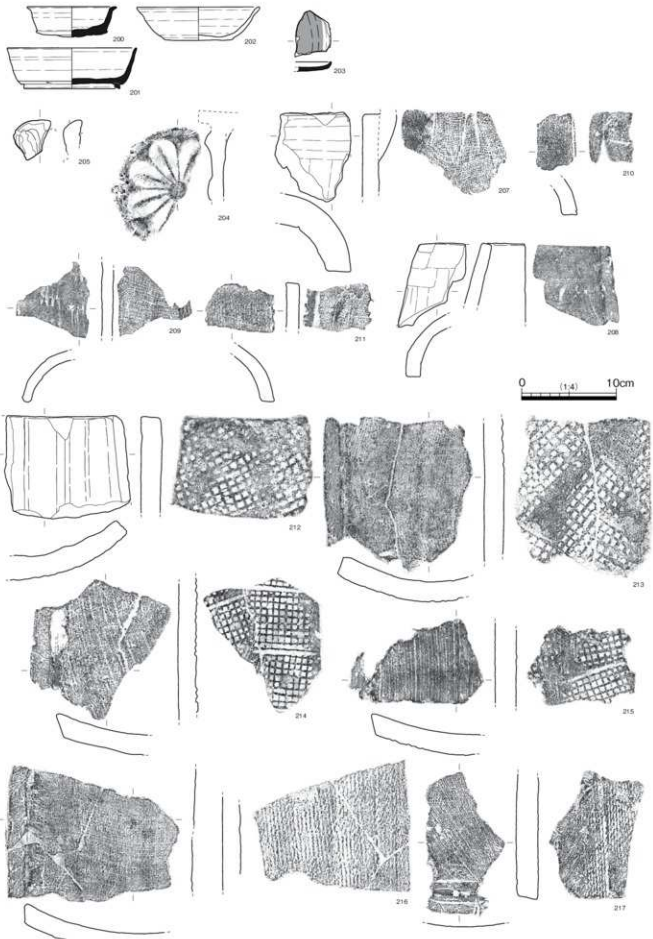


図 396　35-1Tr・SX1138B 1 層出土遺物 1

後の一群と９世紀中葉前後の一群に大別でき、層位の性格から開削場所に所在した遺構ないし周辺の古代地表面に含まれや土器や瓦を意図的に混在させたと考えられる。出土遺物は９世紀中葉頃の下限年代を導くが、本遺構の構築時期は最上層遺物が示す 10 世紀中葉頃を想定しておきたい。

SX1138 B出土の鍛冶関連遺物は分類した上、代表的なものを抽出し、一括して報告する（272 ～ 312）。出土点数は表 11 のとおりである。272・273 は椀形鍛冶滓である。274 ～ 282 は鉄滓である。277 ～ 279 は細長く垂れさがるような形状を呈し（B2）、280 ～ 282 は１～２cmの大きさで、上下広面に凹みを認めるそら豆状の形を呈する（B3）。鍛造剥片を B4 とし、B2 ～ B4 以外の通有の形態を呈する一群を B1 とした。283 ～ 293 はガラス質滓とした。生成要因は不明だが、1000℃を超える温度によりガラス化した土と考えられる。紐状に垂れ下がるものを C2、３mm ～２cm程度の球形を呈するものを C3 とし、それ以外を C1 として一括した。１点のみではあるが、銅粒が付着した個体があり、暫定的に C4 としている。294 ～ 299 は銅滓である。294 は銅滴、295 ～ 297 は青銅粒で、２cm前後の大きさを測る。298・299 は青銅塊（青銅滓）である。４cm前後と大きく素材ないし製造過程で生じた滓と考えられる。303 ～ 305 は炉壁とした。粘土紐を巻き上げたであろう炉体の外面がガラス質化したもので、表面には気泡を認める。輪の羽口の可能性を残す。300 ～ 302 は坩堝である。表面はガラス質化し、302 には銅粒が付着する。306 ～ 308 は被熱粘土である。精良な粘土が焼成により硬化しており、鋳型の可能性を残す。309 ～ 312 は鉄製品である。309 は先端部が鉤状に強く曲がる。310 ～ 312 は鉄釘である。素材であるか、製作した製品であるかは判断できない。なお、本遺構から約５mの箇所の古代地表面土（３層）からは鉄素材の可能性がある大型の鉄製品が出土す る（37）。

出土した鍛冶関連遺物のうち、12 点の分析を行った（第６章第４節）。出土鉄滓はすべて鍛錬鍛冶滓に分類され、主に鉄酸化物と粘土溶融物からなり（鉄素材を熱間で加工した際の副産物）、製鉄原料期限の脈石成分が低いことから、鍛造鉄器の製作が行われたと推定される。銅滴や銅塊は銅の溶解・鋳造時の湯こぼれと推定され、銅中には少量の砒素が含まれ、銅素材として流通されていた鋳造原料が用いられた可能性が想定される。また、炉壁（303）に付着したガラス質滓から微細な金属鉄と鉄・銅を主成分とするスパイス粒や金属銅が確認され、粒状滓（291、ガラス質滓 D3）の内部にも微細な金属鉄と銅が確認できることから、銅を溶解・鋳造するなど、鍛冶（鍛造鉄器の製作）と銅の鋳造が作業場を共有して行われた可能性が想定されている。

以上、SX1138 A・SX1138 Bは鉄製品と銅製品の製作に関連した遺構と考えられ、後者からは作業面と考えられる炭化物層を検出し、炉壁も出土することから、鍛冶炉と考えられる。分析結果を踏まえると、鍛錬鍛冶、鍛造鉄器の

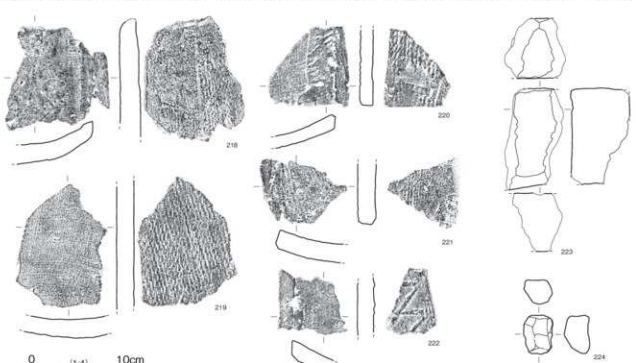


図 397　35-1Tr・SX1138B １層出土遺物２

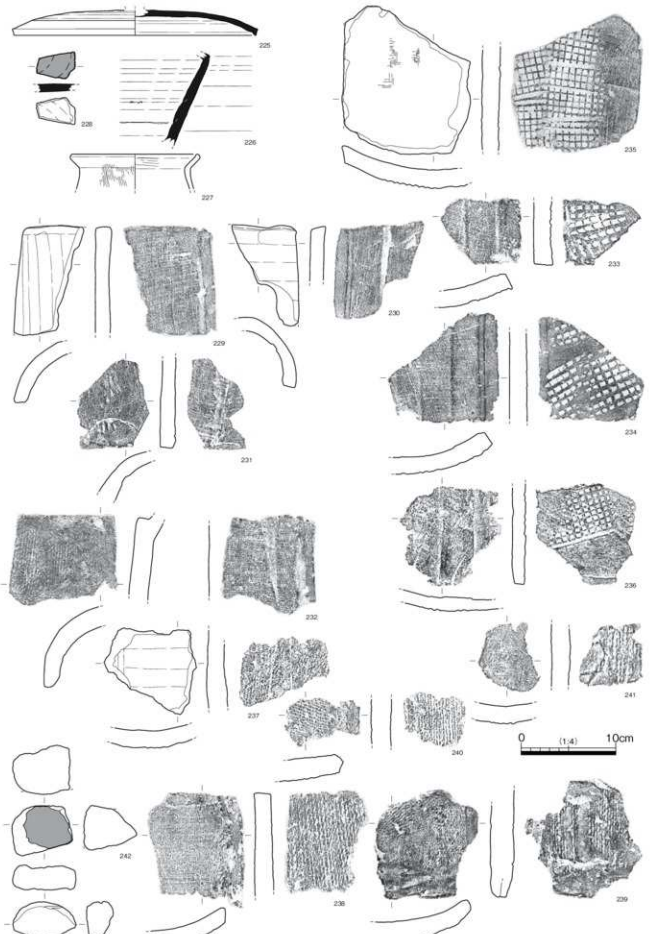


図 398　35-1Tr・SX1138B.A 1 層出土遺物

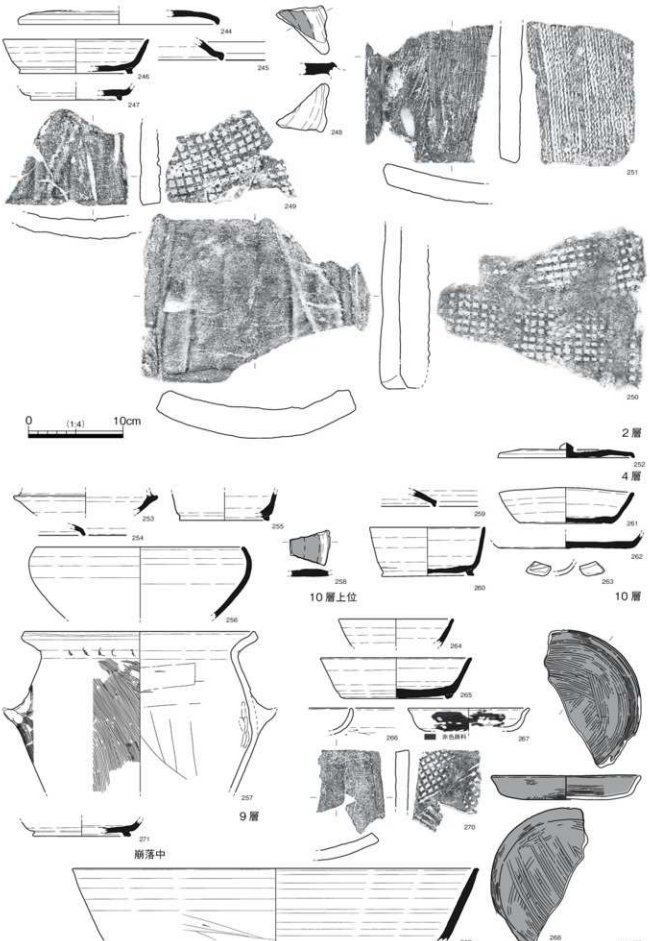


図 399　35-1Tr・SX1138B 出土遺物 1

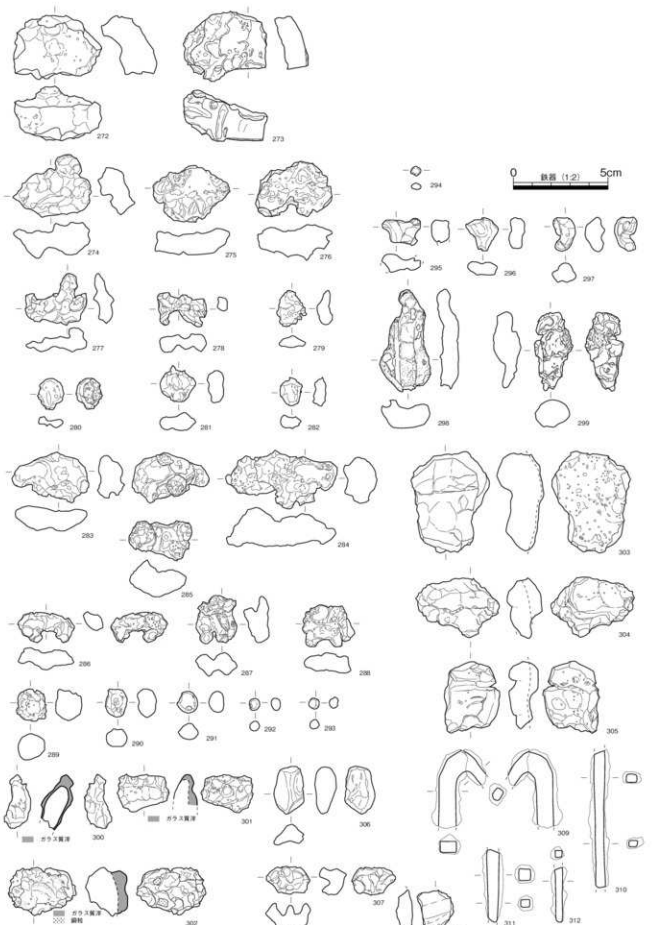


図 400　35-1Tr・SX1138B 出土遺物２

製作、銅の熔解・鋳造作業が行われたと想定できる。さらに、鍛冶関連遺物の出土分布とそれに呼応する分析結果が示すように、銅の鋳造作業と鉄の鍛造作業が作業場を共有して行われたと考えられる。帰属時期は最上層出土遺物の年代観から、10 世紀中葉頃が想定でき、遺物の出土量等から恒常的な鍛冶工房ではなく、比較的短期間の操業が想定できる。操業直前の 9 世紀後葉から 10 世紀前葉頃には SB2045 を認めるが、臨時工房として本遺構が構築され、操業終了後はすぐに埋め戻される。時期は異なるが、福原長者原遺跡（註 18）などの類例から、鉄釘や鎹、銅製の飾り金具などの建物金物を現地で生産した遺構と考えられる。開法寺東方地区に所在する大型建物群の大規模改修時に際し、必要物資を現地で製作した臨時工房であったと評価できる（註 19）。

SX1143（図 401 ～ 407）

調査区中央南端部で検出した廃棄土坑である。12 世紀後半頃の SX1078 に先行する重複関係を認め、西半上部は失われるが、下位は遺存する。隅丸方形の平面形を呈し、主軸方位はほぼ正方位を指向する（北 87° 西）。長軸長約 4.7 m、短軸幅約 2.4 m を測り、復元深度は約 0.5 m を測る。埋土は瓦の包蔵状況で 2 層に分けたが、ブロック土のわずかな差異によるもので、短期間に埋め戻された一括層位と理解できる。SX1078 との重複関係のない東半には多量の瓦が遺存し、28 ℓコンテナ 11 箱に及ぶ瓦が出土した。当初は現地保存の予定であったが、上面で確認できる平瓦の凸面に格子叩き調整を極めて多く認めることから、基準資料的な位置付けが可能と考え、土層観察用の畔を残し、すべて取り上げた。

313 ～ 339 は上層出土遺物である。313 は軒丸瓦である（KH106B 型式）。丸瓦の大部分は行基式で、わずかに玉縁式を認める（324）。凸面の叩き調整は板ナデにより確認できない。凹面に模骨痕を認める個体が多くある。317 は側縁

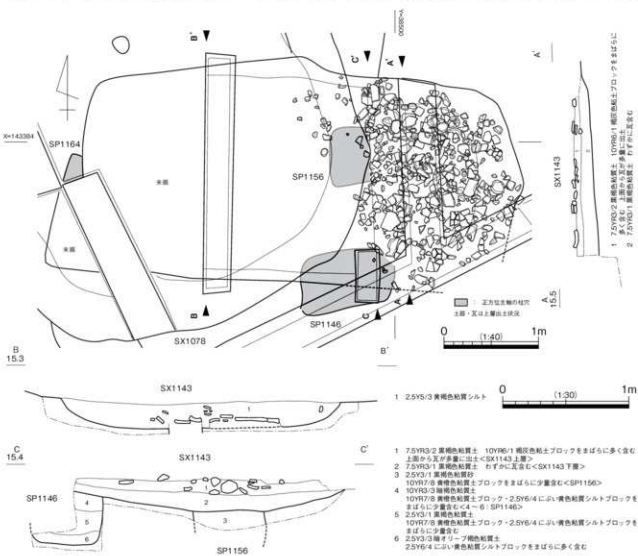


図 401　35-1Tr・SX1143 平断面図

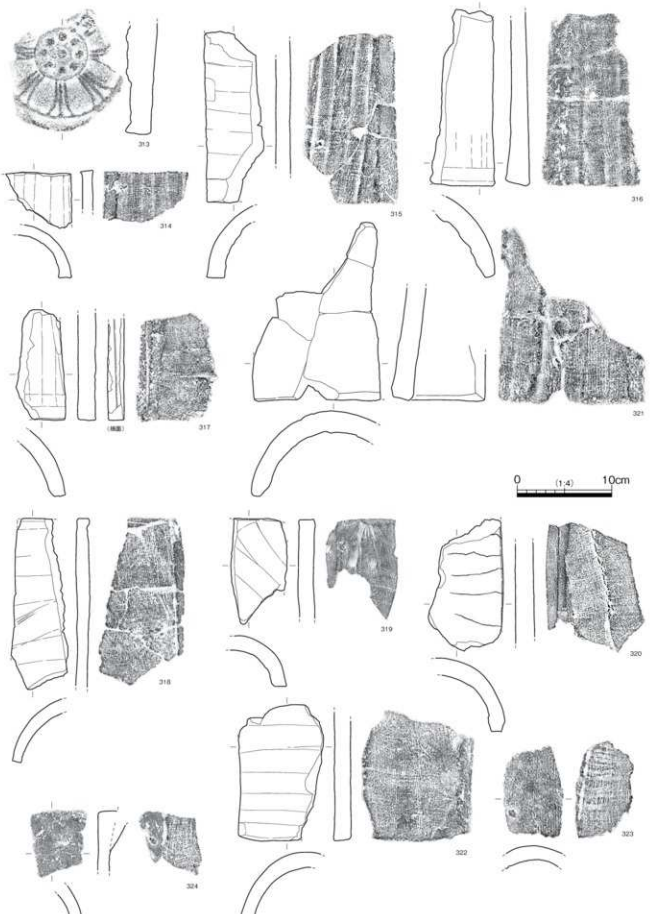


図 402　35-1Tr・SX1143 上層出土遺物 1

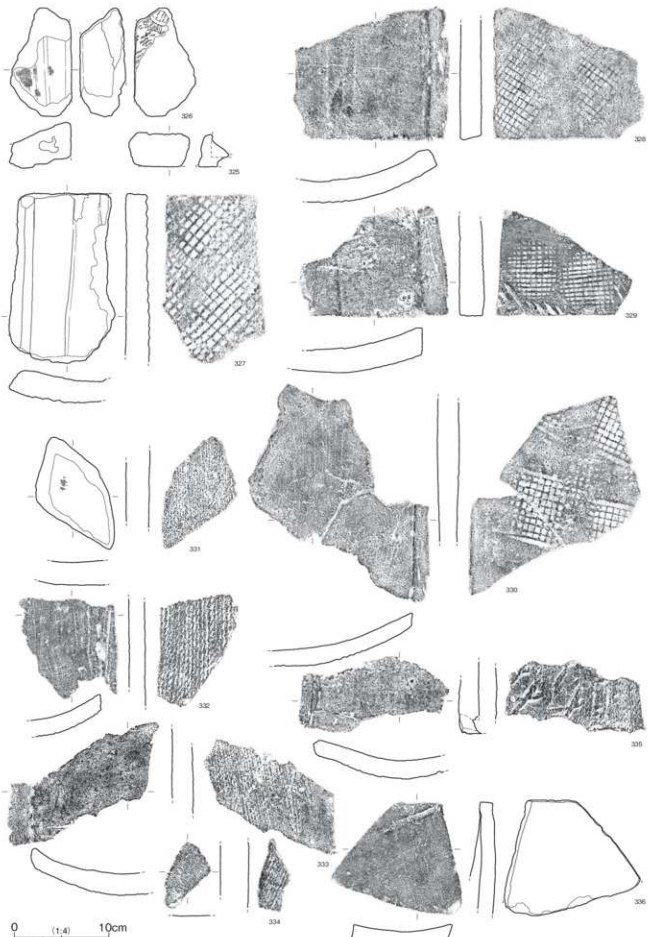


図 403　35-1Tr・SX1143 上層出土遺物 2

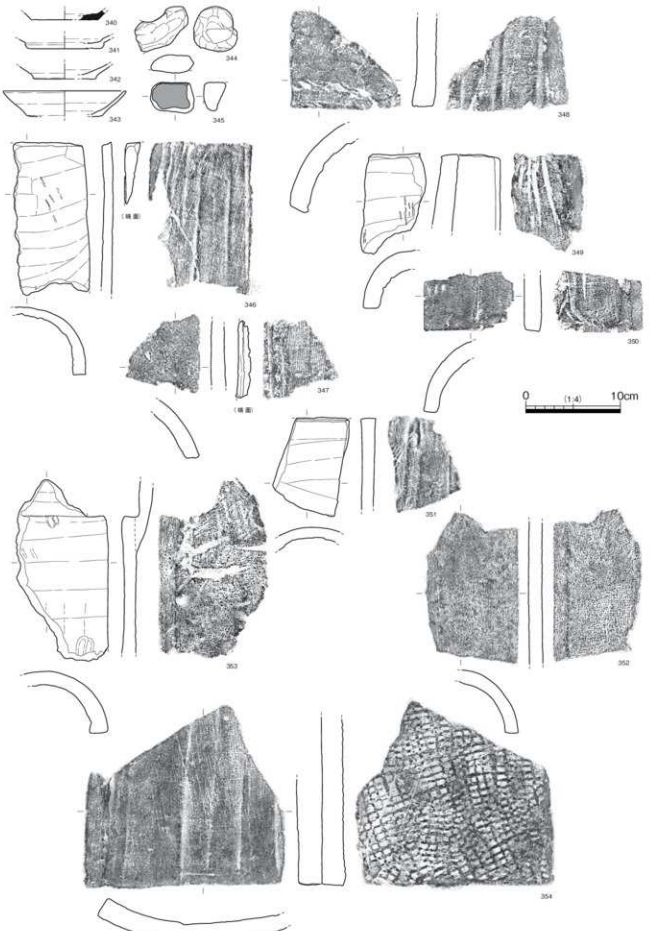


図 405　35-1Tr・SX1143 下層出土遺物 1

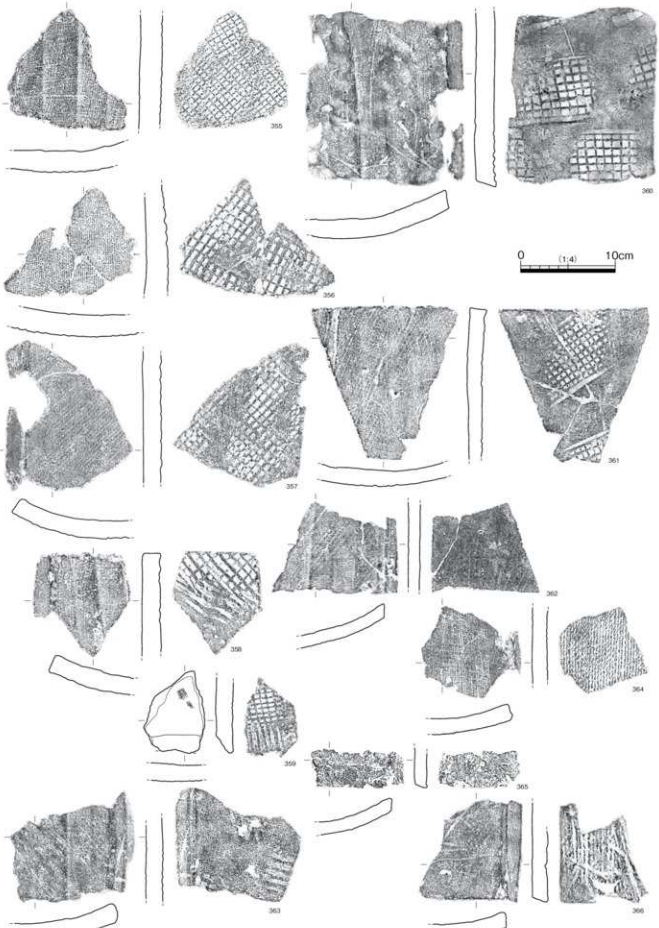


図 406　35-1Tr・SX1143 下層出土遺物 2

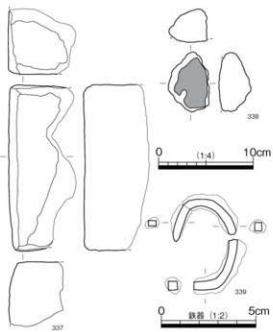


図 404　35-1Tr・SX1143 上層出土遺物 3

に切り込みによる分割痕跡を認め、凸面の側縁脇にも切り込み線を認める。325・326 は軒瓦である。326 は曲線顎の可能性が高く、凸面に縄叩きを認める。KH203 型式か。平瓦は当初の想定に反し、格子叩きを多く認めるが、縄叩きも一定量あり、後者には斜位の縄叩目（333, 334）や格子風の大きなポジ面を持つものもある（335、一枚作りか）。336 は隅瓦である。337 は瓦塼である。長軸長 17.3 cm、厚み 5.4 cm以上を測る。340 ～ 373 は下層出土遺物である。340 は須恵器坏、341 ～ 343 は土師質土器坏である。10 世紀中葉頃の所産か。丸瓦は上層と同じく、行基式を多数認め、玉縁式は少ない（353）。凸面はナデ仕上げにより、叩き調整を消すが、平行叩きがかすかに残る個体を認める。回面に模骨痕を認める個体が多い。346・347 は側縁端面に切り込みと破断面を認める。平瓦は格子叩きが多いが、縄叩きも一定量認める。後者には斜位方向の縄叩きを認める（369, 371）。373 も凸面は格子叩き後、ナデ調整が加えられた桶巻き作りの瓦であるが、窓を認める。鬼瓦の可能性も残す。瓦の出土量は破片数 653 点（丸瓦 281 点（43%、平瓦 372（57%））、総重量 73,421 g（丸瓦 27,482 g（37%）、平瓦 45,939 g（63%））を数える。平瓦の凸面調整の格子叩きと縄叩きの比率は破片数では 73%：23%、重量比では 78%：22%となる。以上、SX1143 は格子叩きが主体となる時期の一群の可能性を考慮し（7 世紀末前後）、取り上げを行ったが、須恵器坏（340）、土師器坏（341 ～ 343）の年代観から 10 世紀中葉まで下る資料であることが判明した。しかし、一括廃棄された一群であり、当該期の瓦の様相を示す資料となる。また、遺構の主軸方位は正方位を指向し、正方位地割が 10 世紀中葉まで残る可能性等、多くの問題を提起する。なお、SA2020 の南で、SX1143 に先行する重複関係を持つ正方位主軸の柱穴を 3 基検出した。建物・柵を構成せず、これまで検出してきた柱穴群と同時期と考えて掘り下げ調査は実施していないが 10 世紀中葉まで下る正方位主軸の遺構の存在を考慮すると、本柱穴の時期は不明と考えざるを得ない。

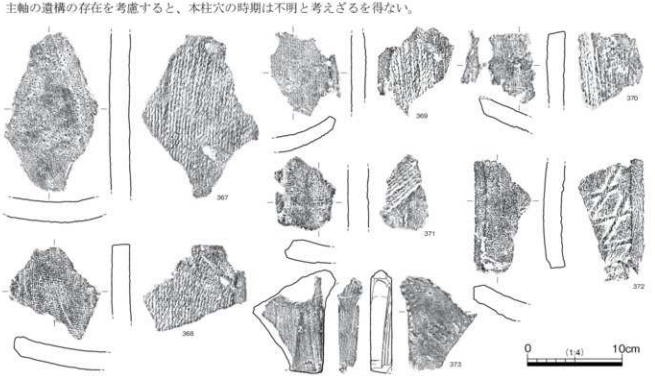


図 407　35-1Tr・SX1143 下層出土遺物 3

SX1089.SX1132（図 408 ～ 410）

調査区中央東寄りで検出した不明遺構である。東西方向の幅広の範囲に瓦が集中し、複数の東西溝が錯綜した状況を想定して調査を進めたが（大型建物群の南辺を画する塀設）、結論的には SX1078 と重複ないし接するように開削された瓦溜まり（廃棄土坑）の可能性が高いと判断した。平面形は不明瞭ながら、周辺の条里地割に合致した東西方位を示す。断面形状は浅い皿状を呈し、埋土は土器・瓦を多く含む黒褐色粘質土の単層とした。SX1132 は SX1089 の南西隅の一角がやや深くなることから別遺構としたが、元来は同一遺構の可能性が高い。

374 ～ 389 は SX1089、390 ～ 399 は SX1132、400 ～ 402 は SX1089 ないし SX1132 が重複する箇所から出土した遺物である。土師質土器坏（374, 375）、台付坏（376, 392 ～ 394）、土師質土器羽釜（377, 396）から 10 世紀中葉から後葉の帰属時期を想定しておきたい。

SX1078（図 408.411 ～ 430）

調査区中央部で検出した巨大な廃棄土坑である。下位遺構検出のため、土層観察用の畔を残し完掘した。平面形は長楕円形を呈し、南北長約 18 m、東西最大幅約 5.6 mを測る。９世紀後葉から 10 世紀前葉頃に帰属する SB2045、10 世紀中葉の SX1143 に後出し、近世初頭の SD1079、12 世紀後半から 13 世紀の SB2046・2047 に先行する重複関係をみとめる。主軸方位はおおむね周辺の条里地割に合致する（北 26° 西）。断面形状は浅い皿状を呈し、深度は 0.3 m前後を測る。埋土は黒褐色粘質土の単一層を基本とし、北端部ではその上位に瓦の包蔵状況や色調の異なる黒褐色粘質土が堆積するが、廃棄段階（タイミング）の差異と判断している。なお、本遺構は下位遺構の検出を目的とし、数本の土層観察用の畔を残して完掘した。

出土遺物は 28ℓコンテナで 123 箱出土した。403 ～ 414 は図 411 のＡ―Ａ’セクションの３層東端付近で灯明具に転用した土師器坏がやや集中する箇所があり、廃棄単位を考慮し、他と区分した。403・404 は須恵器坏、405 ～ 407 は土師器坏である。内外面に煤痕を認める。灯明具に転用した土師器坏は見込みの煤痕の付着範囲が特徴的である。406 は径２～３cm程度の煤痕が付着しない範囲があり、407 は見込み中央部径約５cmの範囲に煤痕はみられず、405 は両者の中間的な非煤痕範囲を示す。408 は八栗産凝灰岩製の石造物片である。409 は鉄滓である。隣接する SX1138 からの混入となる。410 ～ 413 は軒丸瓦である。410 は KH106A 型式、411 は KH101 型式、412 は KH103 型式、413 は KH105 型式である。

415 ～ 708 は SX1078 出土遺物である。遺構規模が大きく、検出地点には最大約 18 mの距離を認めるが、一括して報告する。415 ～ 417 は須恵器蓋、418 ～ 420 は須恵器坏、421 は須恵器椀である。蓋は古相を示し、坏は 10 世紀中葉前後、椀は 12 世紀後半頃の所産となる。須恵器坏や椀には煤痕を認め、須恵器碗の転用例は多くないが、灯明具としての使用が想定できる。422 ～ 454 は土師器ないし土師質土器坏である。422 ～ 444 は底部内面の外縁部がわずかに肥厚し、口縁部に甕がる形態を呈する。10 世紀中葉前後の所産となる。445 は底径が小さく、底部がやや突出する。446 は底部がわずかに突出する。坏Ｃ。10 世紀中葉。447・448 は底部が大きく突出する大振りの坏である。11 世紀初頭前後。449 ～ 454 は位置付けに迷うが、12 世紀前半頃に属する坏であろう。内外面ないし内面、端部に煤痕を認め、灯明具としての使用が想定できる。煤痕の付着状況は中世的な端部のみ（454）、見込みほぼ全面（422, 423）、見込み周縁（436, 443）、見込みに径２～３cm程度の非煤痕範囲が点在（439, 444, 447, 449, 450）など多様で、口縁部や外面の付着状況を加えると、より複雑となる。坏の形態や帰属時期と煤付着状況に相関関係は認められない。455・456 は土師器台付坏である。椀と大差はなく、12 世紀前半まで下るかもしれない。457 は黒色土器（Ａ類）椀である。高台は断面三角形状を呈し、矮小化が著しい。12 世紀後半頃か。458 は猿投窯産灰釉椀である。９から 10 世紀。459 は洛西産緑釉陶器椀である。口縁部は輪花をなす。９世紀後半。460 は青磁碗、461・462 は白磁碗である。468 は須恵器甕を用いた円盤状土製品である。463 は須恵器鉢である。十瓶山窯産か。465・466 は須恵器壺である。前者は肩部が張り、後者は撫で肩を呈し、いずれも突帯を巡らす。西播磨産か。467 も同器形を想定したが、内面のナデ調整の方向から体部に突帯が巡る形態を想定した。

469 ～ 606 は軒瓦である。本報告書では細片まで含め瓦当面が遺存する軒瓦はすべて抽出・図化しており、方針に従い、すべての軒瓦を図化した。469 は KH110 型式に酷似するが、蓮弁内に稜を認める。妙音寺 M0101 に共通した特

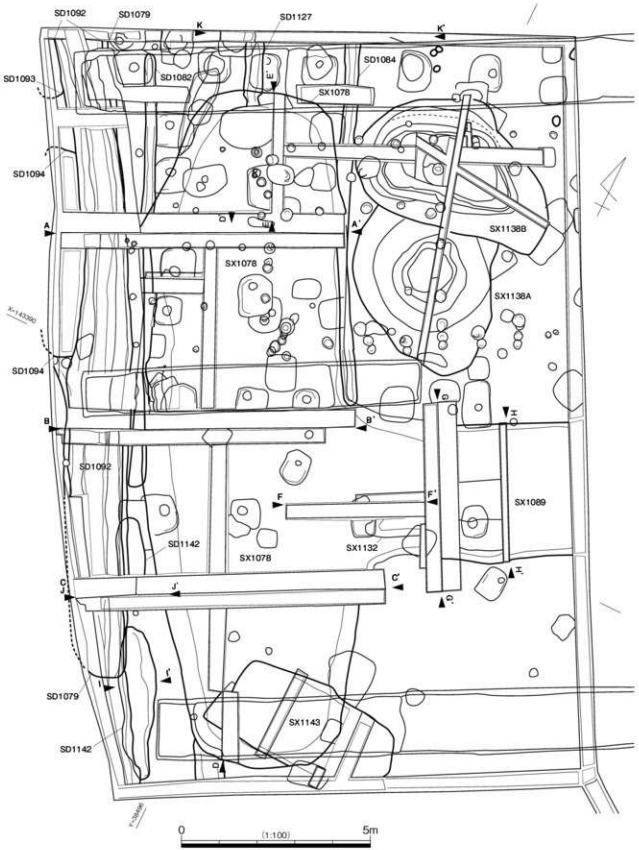


図 408　35-1Tr・SX 平面及び断面位置図

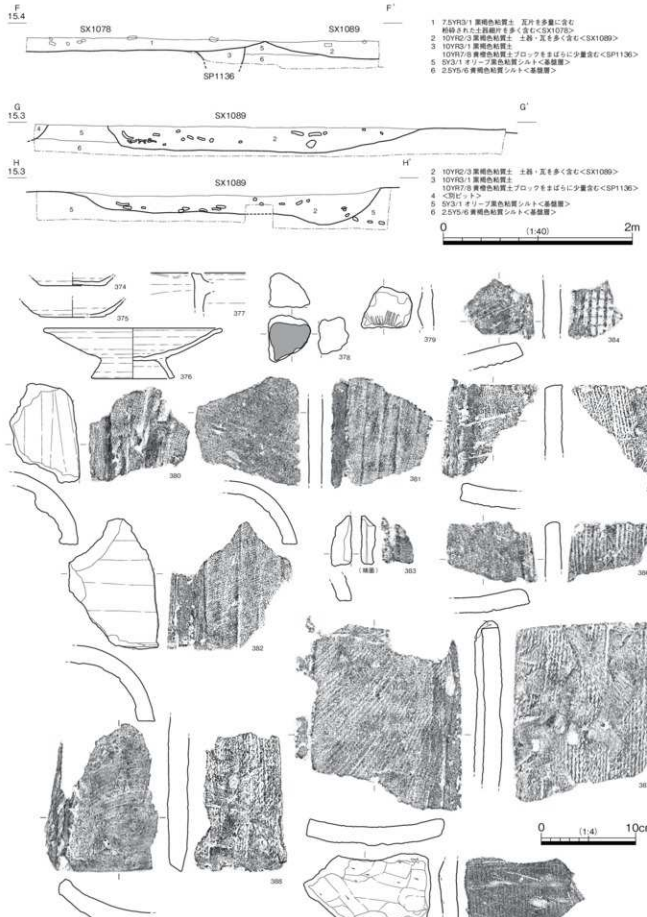


図 409　35-1Tr・SX1089 断面図及び出土遺物

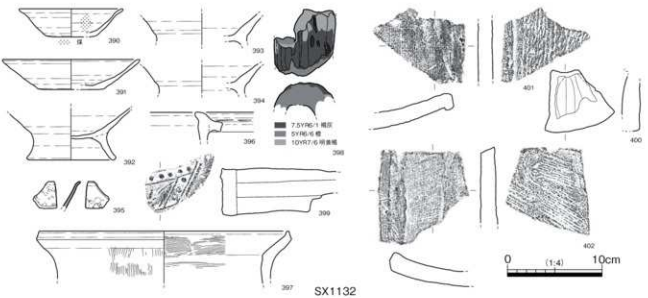


図 410　35-1Tr・SX1089.1132 出土遺物

倣であり（高松市歴史資料館 1996）、瓦当周辺が幅広である点に問題を残すが、KH101 型式に先行する型式と考えられる。胎土は粗く、焼成も悪い。470 ～ 476 は KH101 型式である。蓮弁間に配される珠文はすべて 1 個で、2 個（KH102 型式）はない。砂粒を多く含む粗い胎土と砂粒を含まない胎土を認め、前者は硬質に焼成されるが、後者の焼きは甘い。477 ～ 483 は KH103 型式とした。KH104 型式と判別し難いが、瓦当周縁が突出し、立体的な素弁を指標とした。茶褐色の色調を呈し、胎土は比較的精良であり、焼成も良好である。484 ～ 487 は KH104 型式である。瓦当周縁に明瞭な突出はなく、素弁は立体感を認めるが、KH103 型式に比してわずかに扁平化すること、瓦当周縁の突出を認めない点を指標に同定した。胎土・焼成は KH103 型式に酷似する。488 ～ 506 は KH105 型式である。胎土は精良で須恵質焼成となる。507 ～ 547 は KH106 型式であるが、細分が可能であり、同范の追刻である可能性が高く（第 7 章第 2 節）、507 ～ 524 は KH106A 型式、525 ～ 535 は KH106B 型式、536 ～ 547 は判別不能となる。KH106A 型式は文様の凸線がシャープで断面は三角形状を呈するが、KH106B 型式は蒲鉾状を呈し、鈍い。KH106B 型式の方が一回り大きいが、文様構成や周縁の特徴的な鋸歯文の配置、蓮弁の広狭、中房の蓮子配置などは酷似する。KH106A 型式は胎土が精良で、須恵質焼成であるのに対し、KH106B 型式は胎土が粗く、瓦質状の焼成となる点に起因した焼き上がりの差異と理解できる。548 ～ 551 は KH110 型式である。10 世紀の補修瓦と評価される（渡部 2015）。552 は KH108 型式であるが、法勲寺跡の HK107 A と同范瓦で（高松市歴史資料館 1996）、そこからの搬入品となる。胎土は比較的精良だが、焼成が甘く、瓦質焼成となる。553 ～ 556 は KH114 型式である。文様構成は KH101 型式に酷似するが、蓮弁は窪む。復古型式か。胎土は砂粒が少ない均質なもので、焼成は瓦質焼成となる。558 ～ 593 は KH202 型式である。SX1078 の軒平瓦の大多数を本型式が占める。559・560・563・564・579 ～ 582 には顎下端ないし顎下の凸面に丹線を認める。分析の結果、564 の赤色顔料はベンガラであることが判明している。平瓦部凸面には各単位の 2 辺に枠線状の沈線を認める格子叩き、顎下面にはかすかに平行叩きを認める（558. 561. 573）。本型式は顎ないし瓦当面の貼付方法に独特な特徴がある。瓦当面と顎、平瓦部上端は別作りの粘土帯を平瓦先端部に貼付するが、顎と瓦当面が接する箇所に断面三角形の別粘土を貼付した個体を多く認める（573. 580 ほか）。瓦当面が遺存しない 594 ～ 603 はいずれも段顎であり、接合方法が酷似することから、KH202 型式の可能性が高い。604 は唯一出土した KH203 型式である。曲線顎と考えられる。KH202 型式が比較的精良な胎土で焼成も良好であるのに対し、604 は胎土が粗く、焼成も悪い。605 は KH205 B’型式である。12-53 と比較すると、追刻された文様を認め（KH205 B 型式（開法寺出土瓦））、さらに KH205 B 型式と珠文の位置や文様の長さが異なる箇所があり、暫定的に KH205 B’型式とした。凸面には幅狭の縄叩きを認める。606 は小片だが、KH206 型式と判断した。瓦当面下端が大きく突出し、鋸歯文を配する。渦巻き状の均等唐草文に復元できる。焼成は良好で、胎土も精良である。三野郡妙音寺や道音寺で同文瓦が確認できる（高松市歴史資料館 1996）。KH205 型式は 10 世紀代の補修瓦と評価される（渡部 2015）。

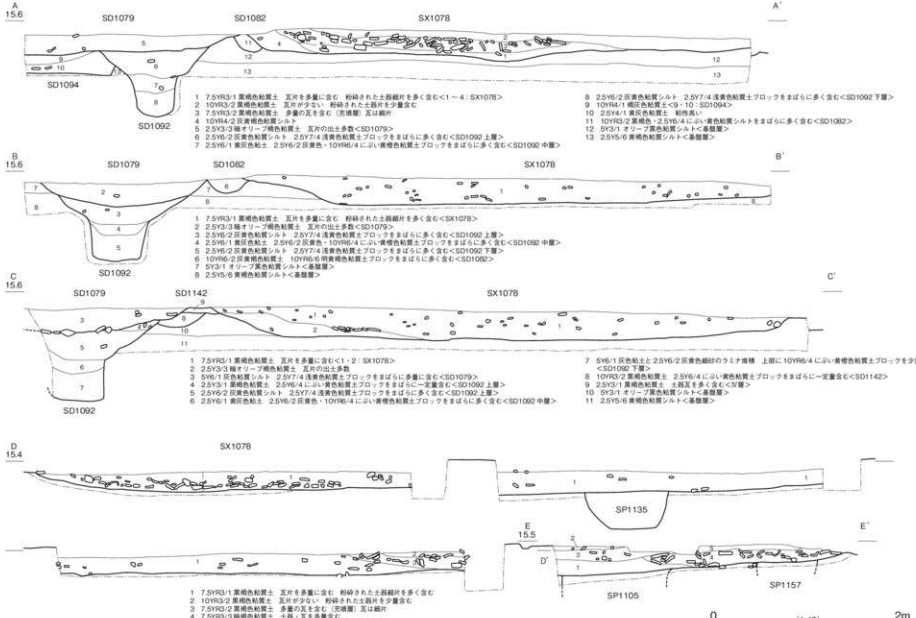


図 411　35-1Tr・SX1078 断面図

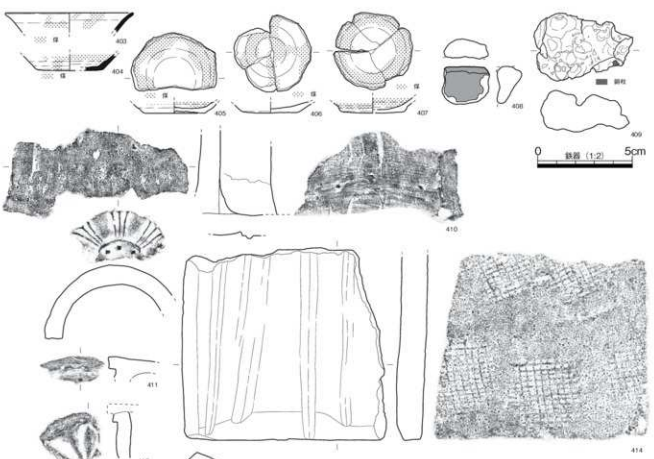


図 412　35-1Tr・SX1078 出土遺物 1

607 ～ 623 は丸瓦である。607 は行基式で凸面に平行叩きをかすかに認める。玉縁式では 609・611 は平行叩き、608 は縄叩きとなる。613・614 の側縁には切り込みと破断面を認め、615 ～ 617・619 ～ 622 の凹面には模骨痕を認める。624 ～ 701 は平瓦である。凸面の叩き調整が多様で、網羅するように選択して抽出を行った。624 ～ 654 は格子叩き目を認める。624 ～ 634 は叩き原体にバリエーションを認めるが、叩き間隔が密な一群である。いずれも桶巻き作り。635 ～ 652 は凸面に各単位の２辺に枠線状の沈線を認める格子叩き目である。一部は３辺に枠線を認める個体もあるが（639, 640, 650 ～ 652）、同一個体で平行枠線とコ字形枠線を認める例もあり、原体と凸面の接し方に起因する場合もあるようだ。本叩き目は散漫に施される場合が多く、一次成形時の平行叩き目を認める個体も認め（635, 638, 645, 652）、成形後の加飾の側面が強い。その一方、636・642・646 はやや密に施される。635 ～ 645 は桶巻き作りと考えられるが、646 ～ 652 は側縁に布目は確認できないが、平滑な凹面から一枚作りの可能性が高く、叩き目の密度が密→粗、桶巻き→一枚作りへといったような単純な変遷過程は辿れないようである。653・654 は格子単位が比較的大きなもので、前者の凹面には丁寧なケズリ調整、後者には糸切り痕を認める。桶巻き作り。655・656 は斜格子叩き目を認める。密に施されるようだ。桶巻き作り。657 ～ 664 は平行叩き目を認める一群である。斜位に施される個体が多いが、661・664 は矢羽状に重なる。凹面に糸切り痕を認める 663 は一枚作りの可能性が高いが、それ以外は桶巻き作りとなる。665 ～ 669 は平行叩き目だが、複数の×も陽刻する特徴的な叩き目である。叩きは凸面全面に及び、いずれも一枚作りとなる。670 は粗い平行叩きの凹部にやや太い線を設け、格子風を呈する凸面調整である。凹面の平滑状況から一枚作りの可能性が高い。671 ～ 695 は縄叩き目を認める一群である。671 ～ 679 は直線的な縄叩きである。672 ～ 674・677 は縄目が細く、凸面に段差を認めないが、675・676・678・679 は直線的な縄目単位が目立ち、凸面表面に原体単位で微弱な凹凸を認める。671 以外は側縁に布目を確認できないが、凹面の平滑な状況か

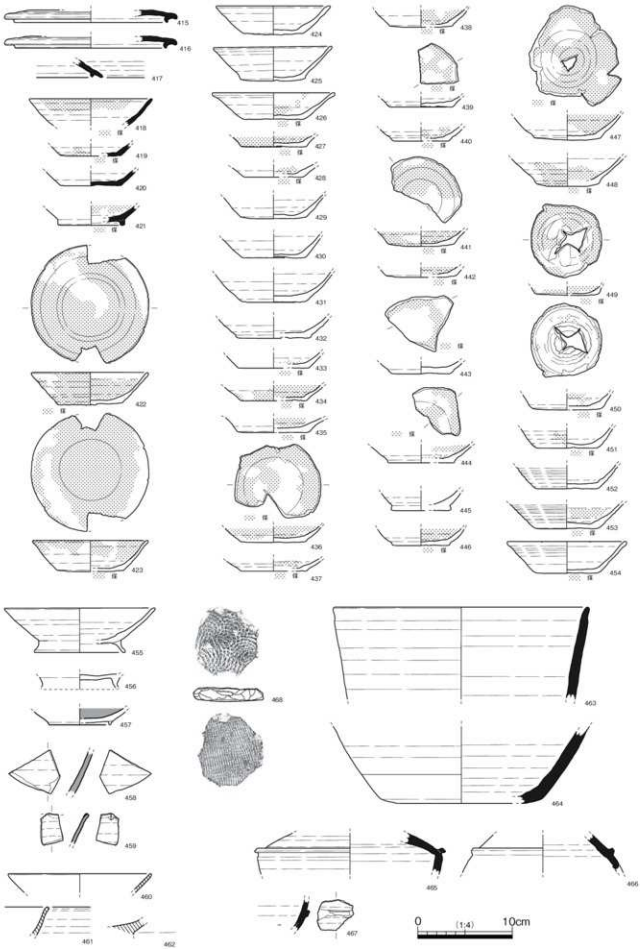


図 413　35-1Tr・SX1078 出土遺物 2

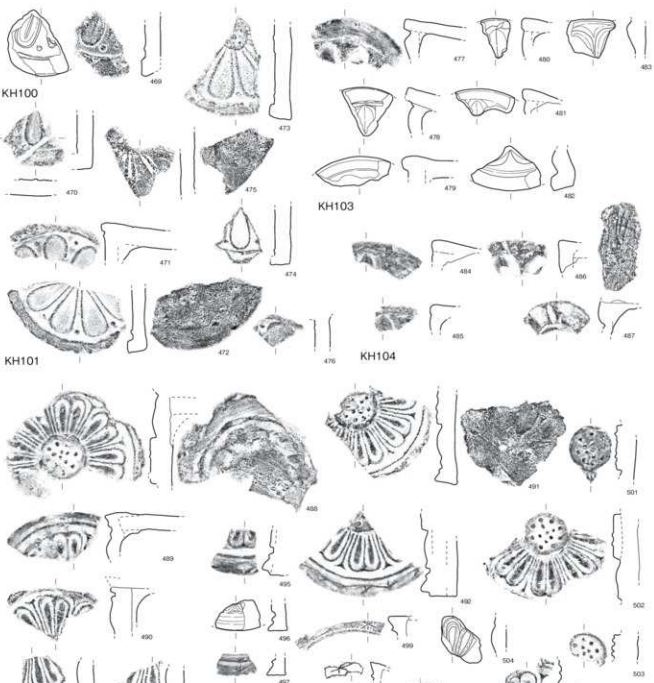
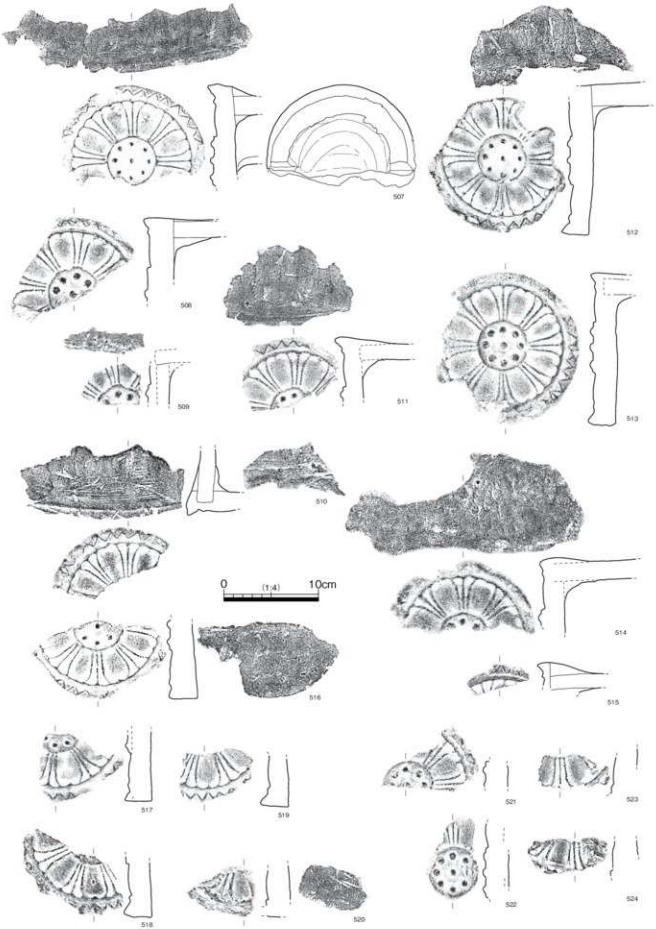


図 414　35-1Tr・SX1078 出土遺物 3

らいずれも一枚作りの可能性が高い。680 ～ 693 は斜位の縄叩きである。680 ～ 689 は直線的な縄叩きに比して縄目がやや太く、総じて縄目単位が目立ち、凸面表面に原体単位で微弱な凹凸を認める。690 ～ 693 は叩きが散漫に施され、原体間に間隙を認める。いずれも一枚作りと考えられ、690 の側縁には布目が残る。694・695 は斜格子状のポジ面を認めるが、縄叩き目を持つ一群である。斜格子の大きさは異なる。凹面の平滑状況から一枚作りと考えられる。696 ～ 698 は桶巻き作りで、凸面全面にナデ調整を認める。698 の外面には丹線を認め、開法寺最初期の軒瓦に用いられた平瓦の可能性が高い（渡部 2017）。699 は斜格子のポジ面を認めるが、縄叩き目は確認できない。700 は凹・凸面ともに糸切り痕を認める。701 は凹面に布目を認め、凸面側には斜位の微弱な段差がある。鵺尾か。瓦の出土量は破片数 9,735 点（丸瓦 3,402 点（35%、平瓦 6,333（65%））、総重量 861,149 g（丸瓦 281,883 g（33%）、平瓦 579,266 g（67%））を数える。平瓦の凸面調整の格子叩きと縄叩きの比率は破片数・重量比ともに 60%：40%となる。



KH106 A

図 415　35-1Tr・SX1078 出土遺物 4

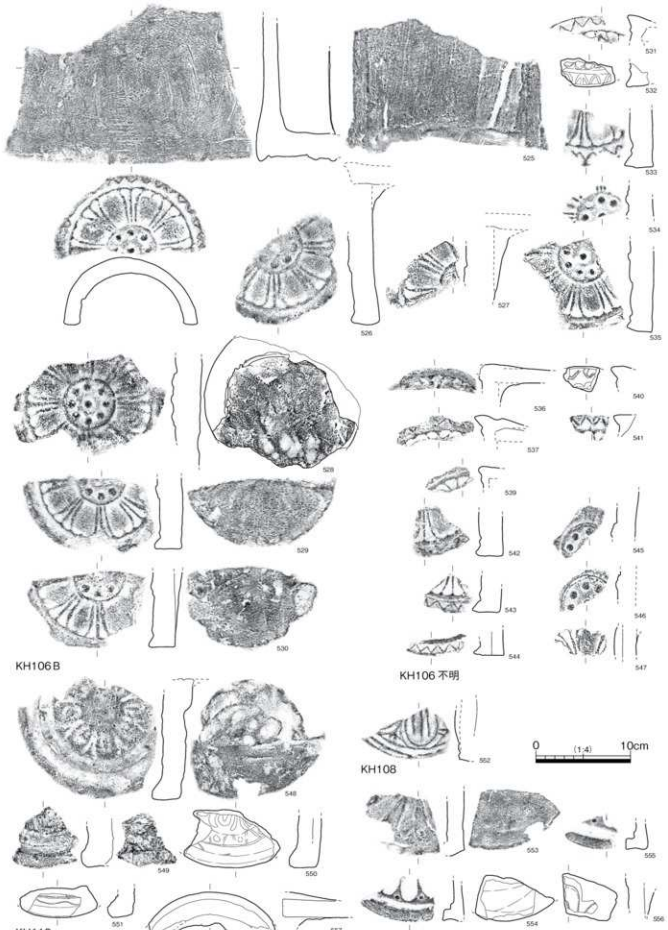


図 416　35-1Tr・SX1078 出土遺物 5

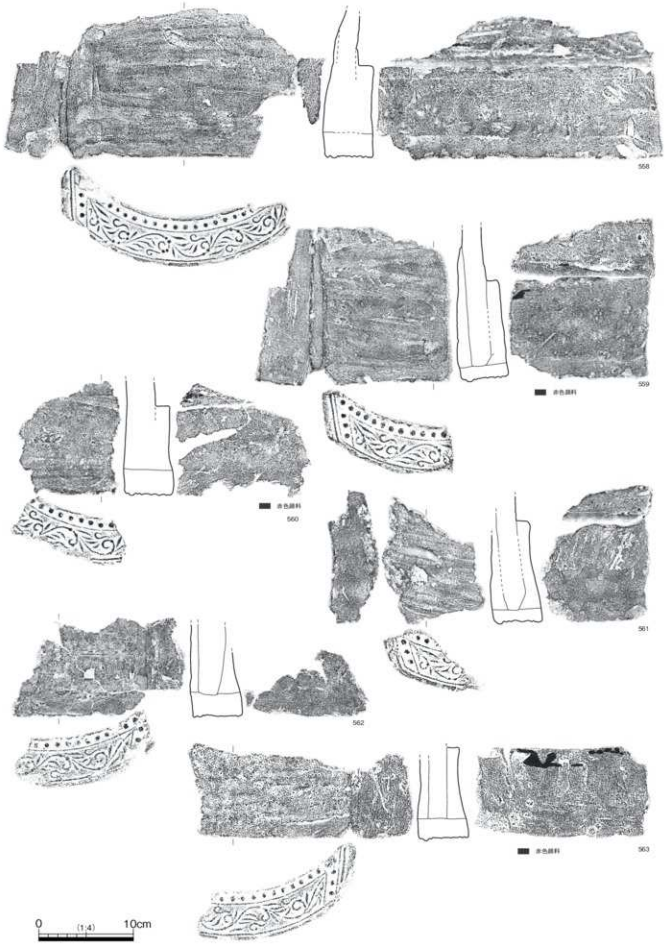


図 417　35-1Tr・SX1078 出土遺物 6

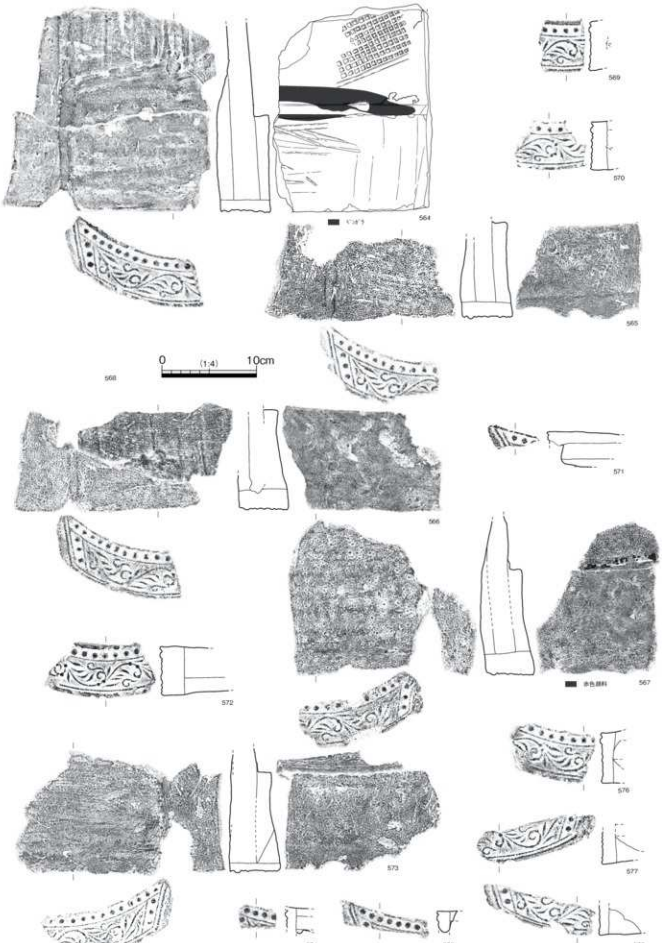


図 418　35-1Tr・SX1078 出土遺物 7

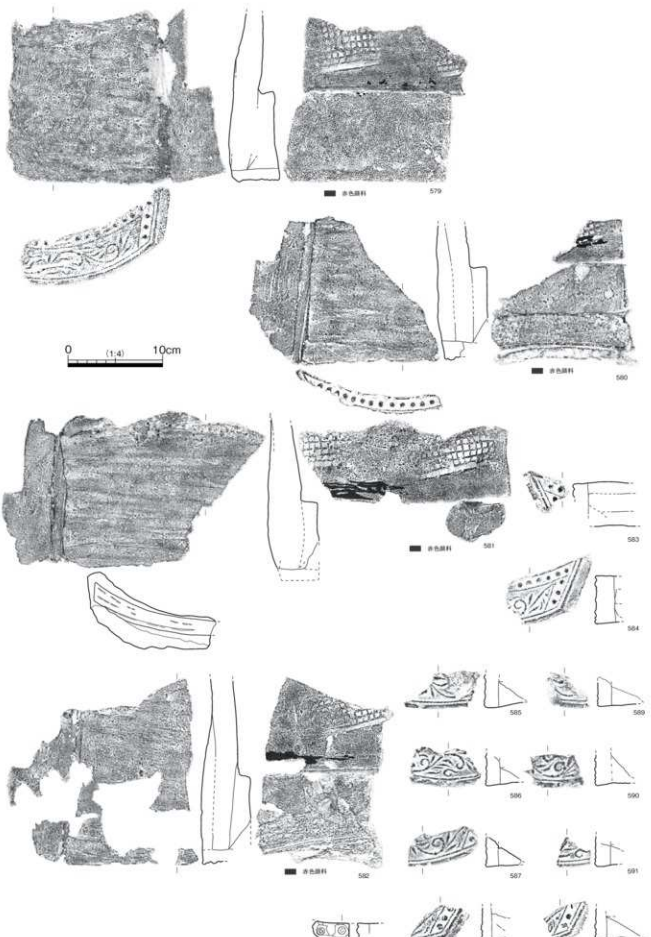


図 419　35-1Tr・SX1078 出土遺物 8

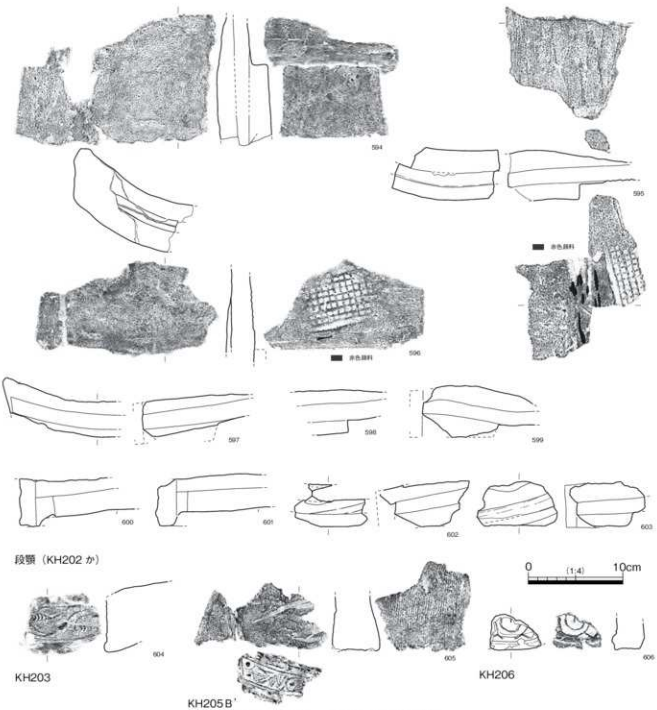


図 420　35-1Tr・SX1078 出土遺物 9

702 ～ 706 は八栗産凝灰岩製の石造物片である。702 は六角形の平面形に復元でき、A 面には刳り込み、B 面には丸瓦ないし垂木を表現した直方体が剥落した痕跡を認める。12-1147 に類例を認める。層塔の笠部の可能性が高い。表面に認める被熱痕（黒化）が平滑面から破損面まで広がる。703 ～ 706 は平滑面を認める。707 は鉄釘である。708 は楕形鍛冶滓である。底面には炉底の土が付着する。SX1138 の西側 1 m の地点から出土しており、SX1138 からの混入の可能性が高い。709・710 は SX1078 を含む箇所に設定したトレンチ出土遺物である。

以上、SX1078 出土遺物は 7 世紀後葉から 12 世紀後半頃までの遺物が混在する。古相を示す一群、10 世紀中葉前後の一群、12 世紀中葉から後半の一群に大別でき、出土遺物や層序、遺構の重複関係から 12 世紀後半頃の廃棄土坑と考えられる。多量の遺物が出土しており、開法寺跡の一堂宇ないし開法寺全体の廃絶に伴って一括廃棄された可能性が高い。10 世紀中葉前後の土器群の出土量が多く、堂内に保管されていたものが廃絶に伴って廃棄されたと考えられ、出土遺物による遺構の年代決定の不安定さを示唆する。第 7 章第 2 節で詳述するが、瓦も 7 世紀後葉から 8 世紀代に

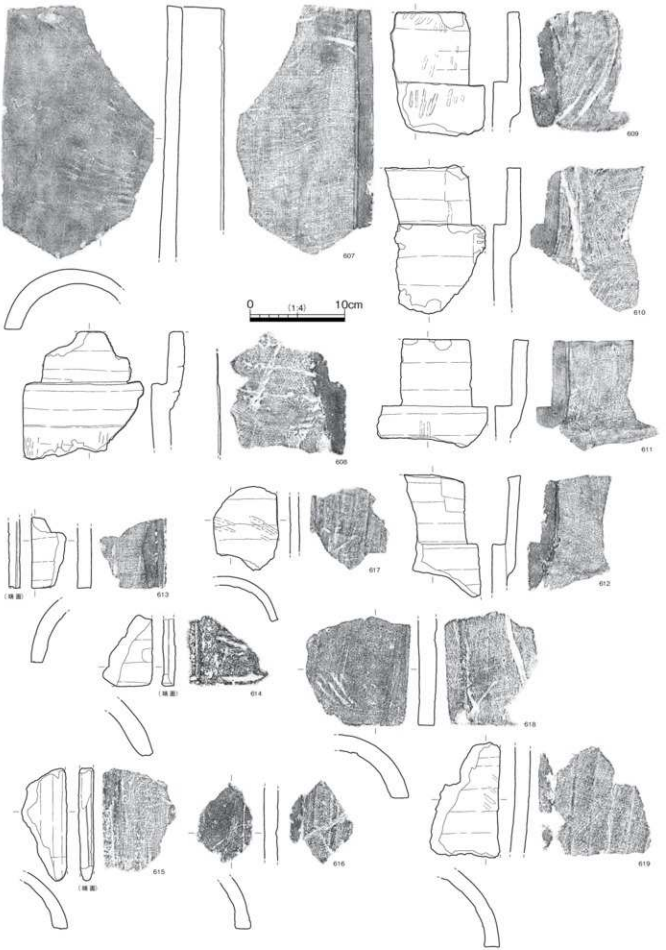


図 421　35-1Tr・SX1078 出土遺物 10

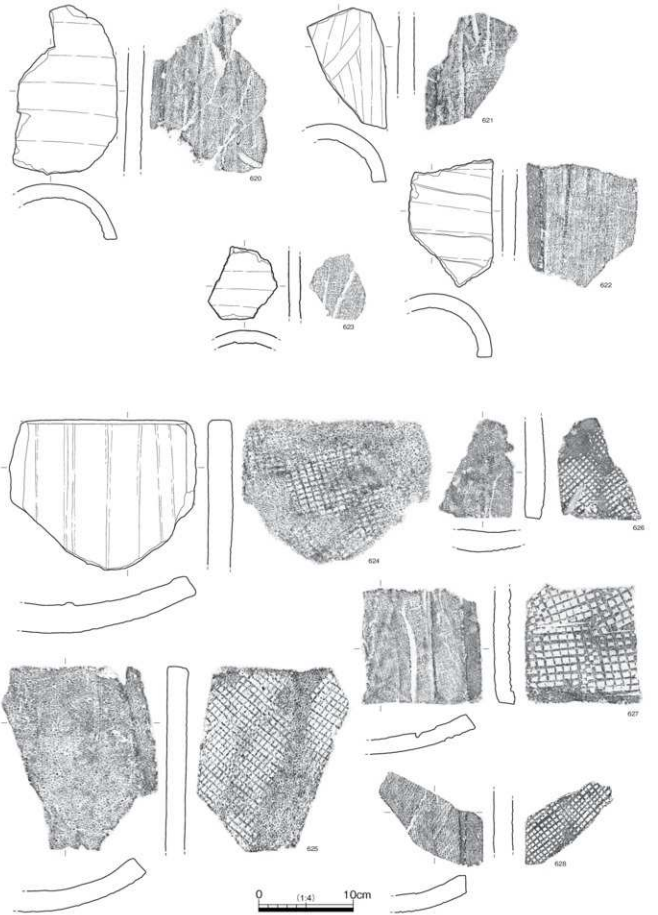


図 422　35-1Tr・SX1078 出土遺物 11

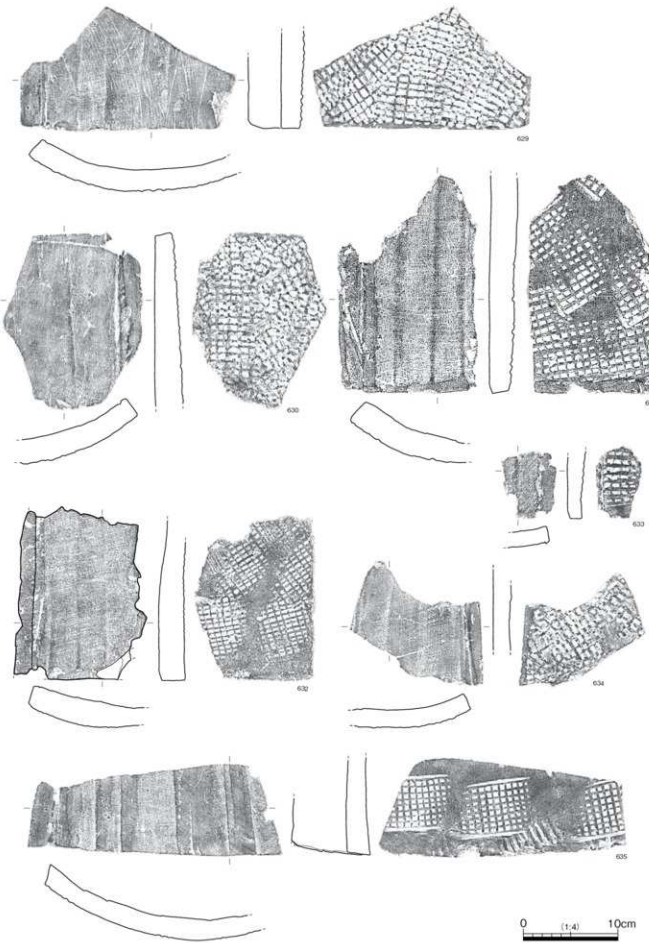


図 423　35-1Tr・SX1078 出土遺物 12

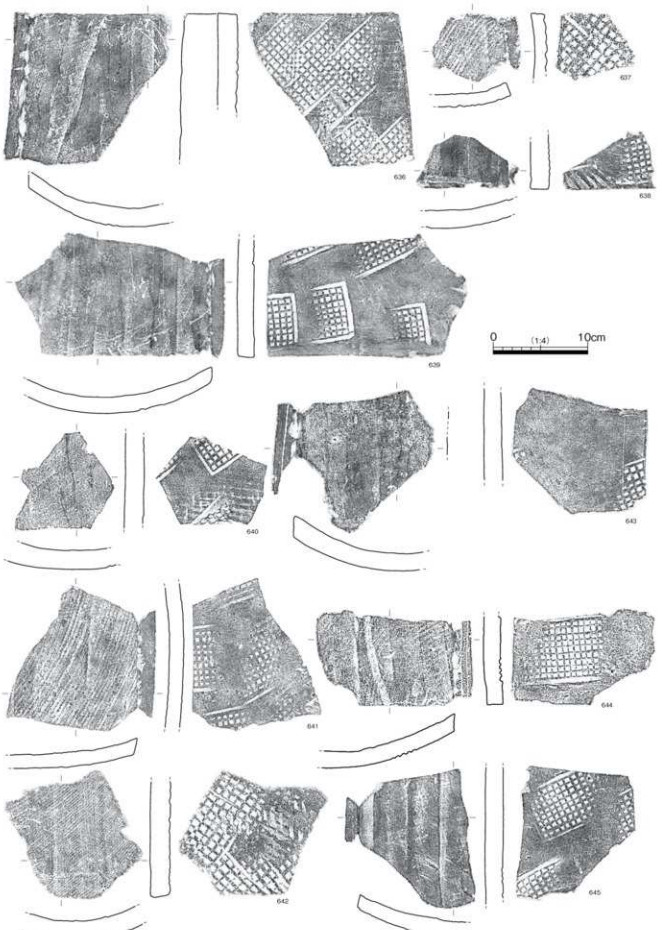


図 424　35-1Tr・SX1078 出土遺物 13

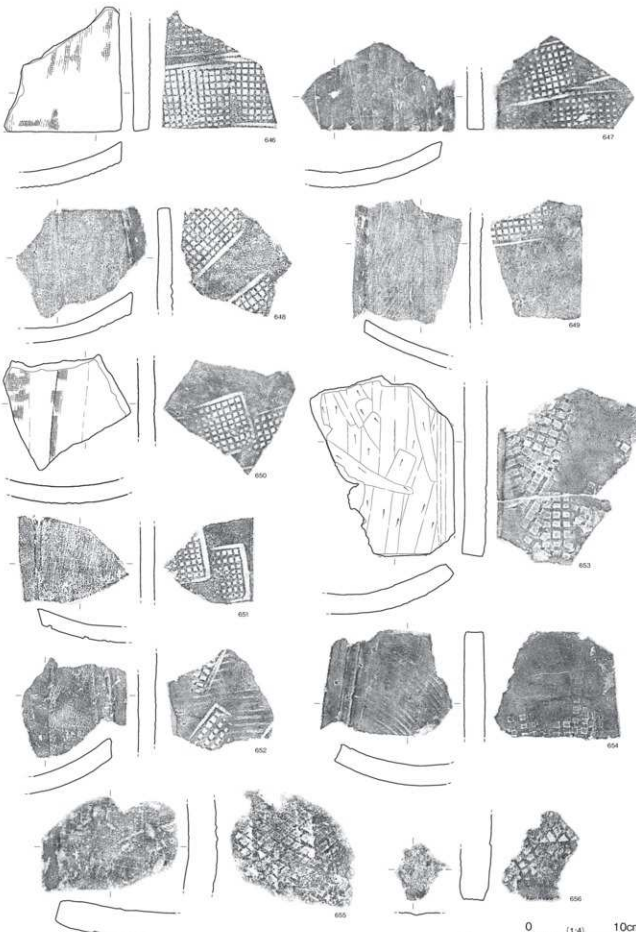


図 425　35-1Tr・SX1078 出土遺物 14

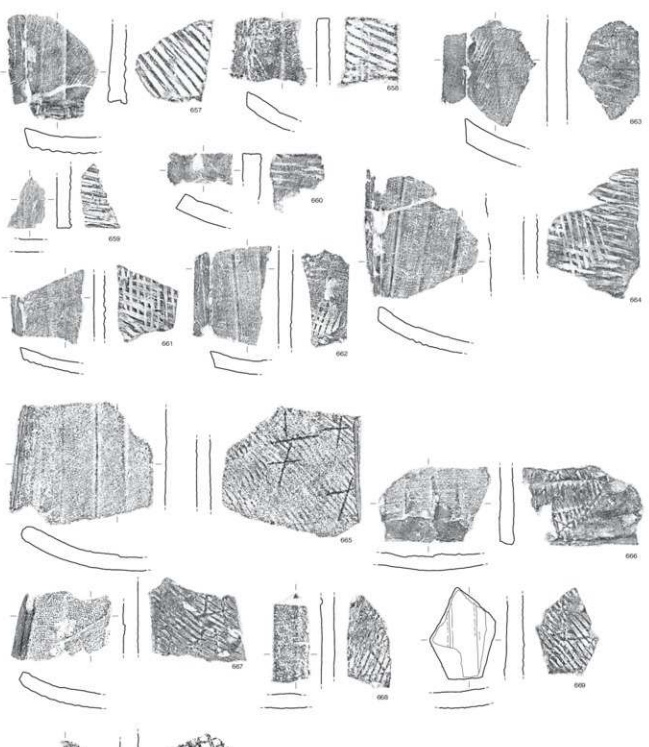


図 426　35-1Tr・SX1078 出土遺物 15

属する瓦が 60%近くを占め、10 世紀代の補修瓦（KH110 型式．KH205 型式）の出土点数は極めて少なく、廃棄時期との瓦組成が乖離する。一方、平瓦については、編年は確立していないが、斜位の縄叩きや散漫に施される縄叩きを一定量認める。凸面の叩きは重量、破片数ともに格子叩き：縄叩き＝60：40、縄叩きの直線：斜位＝74：26 程度の比率を示し、軒瓦に比して葺き替え時の差替えがやや頻繁であった可能性を示唆する。また、開法寺東方地区に開法寺の廃棄土坑が設けられる点は注意を要する。開法寺使用瓦が多量に開法寺東方地区から出土しており、10 世紀初頭

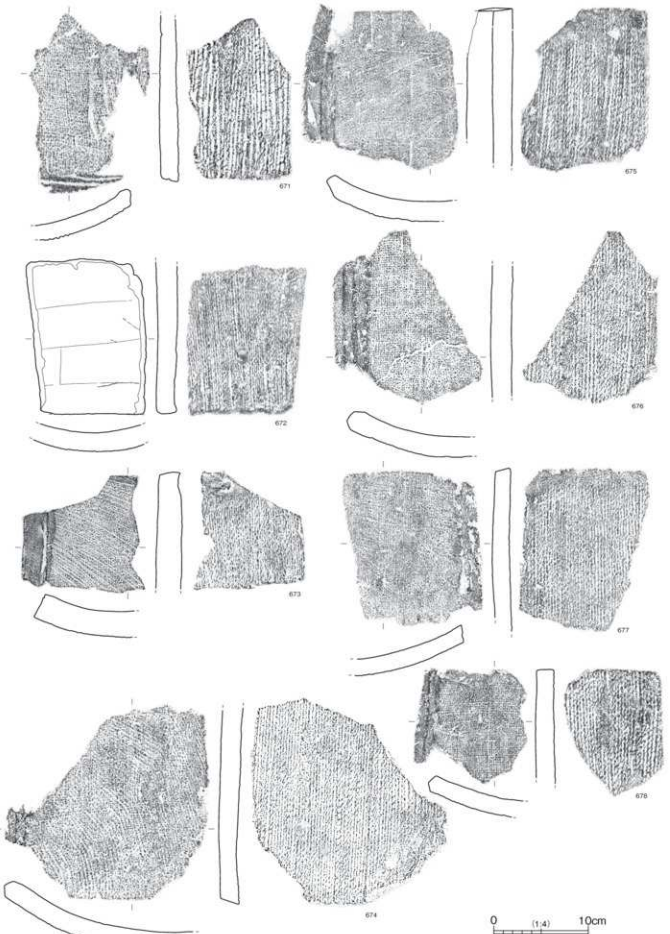


図 427　35-1Tr・SX1078 出土遺物 16

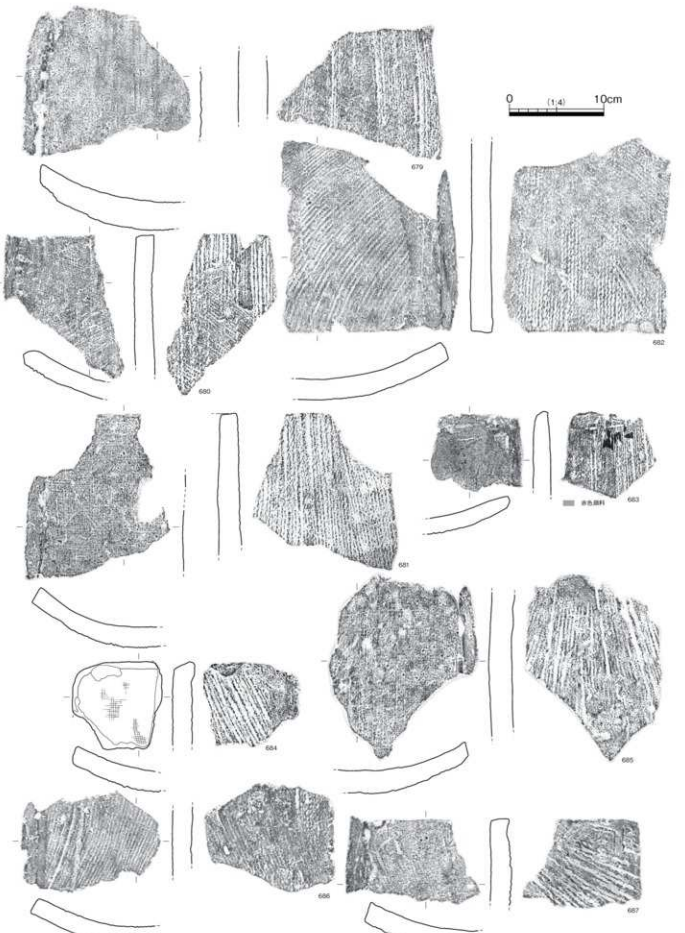


図 428　35-1Tr・SX1078 出土遺物 17

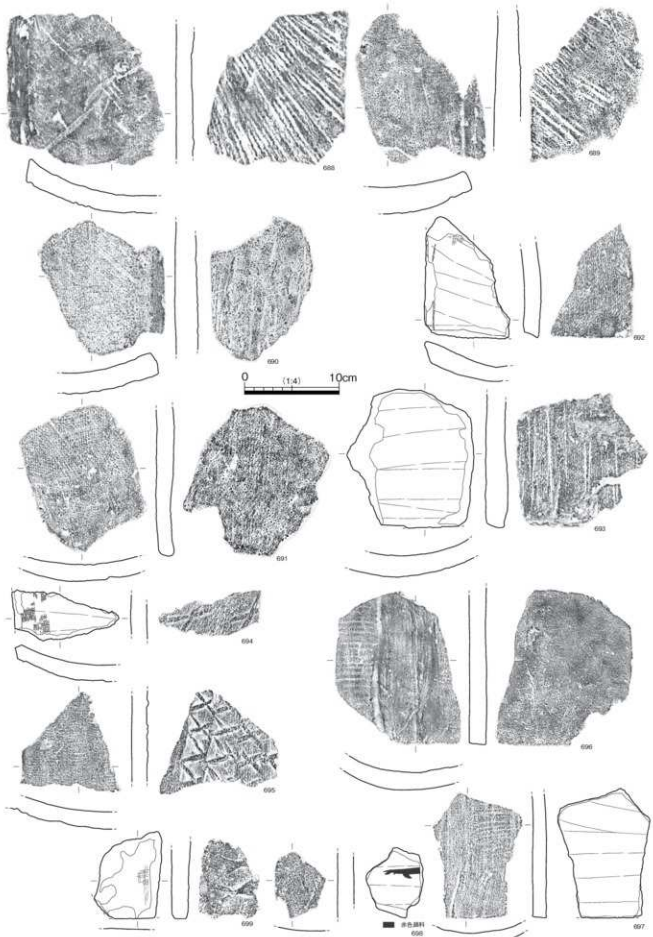


図 429　35-1Tr・SX1078 出土遺物 18

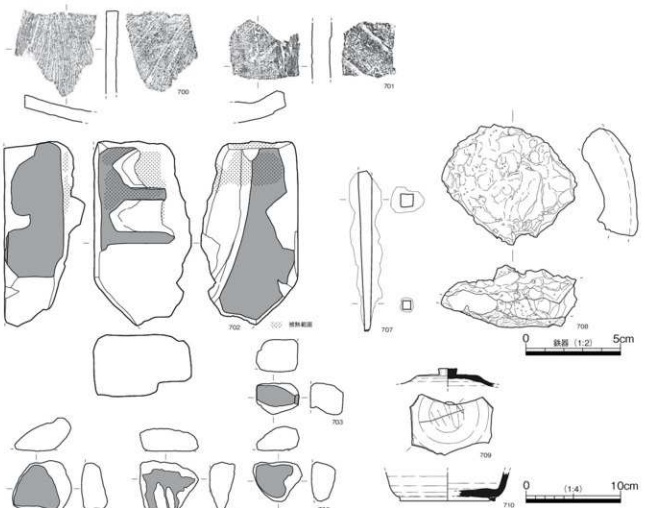


図 430　35-1Tr・SX1078 出土遺物 19

前後には一体的な整備がなされたようであり（33-2 トレンチの整地層（Ⅳ①層）が開法寺地区の北方建物でも確認）、両者の関係は不可分と考えられる。従前の調査では開法寺に関連する遺構は未検出であり、33-2 トレンチや本調査区の西端で確認した溝等により、両者の境界は継続的に維持されたと考えられるが、SX1078 は 12 世紀後半頃に開法寺ないし開法寺の一堂宇が廃絶し、その片付けに伴う遺構であり、当該期には空間の利用形態に変化が生じたと評価できる。

④小結

本調査区では当初目的であった開法寺東方地区と開法寺地区の境界部分の状況について、断片的ながら状況を確認したが、南辺を画する施設は確認できなかった。8 世紀前葉以降となる条里地割に合致した遺構が調査区北半に高密度で分布するが、北半には正方位主軸の遺構のみを検出し、その遺構密度も散漫であり、こうした遺構分布の偏在性から、遮蔽施設は確認できないが、本調査区の南側付近に開法寺東方地区に展開する大型建物で構成される施設の南辺を想定することができる。また、従前の変遷観に合致した遺構を確認した点も大きな成果となる。一方、空間構成という視点では、SA2020 が現開法寺伽藍の下位への延長、開法寺の廃絶に伴う廃棄土坑の検出は新たな問題を提起する。前者は現開法寺伽藍の整備時期や初期の開法寺伽藍と開法寺東方地区に認める 7 世紀後葉から 8 世紀初頭の正方位主軸（基調）の建物群との関係に再考を迫るものである。後者は 12 世紀後半頃における空間構成の変化、具体的には 8 世紀後葉から 11 世紀前葉までは大型建物群で構成された施設が開法寺東方地区を占有した状況であったが、12 世紀後半頃には占有が解除されたことを示し、境界の消滅とともに、空間の使用方法に変革を認める。大型建物群や SB2046・2047 を含む以降の建物群の性格や開法寺の盛衰や性格の変化に関連するものであり、讃岐国府の変遷のなかでは大きな変化となる。

（2）35-2 トレンチ

①概要

35-2 トレンチは微高地南端部の 35-1 トレンチと段丘崖と考えられる崖面下に設定した。35-1・3 トレンチ間の層序の連続性を把握するために設定したトレンチである（5095-1 番地）。35-1 トレンチの南東部に設定し、両者の間は幅 0.5 mのトレンチで連結させた。調査区は東西約２m、南北約５mの規模となる。調査の結果、崖面際まで 35-1 トレンチで確認した安定した遺構面が延びることを確認するとともに、35-1 トレンチの南半部の遺構密度の稀薄性や検出遺構の偏在性と合致するような状況を確認した（散漫な正方位主軸の柱穴の検出）。出土遺物数は 28 ℓコンテナで１箱を数える。

②層序・検出遺構・出土遺物

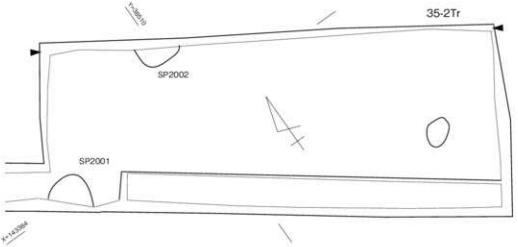
本調査区は開法寺東方地区に広がる微高地の南端に位置し、緩やかに南ないし東に傾斜し、すぐ南には歴史地理学の視点から古代末の完新世段丘崖と評価される２mに及ぶ段丘崖を認める（高橋 1992、木下 2011）。

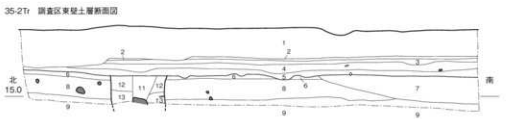
基盤層はほぼ水平に堆積する挙大の礫を多く含む暗灰黄色粗砂で、上面が遺構面となる。その下位にはにぶい黄橙色粗砂と褐色粘質土のラミナ堆積を認める。開法寺東方地区の基盤層は微高地中央付近では安定した黄褐色粘質土を認め（基本層序１層）、本基盤層は微高地縁に向けて傾斜し、斜面部には黄灰色シルト～粘土や茶褐色粗砂、暗褐色粘質土、灰黄褐色粘質砂、にぶい黄色粘質砂などが堆積し、その上面が遺構面となる。黄褐色粘質土の上面には縄文期の地床炉と考えられる遺構を検出し、斜面の堆積土からは縄文晩期の遺物をごく少量検出しており、微高地縁辺部の不安定な基盤層は縄文晩期の形成となり、本調査区で認める暗灰黄色粗砂やその下位のラミナ堆積土も縄文晩期頃に形成された可能性が高い。その上面が古代以降の遺構面となり、遺構は稀薄ながら崖際までほぼ水平に古代の遺構面が広がり、崖面形成以降にその縁部が崩れた箇所に７層が堆積する。713は７層から出土した土師質土器足釜である。時期決定に問題を残すが、14 から 15 世紀頃の所産と考えられる。その上位には連続する水田層を認め（図 431- ４．５層）、中世期の須恵器甕が混入で含まれるが（711）、712 の年代観（17 世紀前半）から近世初頭頃の水田と考えられる。さらに、上部の耕作土（図 431-2.３層）は 35-1 トレンチで複数の水田を合筆した状況を確認しており、近現代期への帰属が想定できる。

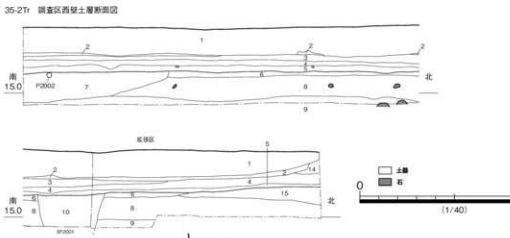
本調査区では３基の柱穴を確認した。南東部の柱穴はシミ状を呈するが、SP2001・SP2002 は調査区外に延びるため全容は不明ながら、正方位主軸（基調）を指向した柱穴の可能性が高い。35-1 トレンチの南端部付近は遺構密度が低く、条里地割方位の遺構はみられず、正方位主軸の遺構を散漫な分布で認め、本調査区の遺構分布に合致した状況を呈する。

③小結

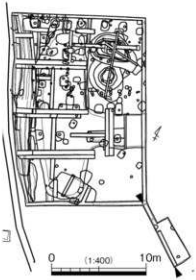
本調査区では開法寺東方地区に展開する安定した微高地の南端の崖際まで比較的安定した古代の遺構面が展開することを確認し、散漫ながら正方位主軸（基調）の遺構を確認した点は大きな成果である。35-1 トレンチで認める遺構の偏在性が崖際まで連続し、開法寺東方地区に所在する大型建物群で構成された施設の南辺の想定に妥当性があるといえる







1 花崗土、近現代、造成土 上面の現耕作土は未掘記
2 10YR5/1 褐灰色粘質土<耕作土>
3 10YR6/4 にぶい黄橙色粘質土<床土>
4 10YR5/2 灰黄褐色粘質土<旧耕作土>
5 10YR5/3 にぶい黄橙色粘質土<旧床土>
6 Mn 沈着層（8 層上面）
7 10YR4/2 灰黄褐色粘質土、10YR5/1 褐灰色粘質土ブロックをまばらに少量含む、
足跡跡部包含（14～15 世紀）<造成土>
8 2.5Y4/2 暗灰黄色粘砂、こぶし大以下の円礫を多く含む<基盤層>
9 10YR6/4 にぶい黄橙色粘砂と 10YR4/1 褐灰色粘質土のラミナ状積<基盤層>
10 10YR3/1 黒褐色粘質シルト 10YR6/3 にぶい黄橙色粘質シルトと 2.5Y4/1
黄灰色粘質土ブロックをまばらに多く含む <SP2001 埋土>
11 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルトに焼き取り><11～13：SP2002 埋土>
12 10YR3/1 黒褐色粘質土
10YR5/1 褐灰色粘質土ブロックをまばらに多く含む<12・13：貼込め>
13 2.5Y3/1 黒褐色粘質土
5Y5/1 灰色粘質土と 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルトブロックをまばらに多く含む
14 2.5Y4/1 黄灰色粘質土<耕作土>
15 10YR4/2 灰黄褐色粘質土<基盤層>



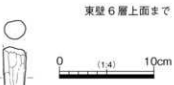


図 431　35-2Tr 平断面図及び出土遺物

（3）35-3 トレンチ

①概要

35-3 トレンチは崖面下の低地部分に設定した調査区である。現標高では崖上の微高地と崖下の低地には約２ｍの比高差があり、歴史地理学の視点から本崖は古代末の完新世段丘崖と評価されており（高橋 1992、木下 2011）、本調査区は低地における遺構・遺物の包蔵状況の確認と段丘の形成時期の把握を目的として、5019-2 番地に設定した。規模は幅２ｍ、長さ約８ｍを測る。調査の結果、14 から 15 世紀以前の氾濫痕跡を確認し、以降で大規模な造成を伴う耕地開発がなされ、本調査区では確認できないが、35-4・5 トレンチの成果からその後も再び大規模な氾濫を受けた後、15 から 16 世紀に再度耕地化が試みられ、近世初頭に現景観に繋がる嵩上げがなされるという土地履歴を確認することができた。崖の形成時期は 14 から 15 世紀以前であることは確実だが、古代末の完新世段丘崖の存否は判断できない。なお、出土遺物は 28 ℓコンテナで５箱を数える。

②層序及び検出遺構・出土遺物

図 432・433 に基づき、報告する。最深部は東端部で約 2.6 ｍ掘り下げたが、基盤層の検出には至らず、掘り下げ最下位付近では拳大の小礫や円礫を多く含む灰色砂質土を基調とし、局所的にラミナ堆積やシルト堆積を認める（Ｂ層、18 ～ 22 層）。河川堆積層と考えられ、段丘崖形成に伴う氾濫土の可能性が高い。Ｂ層上面は崖際では地表下約１ｍ、標高 13.1 ｍ付近となるが、東端部では標高 11.9 ｍを測り、緩川側に向けてやや強く傾斜する。埋め戻し時に断割調査による遺物検出に努めたが、遺物の出土は確認できない。その上位には黄褐色粘質土や灰黄褐色混砂粘質土を基調とした多様な埋土を認める（Ｃ層、12 ～ 17 層）。黒褐色粘質土ブロックや黄灰色粘土ブロック等を多く含み、磨滅痕のない土器・瓦も多く包含する。遺物の帰属時期は８世紀～ 12 世紀後半頃だが、35-4 トレンチではＣ層に対応する層位から土師質土器足釜を検出しており、形成時期は 14 から 15 世紀と考えられる。遺構埋土に酷似した黒褐色粘質土ブロック土や基盤層に酷似した粘土ブロックを多く認め、ローリングを受けていない土器・瓦を多く含むことから、本層位は微高地上面を削平し、氾濫後の低地を埋めた造成土と考えられる。35-4 トレンチではＣ層上端付近で牛馬による踏み込みの可能性が高い撹拌層を認め、埋め戻しの目的は低地の耕地化と推測できる。微高地上には 13 世紀までの遺構が展開するが、その廃絶後、14 から 15 世紀のいずれかの時期に大規模な造成により、低地の耕地化を試みたと理解できる。Ｃ層の上位には褐灰色ないし黄灰色粘質土ブロックを多く含む灰黄褐色粘質シルト、にぶい黄橙色粘質シルトが堆積する（Ｅ層、８～ 11 層）。８世紀～ 13 世紀前葉までの磨滅痕のない土器・瓦とともに 15 から 16 世紀代の土器が出土する（716 ～ 737、742 ～ 747）。８～ 11 世紀に属する遺物を選択的に除き、12 世紀以降の遺物を中心に抽出した。12 から 13 世紀に属する土師質土器小皿・坏、須恵器碗、黒色土器碗を多く認めるが、コースター状の小さな小皿（716、717、725、726）、足釜（719 ～ 721、737）、摺鉢（722）は 15 から 16 世紀の所産と考えられ、Ｅ層の形成時期を示す。本調査区ではみられないが、35-4・5 トレンチではＣ層を切り込む氾濫土を認め（Ｄ層）、Ｅ層は埋土の特徴から氾濫後の造成土の可能性が高い。微高地上を再度削平ないし低地部分の再造成に伴う造成土と考えられ、遺物の出土量がＥ層に比して少ないことから後者であったと推測できる。また、調査区西端部で検出した礫が集中する遺構を検出した（SX3001、SX3002）。構築面はＣ層上面であり（14、17 層）、これらの不明遺構はＥ層形成期に構築された可能性が高い。推定の西端部３ｍ程の範囲に集中し、14・17 層上部を平坦に削り出し、その上部に礫を設置する。SX3001 は東端に人頭大の礫を設置し、それを基部構造として拳大からその２倍程度の礫を充填するが、礫の厚みは現状では薄く、１石ないし２石程度となる。トレンチ北西隅で検出した SX3002 は SX3001 とは積み方が異なり、やや大きめの礫を平積みする。埋積状況の把握ができていない調査当初は突堤状の施設の外縁構造ではないかと考え、サブトレンチを設定して内容把握に努めたが、面的な広がりは確認できず、礫敷きがな遺構の局所構造と判断した。738 ～ 740 は礫群検出時の出土遺物である。コースター状の小皿（738）や足釜（740、741）はＥ層の最新遺物と同時期の所産となる。部分的な検出に留まり全容は不明だが、SX3001・SX3002 は段丘崖沿いの３ｍ幅でのみ確認でき、Ｃ層上端部を成形し平坦面を作り出して構築し、さらにＥ層が SX3001・SX3002 の東側基底を被覆することから、Ｅ層の水田経営に伴い段丘崖沿いに設けられた道路状施設の下部構造の可能性が高い。Ｅ層上部には連続する水田を認める（Ｆ層、４～７層）。耕作土と床土がセット関係となり、少なくとも２単位が確認できる。714・715 がＦ層出土遺物であり、17 世紀前半の所産となり、Ｆ層の帰属時期を示す。さらに、その上部に近現代の水田層を認める。

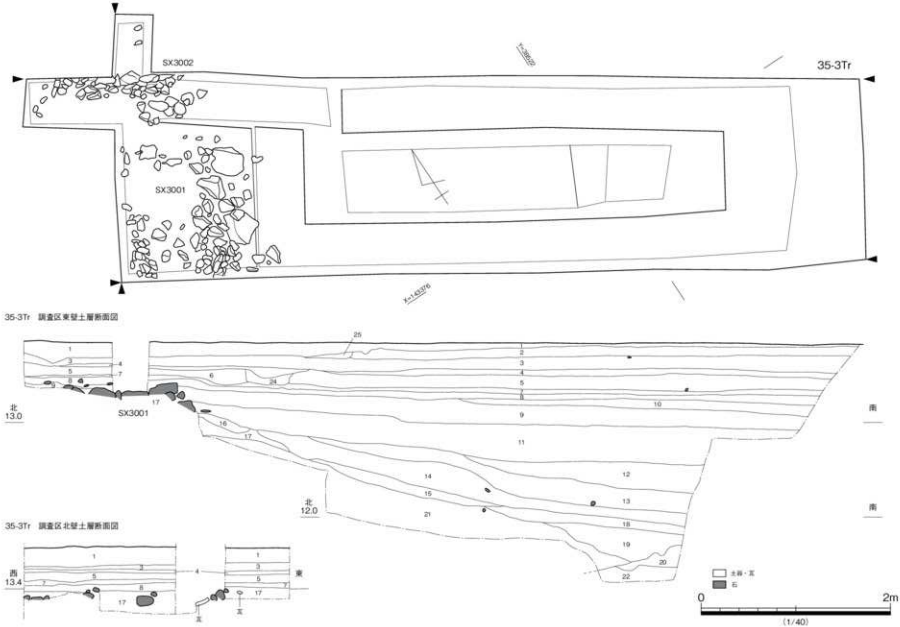
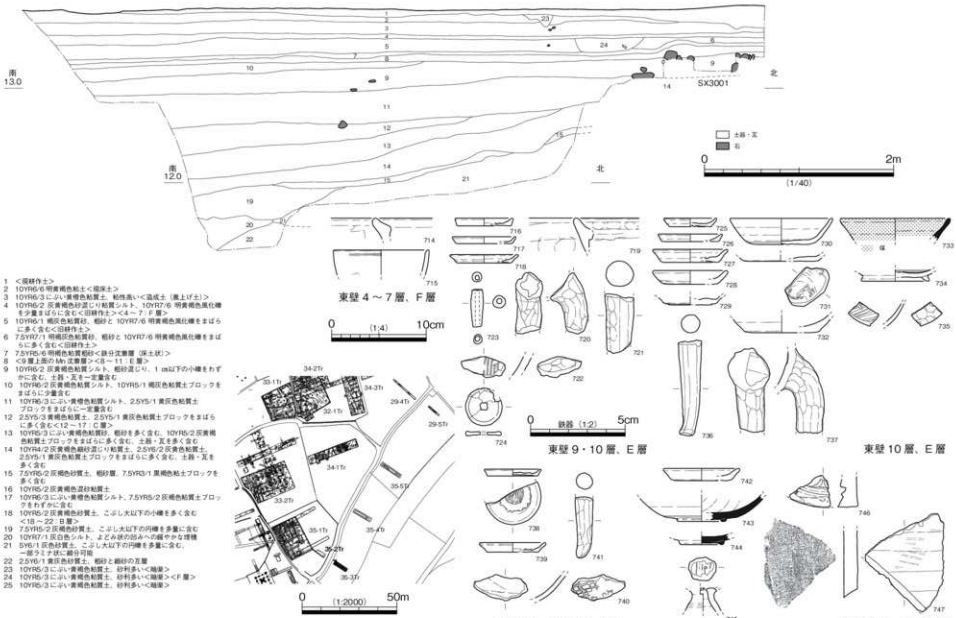


図 432　35-3Tr 平断面図

35-3Tr　調査区西壁土層断面図



1　＜現耕作土＞
2　10YR6/6 明黄褐色粘土＜現床土＞
3　10YR6/3 にぶい黄橙色粘質土、粘性高い＜造成土（黒上げ土）＞
4　10YR6/2 灰黄褐色砂混じり粘質シルト、10YR7/6 明黄褐色風化礫を少量まばらに含む＜旧耕作土＞＜4～7：F 層＞
5　10YR6/1 褐灰色粘質砂、粘砂と 10YR7/6 明黄褐色風化礫をまばらに多く含む＜旧耕作土＞
6　7.5YR7/1 明褐灰色粘質砂、粘砂と 10YR7/6 明黄褐色風化礫をまばらに多く含む＜旧耕作土＞
7　7.5YR5/6 明褐色粘質粘砂＜鉄分流亜層（床土状）＞
8　＜9 層上面の Mn 流亜層＞＜8～11：E 層＞
9　10YR6/2 灰黄褐色粘質シルト、粘砂混じり、1 cm以下の小礫をわずかに含む、土器・瓦を一定量含む
10　10YR6/2 灰黄褐色粘質シルト、10YR5/1 褐灰色粘質土ブロックをまばらに少量含む
11　10YR6/3 にぶい黄橙色粘質シルト、2.5Y5/1 黄灰色粘質土ブロックをまばらに一定量含む
12　2.5Y5/3 黄褐色粘質土、2.5Y5/1 黄灰色粘質土ブロックをまばらに多く含む＜12～17：C 層＞
13　10YR5/3 にぶい黄褐色粘質砂、粘砂を多く含む、10YR5/2 灰黄褐色粘質土ブロックをまばらに多く含む、土器・瓦を多く含む
14　10YR4/2 灰黄褐色細砂混じり粘質土、2.5Y6/2 灰黄色粘質土、2.5Y5/1 黄灰色粘質土ブロックをまばらに多く含む、土器・瓦を多く含む
15　7.5YR5/2 灰褐色砂質土、粘砂層、7.5YR3/1 黒褐色粘土ブロックを多く含む
16　10YR5/2 灰黄褐色混砂粘質土
17　10YR6/3 にぶい黄橙色粘質シルト、7.5YR5/2 灰褐色粘質土ブロックをわずかに含む
18　10YR5/2 灰黄褐色砂質土、こぶし大以下の小礫を多く含む＜18～22：B 層＞
19　7.5YR5/2 灰褐色砂質土、こぶし大以下の円礫を多量に含む
20　10YR7/1 灰白色シルト、よどみ状の沼みへの緩やかな堆積
21　5Y6/1 灰色砂質土、こぶし大以下の円礫を多量に含む、一部うミナ状に細分可能
22　2.5Y6/1 黄灰色砂質土、粘砂と細砂の互層
23　10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土、砂利多い＜瑞泉＞
24　10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土、砂利多い＜瑞泉＞＜F 層＞
25　10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土、砂利多い＜瑞泉＞

図 433　35-3Tr 西壁断面及び出土遺物

（4）35-4 トレンチ

①概要

35-4 トレンチは崖面下の低地部分に設定した調査区である。35-3・5 トレンチ間に設定し（5019-2 番地）、規模は幅 2 m、長さ約 10.5 m を測る。調査の結果、14 から 15 世紀以前の氾濫痕跡を確認し、以降で大規模な造成を伴う耕地開発がなされ、その後も再び大規模な氾濫を受けるが、15 ～ 16 世紀に再度耕地化が試みられ、近世初頭に現景観に繋がる嵩上げがなされるという土地履歴を確認した。崖の形成時期は 14 ～ 15 世紀以前であることは確実だが、崖面形成時期をとらえることはできなかった。出土遺物は 28 ℓコンテナで 4 箱を数える。

②層序及び検出遺構・出土遺物

図 434 ～ 436 に基づき、報告する。最深部は東端部で約 2.5 m掘り下げたが、基盤層には至らず、掘り下げ最下位の標高 11.5 m付近では拳大の小礫や円礫を多く含む灰黄褐色粗砂、にぶい黄橙色砂質土を認める（B 層、13.14 層）。同層位は崖面際では標高 13.3 m付近まで上がり、旧地形とは逆の西に傾斜し、層厚の細砂（10 層）、ラミナ地積（11 層）、細砂（12 層）、砂質土（13 層）が連続的に堆積する。微高地縁辺部の縄文晩期の包含層と土質は近似するが、明らかに堆積方向が異なり、小礫を包含することから、河川の氾濫による埋積土と判断できる。その上面レベルは緩川側に向けてやや強く傾斜する。埋め戻し時に断割調査による遺物検出に努めたが、遺物の出土は確認できなかった。

その上位にはにぶい褐色粘質シルトや褐色粘質土を基調とした多様な埋土を認める（C 層、16. 17. 19 ～ 22 層）。褐灰色やにぶい黄橙色粘質土ブロック等を多く含み、磨滅痕のない土器・瓦も多く包含する。C 層は微高地上面を大規模に削平し、その土で河川氾濫により形成された低地を埋め戻した土と考えられ、出土遺物は元来微高地上の遺構や包含層に帰属するものと考えられる。20 層の上面は撹拌を受けたように連続的に乱れ、牛馬による踏み込みの可能性が高く、埋め戻しの目的は低地部分の耕地化であったと推測できる。出土遺物は 8 ～ 13 世紀頃に属するものが多いが、765 ～ 778 に図化したように、14 から 15 世紀前後に属する遺物も少量認め、本層位の形成年代を示す。図化した遺物は 8 から 11 世紀に属する遺物を選択的に除き、12 世紀以降の遺物を中心に抽出した。土師質土器鉢（774）、土師質土器足釜（775. 776）が最も新しい時期を示す。

C 層の上位には 5 cm以下の円礫を多く含む黄灰色粘質砂を認め（D 層、9 層）、再度氾濫を受けたと推測できる。さらにその上部には一部黄灰色粘土ブロックを含む灰黄褐色粘質土が堆積する（E 層、8. 15. 18. 30 層）。751 ～ 764 に本層位出土遺物を図化した。8 から 11 世紀に属する遺物を選択的に除き、12 世紀以降の遺物を中心に抽出した。古相の遺物を含め、いずれも磨滅痕を認めない。12 ～ 13 世紀の遺物が多いが、土師質土器摺鉢（759）、土師質土器足釜（760. 761）は 15 から 16 世紀代の所産と考えられ、本層位の形成時期を示す。氾濫後に生じた凹凸を埋め戻した造成土であり、再度の耕地化が図られたと考えられる。なお、35-3 トレンチで検出した崖際の礫敷きは本調査区では確認できないが、18・30 層がやや不自然な堆積を示し、標高もほぼ同等であることから、同層位は崖際に敷設された道路状施設の痕跡かもしれない。

E 層上部には連続する水田を認める（F 層、4 ～ 7 層）。少なくとも 3 度の嵩上げが確認できる。748・749 はF層出土遺物である。748 は肥前系磁器白磁皿とした。ピンホールを認め、17 世紀代でも前半に属する可能性が高く、F 層の帰属時期を示す。さらに、その上部に近現代の水田層を認める。

なお、段丘崖下位の低地には 3 本のトレンチ（35-3 ～ 5 トレンチ）を設定しており、小結は 35-5 トレンチで一括する。

（5）35-5 トレンチ

①概要

35-5 トレンチは崖面下の低地部分に設定した調査区である。35-4 トレンチの北東側、29-5 トレンチの南西側に設定した（5019-1 番地）。規模は幅 2 m、長さ約 12. 4 m を測る。調査の結果、14 から 15 世紀以前の氾濫痕跡を確認し、以降で大規模な造成を伴う耕地開発がなされ、その後も再び氾濫を受けるが、15 から 16 世紀に再度耕地化が試みられ、近世初頭に現景観に繋がる嵩上げがなされるという土地履歴を確認した。崖の形成時期は 14 ～ 15 世紀以前であることは確実だが、形成時期は判然としない。出土遺物は 28 ℓコンテナで 6 箱に達する。

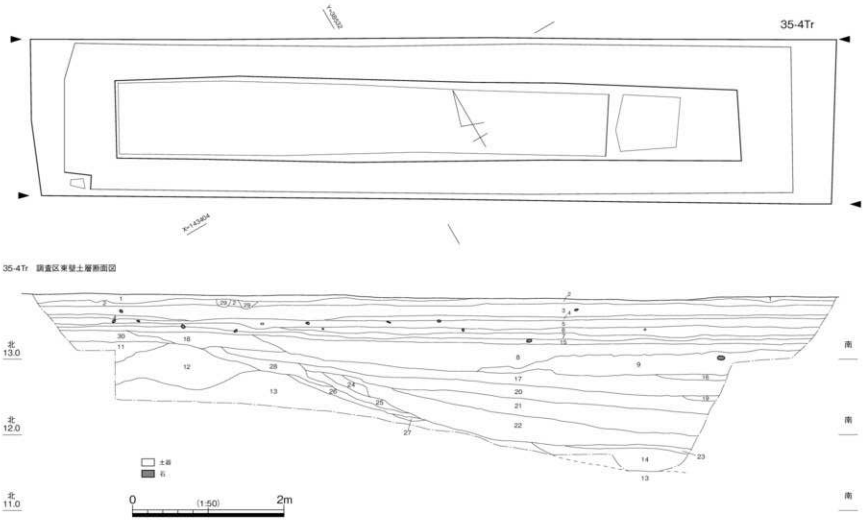
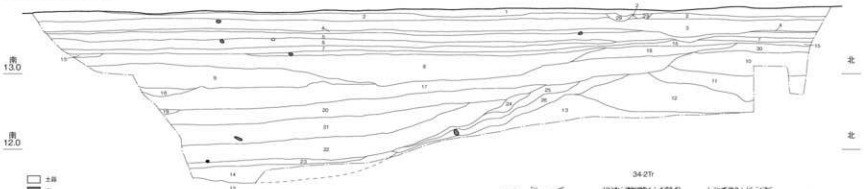
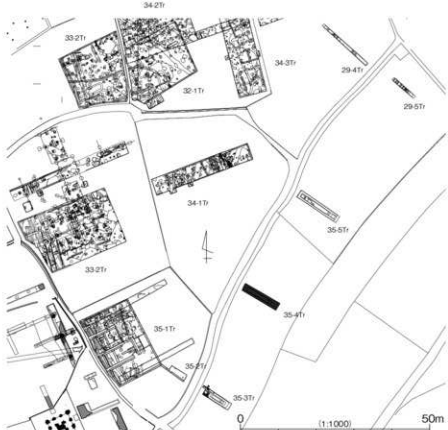


図 434　35-4Tr 平断面図

35-4Tr 調査区西壁土層断面図





1 ＜現耕作土＞
2 10YR7/6 明黄褐色～7.5YR6/6 橙色粘土＜現床土＞
3 10YR6/2 灰黄褐色粘質シルト、粘性高い＜造成土＞
4 10YR6/3 にぶい黄橙色砂混じり粘質シルト旧耕作土＞＜4～7：F 層＞
5 2.5Y5/1 黄灰色砂混じり粘質土、10YR6/6 明黄褐色黒化褐と 10YR5/1 褐灰色粘質砂と 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土ブロックをまばらに多く含む＜旧耕作土＞
6 10YR5/1 褐灰色粘質砂、10YR6/6 明黄褐色黒化褐と 10YR5/1 褐灰色粘質砂と 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土ブロックをまばらに少量含む＜旧耕作土＞
7 7.5YR5/3 にぶい褐色粘質砂＜鉄分流雲層＞
8 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト、しまり悪い、1 cm以下の小礫をまばらに少量含む＜E 層＞
9 2.5Y5/1 黄灰色粘質砂、5 cm以下の円礫を多く含む、しまり悪い＜辺集土＞＜D 層＞
10 10YR6/4 にぶい黄橙色細砂、しまり悪い（軟質）、10YR6/1 褐灰色粘質土ブロックをまばらにわずかに含む＜辺集土＞＜10～14：B 層＞
11 10Y7/1 灰白色シルトと 10YR7/4 にぶい黄橙色細砂のラミナ堆積＜辺集土＞
12 10YR6/3 にぶい黄橙色粘質土、細砂、粗砂の互層＜辺集土＞
13 10YR6/3 にぶい黄橙色砂質土、こぶし大以下の円礫（砂岩）を多く含む＜辺集土＞
14 10YR6/2 灰黄褐色粗砂＜辺集土＞
15 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト、砂混じり＜B 層上面の Mn 沈着層＞＜E 層＞
16 10YR5/2 灰黄褐色粗砂混じり粘質シルト＜16・17：C 層＞
17 7.5YR5/4 にぶい褐色粘質シルト、2 cm以下の小礫を少量含む＜辺集土 or 埋め土＞
18 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質シルト、粗砂混じり＜E 層＞
19 10YR5/3 にぶい黄褐色粗砂混じり粘質シルト＜辺集土＞＜19～22：C 層＞
20 上面に 10YR6/3 にぶい黄橙色粘質土ブロックを詰める、上面が腰外を受けた状態で層序が乱れる→水田面か
21 7.5YR4/3 褐色粘質土、10YR6/4 にぶい黄橙色粘質土、10YR5/1 褐灰色粘質土ブロックをまばらに少量含む、瓦・土器を一定量含む、しまり悪い（ボソボソ）
22 10YR5/1 褐灰色粘質土、10YR6/4 にぶい黄橙色粘質土ブロックをまばらに多く含む、しまり悪い（ボソボソ）、瓦・土器を一定量含む、スラグを少量含む
23 7.5Y5/1 灰色～2.5Y4/2 暗灰黄色混砂粘質土＜23～28：B 層＞
24 10YR4/2 灰黄褐色粘質土、こぶし大以下の小礫を含む
25 10YR6/3 にぶい黄橙色粘質シルト、10YR5/1 褐灰色粘質土ブロックをまばらに少量含む
26 7.5YR4/1 褐灰色粘質土、砂・小礫を多く含む
27 2.5Y5/1 黄灰色砂質土
28 7.5Y3/2 オリーブ黒色砂混じり粘質シルト、2.5Y6/3 にぶい黄色粘質シルトブロックをまばらに多く含む
29 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土、砂利多い＜暗黄＞
30 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト、2.5Y6/1 黄灰色粘質土ブロックをまばらに多く含む＜E 層＞

図 435　35-4Tr 西壁断面図

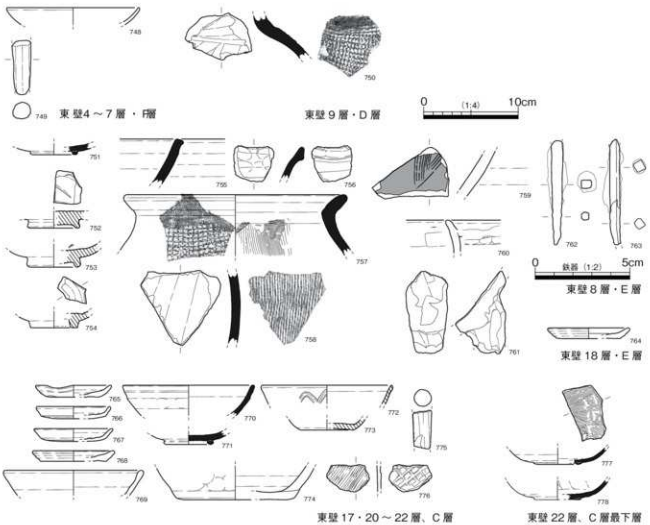


図436　35-4Tr包含層出土遺物

②層序及び検出遺構・出土遺物

図437・438に基づき、報告する。最深部は東端部で約2.7m掘り下げたが、基盤層には至ってない。掘り下げ最下位の標高11.2m付近では粗砂、シルト、粗砂の連続堆積を認め、その上位には拳大以下の円礫を多く含む灰黄褐色砂質土が堆積する（B層、39～42.45層）。同層位は崖面際では標高13.2m付近まで上がり、小円礫を含むにぶい黄褐色粗砂混じりシルト（43層）、粗砂・円礫のラミナ堆積層（44層）が連続堆積する。微高地縁辺部の縄文晩期の包含層と土質は近似するが、小円礫を多く含み、上位からの堆積層ではなく、河川氾濫土であることは明白である。B層の上面レベルは崖際3m付近では綾川側に向けてやや強く傾斜する。崖面形成の要因となった氾濫に伴う埋積土と考えられるが、遺物の出土は確認できない。

その上位には灰黄褐色粘質土や褐灰色粘質土を基調とした多様な埋土を認める（C層、28～31.37.38層）。褐灰色や黄色系粘質土ブロック等を多く含み、磨滅痕のない土器・瓦も多く包含する。前述してきたように、C層は微高地上面を大規模に削平した土で河川氾濫により生じた低地を埋め戻した土と考えられ、その目的は低地部分の耕地化であったと推測できる。出土遺物は8から13世紀頃に属するものが多いが、791～801に図化したように、14から15世紀前後に属する遺物も少量認め、本層位の形成年代を示す。図化した遺物は8から11世紀に属する遺物を選択的に除き、12世紀以降の遺物を中心に抽出した。土師質土器小皿（791）、土師質土器足釜（798.799）が最も新しい時期を示す。C層中には炭化物を多く包含する埋土を確認した（32～36層）。平面形は歪な形状を呈し、断面形状は皿状を呈し、底面中央付近のみ逆台形状に浅く窪む。埋土は炭化物の互層で、焼成により赤変した硬化面も認める。802～808は本層位出土遺物である。土師質土器坏（802）は12から13世紀に属するが、外面に格子叩きを認める土

師質土器鍋は14から15世紀頃の所産と考える。鉄釘（808）も出土するが、鉄滓や鍛造剥片等は確認できず、鉄器を製作した可能性は低いと考える。C層を埋め戻す途中で火を用いた何らかの造作を行ったと考えられるが詳細は不明である。

C層の上位東半には粗砂とシルトの互層を認め（D層、20～27層）、再度氾濫を受けたと推測できる。円礫を含むが、1cm以下の小円礫が多く、氾濫は比較的緩やかであったようだ。土師質土器羽釜（790）が出土しており、形骸化した鍔部から15世紀前後の所産と考えたい。

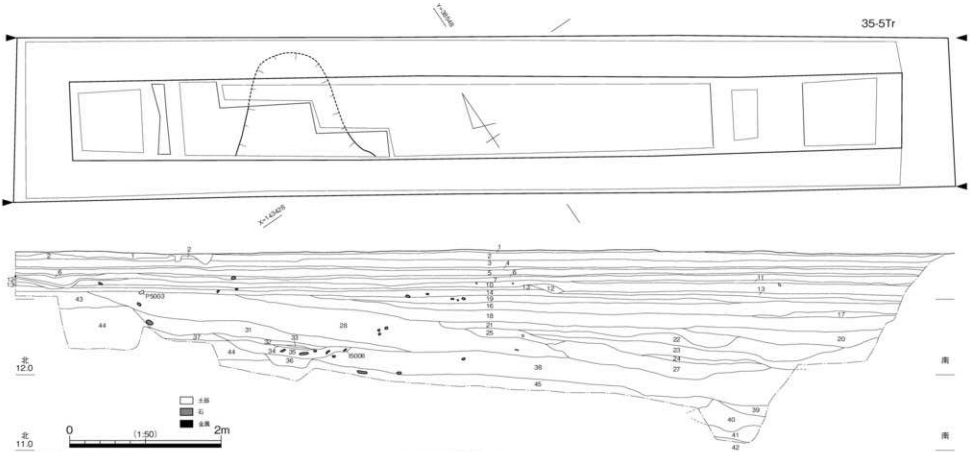
DないしC層の上部には灰黄褐色ないしにぶい褐色粘質シルトないし粘質砂が堆積する（E層、16～19層）。連続する水田層の可能性も残すが、氾濫後の埋め戻し土と考え、再度の耕地化に伴う造成土と判断した。786～789は本層位出土遺物である。8から11世紀に属する遺物を選択的に除き、12世紀以降の遺物を中心に抽出した。最上層から出土した肥前系陶器皿（786）は上位層からの沈み込みの可能性が高い。出土遺物からは12～13世紀の帰属時期となるが、下位層出土の土師質土器羽釜（790）に後出することから、15から16世紀の形成年代が想定できる。なお、崖際のE層上端レベルは13.1m前後を測り、35-3・4トレンチの13.3～13.4mに比して低くなり、東に向けた旧地形の傾斜を反映する。

E層上部には連続する水田を認める（F層、4～13層）。床土と耕作土のセットが少なくとも3単位認め、度重なる嵩上げが行われており、前述したE層上面の標高差が解消される。779～785はF層出土遺物である。12から13世紀に属する遺物が多いが、混入と考えられ、E層最上位で検出した肥前系陶器皿（786）の年代観から、17世紀前半以降の連続する水田層と考えられる。さらに、その上部に近現代の水田層を認める。

③小結

最後に、段丘崖の下位の低地に設定した35-3～5トレンチの調査成果について、図439に基づいてまとめる。35-3～5トレンチの崖際ではB層の上面が標高13.2m前後を測り、その上面は緩川側に向けてやや強く傾斜し、東端部付近では標高12m前後となり、流路を反映するように西から東にわずかに傾斜する。B層は拳大以下の円礫を多く含む砂質土を基調とし、ラミナ堆積や微高地からの傾斜とは逆方向の堆積状況を示す層位を認め、A層とした微高地縁辺部の基盤層ではなく、河川氾濫土であることは確実である。遺物は検出できず、その形成時期は不明だが、少なくとも14から15世紀以前の河川氾濫に伴う堆積土と考えられ、崖面際まで延び、基盤層（A層）を削り込むことが想定できることから、開法寺東方地区に展開する微高地の南辺を削り取り、崖面を作り出した河川氾濫に伴う堆積土と考えられる。それにより生じた窪みにC層を認める。ローリング痕のない8から15世紀の土器を多く包含し、基盤層ブロックや遺構埋土の可能性が高い黒褐色・褐灰色粘質土ブロックを含むことから、微高地上面の削平土で造成した可能性が高く、遺物の多くは元来微高地上面の遺構や包含層に含まれていたものと捉えられる。45-4トレンチ20層で確認したように牛馬の踏み込みと考えられる撹拌層を認め、造成の目的は耕地化であった。出土遺物の年代観から造成は14から15世紀を想定したい。開法寺東方地区では13世紀末以降の遺構は稀薄であり、微高地上はそれ以降に耕地化が図られたと考えられ、その流れで14から15世紀に低地の耕地化を進めたと考えられる。谷池である開法寺池の築造は当該期ないし微高地の耕地化段階の可能性が高い。C層形成後、再度氾濫を受け（D層）、C層の上位が削り取られたため、再度大規模な造成を行い（E層）、耕地の再開発を進めたと考えられ、当該期には崖面際に道路状施設が設けられた可能性が高い。出土遺物の年代観から、再開発は15～16世紀頃、D層形成に伴う氾濫は15世紀頃であろう。その後、連続する水田層を認め（F層）、現景観に繋がる大規模な開発が行われたと考えられる。F層の最下層の出土遺物の年代観から、その開発時期は近世初頭（17世紀前半頃）であったと推測できる。開法寺東方地区の現水田の主水源は開法寺池と3.5kmほど離れた四手池であり、微高地上は両者を併用するが、低地部分は後者の水掛りとなる。四手池から本村までの水路は幾筋もの谷筋や蜘蛛手状に延びる丘陵をわずかな傾斜角度を維持しながら水を引き入れており（四手池用水）、かなり大規模な土木事業であったと考えられる。本水路の設置はおそらく当該期に行われたと考えられる。今回の低地部分の調査ではこうした低地部分の土地開発履歴が明らかになった点は大きな成果である。

一方、段丘崖の形成時期は判然としない。ここで注視すべきは29-4・5トレンチの調査成果である。低地部分に設



1 ＜現耕作土＞
2 10YR7/6 明黄褐色～7.5YR5/6 明褐色粘土＜現床土＞
3 10YR6/2 灰黄褐色砂混じり粘土＜造成土＞
4 10YR6/3 にぶい黄橙色粘質砂＜旧床土＞＜4～13：F 層＞
5 10YR5/1 褐灰色粘質砂＜旧耕作土＞
6 10YR6/3 にぶい黄橙色粘質砂＜旧床土＞
7 2.5Y5/1 黄灰色粘質シルト＜旧耕作土＞
8 10YR6/3 にぶい黄橙色粘質砂＜旧床土＞
9 10YR6/1 褐灰色粘質シルト
10 2.5Y6/1 黄灰色粘質砂、10YR6/6 明黄褐色黒化縁と 10YR6/3 にぶい黄橙色粘質土ブロックをまばらに多く含む
11 10YR2/2 にぶい黄橙色粘質シルト、細砂
12 暗褐　10YR6/4 にぶい黄橙色粘質土
13 鉄分沈着層　7.5YR5/4 にぶい褐色粘質砂
14 16 層上面の Mn 沈着層＜E 層＞
15 暗褐 7　10YR6/1 褐灰色粘質砂、砂粒多い＜F 層＞
16 10YR6/2 灰黄褐色粘質砂、しまり悪い＜16～19：E 層＞
17 2.5Y6/2 灰黄色細砂混じりシルト
18 2.5Y5/3 黄褐色粘質シルト、しまり悪い、ごぶし大の円礫をまばらに少量含む
19 7.5YR5/3 にぶい褐色粘質シルト
20 10YR6/3 にぶい黄橙色混粘粘質シルト、2 ㎝以下の小円礫をわずかに含む＜20～27：沼尾土＞＜20～27：D 層＞
21 2.5Y5/1 黄灰色粘砂、2.5Y6/2 灰黄色粘質シルトブロックをまばらに一定量含む
22 2.5Y5/3 黄褐色シルト、粘砂を含まない
23 2.5Y5/2 暗灰黄色粘砂、ごぶし大以下の円礫、粗砂を多く含む
24 2.5Y5/3 黄褐色粘質シルト
25 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト、粗砂を多く含む
26 2.5Y5/2 暗灰黄色粘砂、1 ㎝以下の円礫をわずかに含む
27 2.5Y7/1 灰白色粘砂、1 ㎝以下の円礫をわずかに含む
28 10YR4/2 灰黄褐色粘質土、10YR5/1 褐灰色粘質土ブロックをまばらに多く含む、土器・瓦を多く含む＜26～31：C 層＞
29 7.5YR4/2 灰褐色粘質土、10YR6/4 にぶい黄橙色・2.5Y4/1 黄灰色粘質土ブロックをまばらに多く含む、土器・瓦を多く含む
30 7.5YR5/2 灰褐色粘質土、10YR6/4 にぶい黄橙色・2.5Y4/1 黄灰色粘質土ブロックをまばらに多く含む、土器・瓦を多く含む
31 7.5YR4/3 褐色粘質土、10YR6/4 にぶい黄橙色・2.5Y4/1 黄灰色粘質土ブロックをまばらに多く含む、土器・瓦を多く含む
32 10YR6/3 にぶい黄橙色細砂、10YR6/4 にぶい黄橙色・2.5Y4/1 黄灰色粘質土ブロックをまばらに多く含む、土器・瓦を多く含む＜32～36：崩壊物包含層＞
33 7.5YR5/2 灰褐色粘質土、強成による硬化
34 7.5Y6/1 灰色粘砂
35 7.5YR4/2 灰褐色粘砂混じり粘質土、炭化物をまばらに多く含む
36 10YR3/2 黒褐色砂質土、炭化物をまばらにわずかに含む
37 10YR5/3 にぶい褐色混砂粘質土、10YR5/3 にぶい黄橙色粘質土ブロックをまばらに多く含む＜37・38：C 層＞
38 7.5YR4/2 灰褐色粘質土、7.5YR5/1 褐灰色～10YR5/3 にぶい黄橙色粘質土ブロックをまばらに多く含む、土器・瓦を多く含む
39 2.5Y5/1 褐灰色粘砂、ごぶし大以下の円礫を多く含む、10YR4/2 灰黄褐色粘質土をまばらに多く含む＜39～45：B 層＞
40 10YR5/1 褐灰色粘砂
41 7.5Y6/1 灰色粘質シルト
42 2.5Y6/1 黄灰色粘砂
43 10YR5/3 にぶい黄橙色粘砂混じりシルト、5 ㎝以下の円礫を少量含む
44 粘砂・円礫の互層、ラミナ状、円礫はごぶし大以下
45 10YR6/2 灰黄褐色砂質土、ごぶし大以下の円礫を多く含む

図 437　35-5Tr 平断面図

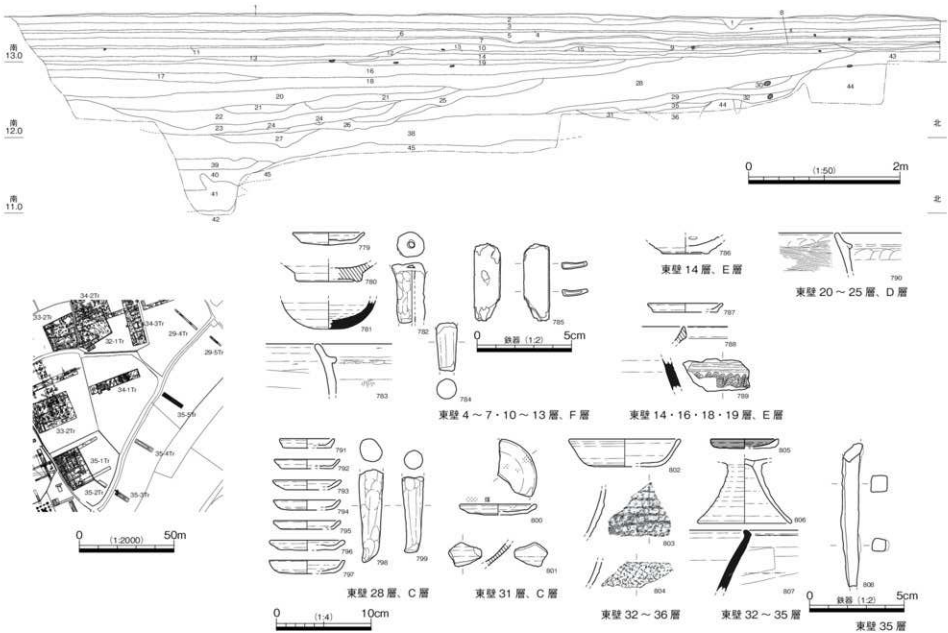
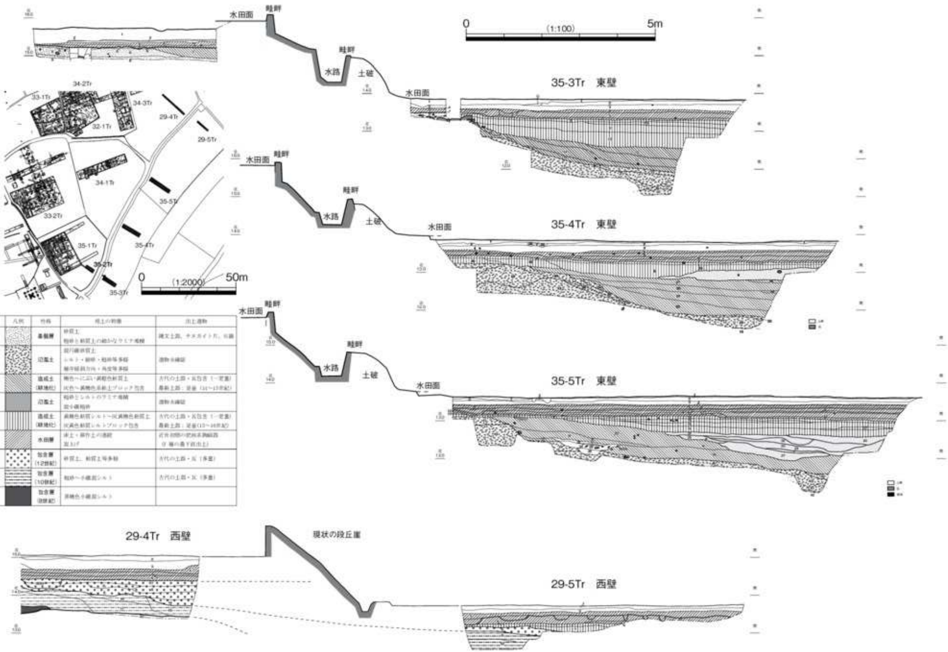


図 438　35-5Tr 西壁断面図及び出土遺物



	凡例	性格	埋土の特徴	出土遺物
A層		基盤層	砂質土 粗砂と粘質土の細かなラミナ堆積	縄文土器、サヌカイト片、石鏃
B層		氾濫土	砂円礫砂質土 シルト・細砂・粗砂等多様 堆積傾斜方向・角度等多様	遺物未確認
C層		造成土 (耕地化)	褐色～にぶい黄橙色粘質土 灰色～黄褐色系粘土ブロック包含	古代の土器・瓦包含（一定量） 最新土器：瓦器（11～13世紀）
D層		氾濫土	粗砂とシルトのラミナ堆積 混小礫粗砂	遺物未確認
E層		造成土 (耕地化)	黄褐色粘質シルト～灰黄褐色粘質土 灰黄色粘質シルトブロック包含	古代の土器・瓦包含（一定量） 最新土器：瓦器(13～16世紀)
F層		水田層	床土・耕作土の連続 嵩上げ	近世初期の肥前系陶磁器 （F層の最下部出土）
G層		包含層 (12世紀)	砂質土、粘質土等多様	古代の土器・瓦（多量）
H層		包含層 (10世紀)	粗砂～小礫混シルト	古代の土器・瓦（多量）
I層		包含層 (9世紀)	黒褐色小礫混シルト	

図 439　35-2 ～ 5Tr 土層堆積比較

定した 29-5 トレンチでは崖際の標高 13.2 m前後に 35-3 ～ 5 トレンチで確認したB層上面はみられず、微高地上面から旧地形に合致した傾斜の包含層を認める（G．H層）。G層は 12 世紀、H層は 10 世紀頃の帰属時期が想定されており、調査時から古代末の段丘崖の存在に再考の余地があることが指摘されてきた（香川県埋文セ 2013）。本次調査の所見を加味すると、29-5 トレンチは微高地の南斜面から東斜面に位置し、確認された層位は指摘どおり、旧地形の傾斜に沿った包含層と理解できる。周辺地形を考慮すると、B層や段丘崖形成に伴う大規模な氾濫は、開法寺東方地区の微高地に繋がる丘陵にぶつかり、開法寺地区・開法寺東方地区の中央より西側の南辺を削り込みながら北東に流下するが、35-5 トレンチと 29-5 トレンチ間で緩やかに屈曲し、地名調査でヒガシガラと呼ばれた県道 33 号線より東に抜け、その後北に流下した状況が復元できる。よって、開法寺東方地区の南辺に認める崖面は中央から西半部は段丘崖、東端部付近は旧地形の傾斜が遺存するが、近世初頭の耕地開発（合筆）により、段丘崖に連続するような崖面風の段差が生じたと理解できる。段丘崖の形成時期は出土遺物から特定できないが、歴史地理学の成果に依拠し、古代末を想定しておきたい。開法寺東方地区の変遷を考慮すると、8 世紀後葉から 11 世紀前葉まで大型建物群で構成された施設が継続されるが、以降、大型建物群は姿を消し、屋敷地の集合体へ変化しており、こうした変質の一要因として氾濫による微高地南辺の削平がある仮定すれば、B層形成に伴う氾濫は 11 世紀頃であったと捉えることもできる。